

569.22-154ㄅ



722

54

一九三九年度の佛印鑛業及化學工業

社團法人海外鑛業協會編



始



105

929

150

昭和十七年七月

一九三九年度の佛印鑛業及化學工業

社団法人 海外鑛業協會

569.22
I.54

はしがき

本書は佛文 *L'Industrie minérale & chimique de l'Indochine en 1939* (一九三九年度の佛印鑛業及化學工業) を協
會に於いて譯出したもので第三章は佛印鑛業情勢第二號として既刊のものであるが今回完譯に際し改訂を施し、再録し
た次第である。匆卒の際、譯文の不適當、誤謬なきを保し難い。且又技術的に見てどうかと思はれる所が多々あるだ
らと思ふが大方の叱正を待つて完璧を期し度いと思ふ。



社団法人 海外鑛業協會調查部

(擔當者 植井進)



一九三九年度の佛印鑛業及化學工業

目次

第一章 鑛業概要	一
A 鑛業法規	一
B 箇人許可	二
C 探鑛許可證	二
D 鑛業コンセッション(鑛區)	四
E 大統領令に依る一般コンセッション(留保地帯と留保物資)	八
F 鑛山管理	一〇
G 生産擴充	二〇
H 税制	二六
第二章 燃料鑛業	二八
A 市場の状況—生産—供給	二八
一、粗炭の生産高	二八

二、生産高の内譯	100
三、煉炭及骸炭	101
四、海外市場	102
五、内地市場	103
六、價格の變動	104
B 無烟炭鑛業	105
C 瀝青炭及有煙炭鑛業	106
D 技術的考察	107
第三章 金屬鑛業及其他鑛業	108
A 錫及ウオルフラム鑛業	109
B 亞鉛	110
C 鉛・銀	111
D 金鑛業・砂金採集	112
E 鐵及マンガン鑛業	113
F アンチモニー	114
G 燐	115
H 凍石	116

I ボーキサイト	117
J 寶石類	118
K 黒玉	119
L 硫黄	120
M 其他鑛物	121
第四章 鑛山諸施設	122
A 發電設備—發生エネルギー	123
B 精煉所	124
第五章 鑛山従業員、労働條件、鑛山衛生及救済施設	125
A 労働法規	126
B 實數と内譯	127
C 労働力不足	128
D 歐人職員	129
E 事故	130
F 社會政策の適用	131
第六章 石油類(炭化水素類)	132
第七章 其他の鑛産物	133

A	セメント	104
B	耐火煉瓦	106
C	鹽	107
D	鑛泉	108
E	採石場	108
F	鑛山部附屬資料試驗所	110
G	蒸氣機關	111
第八章 化學工業		
A	鑛山部附屬化學實驗所	111
B	酸素アセチレン	113
C	鹽素	114
D	油脂、石鹼、グリセリン	115
E	硝子工業	116
F	製紙業	117
G	吸着炭	118
H	火藥及花火製造	119
I	鑛山用火藥、雷管、導火線の消費量	120

第九章 印度支那の諸會社		
A	總括	127
B	諸會社の情況	130
結語		
附錄 一九四〇年一月乃至四月四ヶ月間の生産高		
圖	表	136

第一章 鑛業概要

A 鑛業法規

一九三九年一月九日附總督令に依りて一九三八年九月十六日附總督令を取消安南及老越に留保地帯を設けた。
一九三九年八月十日附總督令は加里及附屬鹽類の探鑛權を留保した。
一九三九年五月三十一日附總督令は一九三八年九月十三日附總督令を取消、個人許可委員會を設立した。
一九三九年十一月七日附總督令は鑛區圖 (Plans de concession) の作成に關する一九二九年八月三十一日附及一九三〇年七月五日附總督令を改正した。手續を簡易化し動員令に依りて手不足を來せる鑛山局に對して餘裕を與へた。
一九三九年五月十七日附總督令は輸出鑛物に對して三%の從價國防稅を制定した。右法令は一九三九年五月二十七日附大統領令に依りて承認せられた。省令により地方行政長官は金採掘の利潤に對して二十%の稅を制定することを命令した。總督は之等の命令を一九四〇當初に繰越すことを許可せられた。

一九三九年三月七日附及四月十一日附總督令は錫、ウオルフラム、亞鉛及コバルトの輸出を禁止した。

大戰以來佛本國に於いて輸出禁止に關する條文の決定を見るや、一九三九年十二月十一日附總督令は之等總督令を取消し、鑛産物の輸出禁止の適用制限に對して新手續を決定した。右は鐵鑛及マンガン鑛に關する一九三八年十月二十六日附總督令を無効にするものである。

一九三九年八月十五日附大統領令は政府會常設委員會の一九三九年八月四日附議決を承認し、鐵鑛及マンガン鑛輸出に對して従價二%の許可税を制定した。その税は三%の軍備税に附加されるものである。總督一九三九年十二月十一日附決定は錫鑛のシンガポール向出鑛を全面的に許可した。鑛業法規の改正は考究中であつたが、大戰中本事業を繼續することは不可能となつた。

B 簡 人 許 可

a 一切の物資。但し炭水化物を除く。

一九三五年三月三十日附大統領令に依る許可件数を示せば左の通りである。
 一九三五年 一九三六年 一九三七年 一九三八年 一九三九年
 三三 一〇四 一八二 一二四 一二三

一九三九年に於て許可申請願下一件、新規提出件數一四四件あり、結局一四〇件(内三七件は一九三八年出願)の十七件は却下され、所持者死亡したる者四名あり、合計五六一件の有權者が存在することになる。

一九三五年度の許可は一九四〇年を以て期限満了となる。
 b 炭水化物。申請無し、目下有效許可件數一〇である。

簡人許可有權者名は一九四〇年一月二十七日附印度支那官報第七號に公表しあり。

C 探 鑛 許 可 證

過去數年間の一月一日現在の許可證數を擧ぐれば左の通り。

	一九一四年	最一九三〇年大	最一九三六年少	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
東 京	二、六八〇	三、八四七	五一八	六三二	九二一	一、一五七	一、二二三
老 總	三一五	七、四三六	二一九	一二二	一一二	七五	七〇
安 南	九六	三、三一九	一五七	二三九	三〇八	三六七	三二一
東 埔 塞	七〇	二、七九二	一二	八	一五	二一	一七
交趾支那	三〇	二九一	〇	〇	〇	〇	〇
計	三、一九一	一七、六八五	九〇六	一、〇〇〇	一、三五〇	一、六二〇	一、六三一

一年間の許可證數は左の通り。

	一九一四年	最一九二九年大	最一九三四年少	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
東 京	二二八	二、三三五	一一四	二六〇	二五七	四〇四	四九六	三三一
老 總	一四	四、三六三	三五	七四	一三	二五	三七	八

安南	一〇二、〇五一	五四	六三	一一二	一二九	一二六	七七
東埔寨	四、五九五	一	一	六	三	一二	一
交趾支那	一	二四三	〇	〇	〇	〇	〇
合計	二五七二一、五八七	二〇四	三九八	三八八	五六一	六六一	四一七

一九三九年の許可證數一、六〇〇の中約九三は現地作業を實施して居る。(後述の表を参照せよ)
 炭水化物に對しては新規許可證の登録されたるものなし、探鑛權を留保せられたるに基く。(大統領令による鑛區(コンセツション))

D 鑛業コンセツション(鑛區)

コンセツション(鑛區)の内譯は左の通り。

種別	一九三九年に創設せられたるもの	一九四〇年一月一日現在	面積(單位一、〇〇〇ヘクタール)
固形燃料	〇	一〇四	一一七・二
亞鉛、鉛、銀	〇	三一	一九・二
錫、ウオルフラム	〇	一二三	五八・三

金	〇	〇	三〇	一六・五
石	〇	〇	四	三・五
鐵、マンガン、チタニウム	〇	〇	八	三・三
クロム	〇	〇	一四	七・二
マンチモニ	〇	〇	一	〇・九
石灰	〇	〇	一六	四・七
石	〇	〇	三	一・八
黒玉	〇	〇	一	〇・一
凍石	〇	〇	三	一・八
ボーキサイト	一	〇	一	〇・一
重晶石	〇	〇	〇	〇
合計	一	三三九	二三四・六	

之等鑛區中七六は曩に棄權又は失權した。まだ取消となつたものではない。状況を整理の爲め、一九四〇年六四鑛區を競賣に附し競賣の結果が無なる時は無効とすることとした。

許可申請數

東京	一九二九年 最大 一一六	一九三五年 最少 四	一九三六年 五	一九三七年 一九	一九三八年 二七	一九三九年 六六
----	--------------------	------------------	------------	-------------	-------------	-------------

第二テック (Teck II) [同	右]	一九二四、七、三〇	同右	金
テイラコー (Tiracou) [同	右]	一九二七、一〇、二五	同右	鉛 及 銀
追 加				
ダイ・ファット (Dai-Phat) [ハイ・シオン (Hai-duong)]		一九三九、八、一七	留保	ボーキサイト

E 大統領に依る一般コンセッション、鑛區及許可證 (留保地帯と留保物資)

(一九三八年七月二十八日附大統領令)

右の鑛區には二種類あり、一つは總督との協定による一般的許可證にして之は大資本會社が金の探鑛をなさんとする場合廣大なる地域に對して許可されるものである。

他は、留保地帯に於て大統領令によりて許可されるもので、一般に留保物資以外の物質に對して有效なるものである。金探掘一般許可證

一、一九三八年九月二十日附、植民地鑛業會社 (Compagnie minière coloniale) が安南のトラミ (Tra-My) 地方一面積三三五・二四五ヘクタールに對する申請—一九三九年六月七日附大統領令に依る承認を得る爲め協定一件書類を巴里に發送した。其後の経過不明。

二、一九三九年三月十七日附、老鷹のカム、クツト探鑛會社 (Société de Prospection de Cam-Kent) 後に印度支那鑛業探鑛開發會社 (Société d'Études et d'Exploitations minières de l'Indochine) の名義に變更—の申請、印度支那に於ける指令は一九四〇年二月末を以て満了する。面積三六五、八〇〇ヘクタール。

コンセッション鑛區

一、一九三九年五月六日附、印度支那鑛業、農業開發會社 ((Société indochinoise d'Exploitations minières et agricoles) ボン・ミエ (Bông-Miê) に於て其の開發中なるも極めて杜撰なる書類と、圖面缺如せる金鑛區を規正すべく申請した。大統領令に依る鑛區に對する解決と舊鑛區の無効處分は留保された。書類は一九三九年六月七日附佛國へ送附した其後の経過不明、申請面積一、四七五ヘクタール。

二、一九三九年四月十五日附、東京新設燐製造會社 ((Société nouvelle des Phosphates du Tonkin) は、二一六、五ヘクタールの鑛區を申請した。之はタイ・グユイエン (Thai-Nguyen) の留保地帯 (鐵) の隣に對して有效である。一九三九年五月十二日附、佛國へ送付、一九三九年八月七日附總督令は一九三九年十二月二十三日附官報に發表、面積二一六ヘクタール。

三、一九三九年七月二十七日附、同會社はバラセル群島の八島に對して申請、一九三九年八月二十九日附、佛國へ送付、其後の経過不明。

四、一九三九年八月三十日附、オーデ氏 (M. Audet) はドン・トリエ (Dông-Triên) の留保 (石炭) 地帯に於て燐の鑛區申請、一九三九年十一月十日佛國へ送付、其後の経過不明、面積六五〇ヘクタール。

五、一九三九年九月十八日、附オーデ氏はドン・トリエ (Dông-Triên) の留保 (石炭) 地帯に於て燐及鐵の鑛區申請、一九三九年十一月十日佛國へ送付、其後の経過不明、面積五、五九五ヘクタール。

六、一九三九年十一月十日附、ミツタール氏 (M. Mitard) はタイ・グユイエン (Thai-Nguyen) の留保 (鐵) 地帯に於て亞鉛鑛々區の申請、一九三九年佛國へ送付、面積九〇〇ヘクタール。

F 鑛山管理

鑛山部は鑛山、工業總監督局 (Inspection générale des Mines et de l'Industrie) の管轄に屬する。本局の機構は一九三八年十二月二十七日附大統領令に依りて設立せられ、一九三九年八月十六日附總督令の適用を受けてゐる。鑛山部自體の權限は左の如くである。

鑛石、鑛山及附屬工業に關する諸問題

炭水化物に關する諸問題 (液體燃料及潤滑油局)

爆發物に關する問題

化學工業並に吸着炭工業に關する問題

蒸氣機械

其他、勞働總監督局の權限を以て鑛山及採掘場の勞働監督權を有する。

大戰以來監督局は産業生産補給部となつた。之れが爲め其の權限は著るしく擴大された。鑛山部は或種の産業(統制)及生産物(配給)に關する凡ての問題を集中してゐる。其の任務は之等産業の圓滑なる運轉を確保し省の指導の下に生産を擴充せしむるにある。其他、配給生産品の供給が大戰の結果支障を來たさざる様處置するにある。其の職員の一部に動員令なければ、鑛山、産業總監督局の命に依り本局は左記佛國人又は同化人職員を包含することになつてゐる。

總監督局

局長

會計課長及會計課員

技術課囑託鑛山技師

産業部及造廠部

地質部

局長一名、地質學者 二名

鑛山部

主任技師部長 一名

河内支部在勤技師 三名

東部河内支部

西部河内支部

安南老邁支部 (戰爭が突發しなかつたら所在地は順化に移された筈である)

海防支部に在勤し沿海地方の統制 (特に石炭の) を確保する技師二名。右の中一名は在東京勞働監督局の權限を以て鑛山以外の勞働監督員を兼任する。

西貢支部在勤の技師 一名。

本職は本部が鑛業を除く産業に對して戰時統制をなすこととなりたる爲め、一九三九年十一月二十一日附總督令に依

り新たに設けられたものである。

本部の探鑛作業を擔當する技師 一名。
 化學實驗所長一名及化學者見習一名。

其他、河内に在勤し産業動員令に參畫し右に關する種々なる事務より生ずる諸問題を集中する技術二名。一名は、補給、配給、輸出に任じ他の一名は東京特務部及自守防衛部及液體、潤滑油局に勤務す。

結局、鑛山技師としては現職員は左の通り。

鑛山隊所屬の技術 二名(中一名は動員された)。

鑛山技師及技手十名(中二名は土着者)——中三名は一九四〇年一月一日附動員された。尙數名の技師が在職中動員されるであらう。

之の少い人員を以て、新たに鑛山部に歸屬されたる軍需品製造を確保する爲、從來の輸出統制及指導手續は出來得る限り縮少した。

鑛山部の新任務は戦後、極めて廣義に解釋せられるに至つた。採掘規則に準據することを嚴密に統制するよりは寧ろ産業利潤を防護して増産を全からしむるにある。斯くして同部は主産者に對し生産の確保と擴充に必要な協力を一層強力に要求し得ることゝなつた。

G 生産 擴充

次表は一九三八年及一九三九年度の生産應數(並に生産價格)を示す。大戦以來四ヶ月間の數字×3なる數字により

一九三九年九月以向の植民地の主鑛業者がなしたる生産協力を判斷するに足るであらう。

生産物	單位	生産		戦後四ヶ月間數字×3	勞務者(鑛山)		鑛山基準價格(1,000比弗)	
		一九三八年	一九三九年		一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
無煙炭	1,000 噸	2,274	2,554	2,821	43,218	41,838	17,835.5	19,744
褐炭	1,000 噸	5	5	5	96	3	50	115
瀝青炭	1,000 噸	5	5	5	96	1,133	444	517
計(石炭)	1,000 噸	2,284	2,564	2,831	43,310	43,971	18,385.5	20,264
含有ウオルフラム3	噸	1,633	1,498	1,505	15,100	6,181	4,638	5,394
含有鉛	噸	300	309	279	5,100	1,500	1,500	1,000
含有亞鉛	噸	5,121	5,867	6,334	530	584	328	328
精煉鉛	噸	10	5	10	530	584	328	328
銀	噸	60	5	?	647	994	3	2
金	噸	151	111	114	—	—	—	—
砂金採取評價	噸	170	110	?	—	—	620	450
鐵、マンガシ	1,000 噸	134	141	137	2,550	2,900	400	637
含有鐵	1,000 噸	27	68	38	2,550	2,900	—	—

含有マンガ	アンチモニー	凍	ボーキサト	重	黒	寶	計
1,000 吨	1,000 吨	吨	吨	吨	吨	吨	
1.1	1.7	0	0	0	0	0	
1.7	0.4	200	200	200	200	200	
0.4	0.4	200	200	200	200	200	
1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	
1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	
1	1	1	1	1	1	1	
1	1	1	1	1	1	1	

石炭の増産状態は10%となつてゐる。價額には大した變動は無い。少くとも戦前にはさうであつた。
一九三九年度の印度支那輸出總額は三四九、五〇〇、〇〇〇比弗に達した。
次表は鑛産物の重要性を示したものである。(單位百萬比弗)

玉	蜀	泰
一九三五年	一九三六年	一九三七年
一四・五	二九・四	四六・七
一九三八年	一九三九年	
五〇・六	三四・五	

米及米製品	ゴム	燃料	鉛	錫	金、寶石類、鐵等	計
六四・八	一三・七	九・九	〇・四	二・〇	〇・二	九・七
七六・四	二四・四	七・五	〇・六	二・八	〇・三	一一・五
一〇九・四	四六・六	八・九	〇・四	六・九	一・七	一七・九
一〇三	六一・九	一一・二	〇・五	八・五	三・六	二四・八
一三八・六	九五・六	一五・二	〇・六	一〇・三	二・〇	二八・一
二九六・八						

生産價格の概要を地方別に見れば次の如くである。大體に於て一九三八年の割合に比して著るしき差を認められない。

- 東京.....二五、一五〇、〇〇〇比弗
- 老 越(錫、砂金採取).....三、一〇〇、〇〇〇比弗
- 安 南(金、鐵、燐).....一、五〇〇、〇〇〇比弗
- 東 埔 塞(黒玉、寶玉類).....一一〇、〇〇〇比弗
- 計.....約三〇、〇〇〇、〇〇〇比弗

免税、通過貨物船々長の申告に依れば印度支那産の石炭、鑛石、金屬のスエズ經由運輸は次表の如くである。

石炭	一九三九年
石炭	一一二四、〇〇〇 觔
鑛石	一八三、〇〇〇 觔
鑛石	三、〇〇〇 觔
金	四、〇〇〇 觔
金	三、〇〇〇 觔
金	四、〇〇〇 觔

H 税 制

錫及ウオルフラムに對する税率は最高に達したが石炭は既に高率に課税せられてゐた爲め、大きな變化は認められな
い。然るに比例賦課金合計は一九三八年より20%高くなつてゐる(一九三五年の十倍高し)。この増加したる原因の一
部は増産に依り他は價格の騰貴(その結果として税率の高くなつたこと)に依るものである。

税の種別	一九三九年年度の生産物の				
	一九三五年度	一九三六年度	一九三七年度	一九三八年度	一九三九年度
比例賦課金	七八、八九八	九八、一五四	一二二、九六九	七一四、三七〇	八七五、二〇二
a、燃料	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算
b、其他の生産物	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算
計	一一八、三二二	一四三、六七〇	四〇四、二四六	一〇八三、三三三	一三二、一七一
地上賦課金	地方豫算	地方豫算	地方豫算	地方豫算	地方豫算
計	一四二、八〇〇	一〇九、四〇四	一一〇、八七二	一〇四、九三一	一一〇、六九五

ケバオ契約賦課金(東京)	一九三九年年度の生産物の				
	一九三五年度	一九三六年度	一九三七年度	一九三八年度	一九三九年度
探査許可證固定税	九、八七五	九、九五〇	一四、〇二五	一六、五二五	一〇、四〇〇
鑛區固定税(申請)	二〇〇	三五〇	一、二〇〇	一、八〇〇	三、八〇〇
(示令)	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算	一般豫算
計	二七三、〇四二	二六五、五〇四	五三三、五三三	二〇八、七八九	四三九、三六二

パイ・リン(Pai-Lin)の寶石類探掘業者の賦課金は、鑛山賦課金に繰入れられてゐるが、同地方官廳の権限に屬す
る。その額は約五〇〇比弗に過ぎない。
地上賦課金の内譯は左の通り。

東 京	七七、〇九六・八四
老 樫	二〇、〇二五・九四
安 南	一一、九七一・七八
東 埔 塞	一、六〇〇・八〇

比例賦課金に於いて「一九三九年度の生産物」とは鑛山部の一九四〇年に清算したる、一九三九年度の生産課税を謂ふ。
前述の諸税の他、土地占有税、電信線、電信所税、輸出統計税、衛生税、築港設備税、税關監視手當、用水税、蒸氣
機械點檢税、森林税等あり、但し之等諸税に對しては鑛山部は直接之れに關與せず、且つ收入豫算を有せず。
更に左の新規諸税を加へなければならぬ。之等も相當收入額に達する。

一切の輸出産物に對して3%の軍備税を課す。これは本年制定されたもの。
鐵及マンガン鑛に對して2%の認可附加税を課す。本年始めて設定されたもの。
地上賦課金を6%引上、東京地方戦時税とす。

第二章 燃料 鑛業

A 市場の狀況—生産—供給

一、粗炭生産高。一九三九年度の生産高は從來記録されたる生産高を遙に凌駕した。大戦以來更に一飛躍をなした。販路が生産高より大ではあるが勞力不足なるを以て生産高は無制限に増加する事は出来ない。之れが弊を補ふ爲め一層機械化を圖る一方、會社法（一九三九年九月三日附）をも適用してゐる。
植民地に於ては戦前より3%減少せる勞務者を以て一九三九年度より12%増産してゐる。

	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	戦後四ヶ月
MV (揮發分)三乃至一〇%(1)	一七四〇・五	二一五〇	二二六五	二二八〇	二五六一	二八二二
MV (揮發分)一五乃至四五%	三四	三六	四三	五五	五四	五八

計	一七七四・五	二二八六	二三〇八	二二三五	二六一五	二八八一
---	--------	------	------	------	------	------

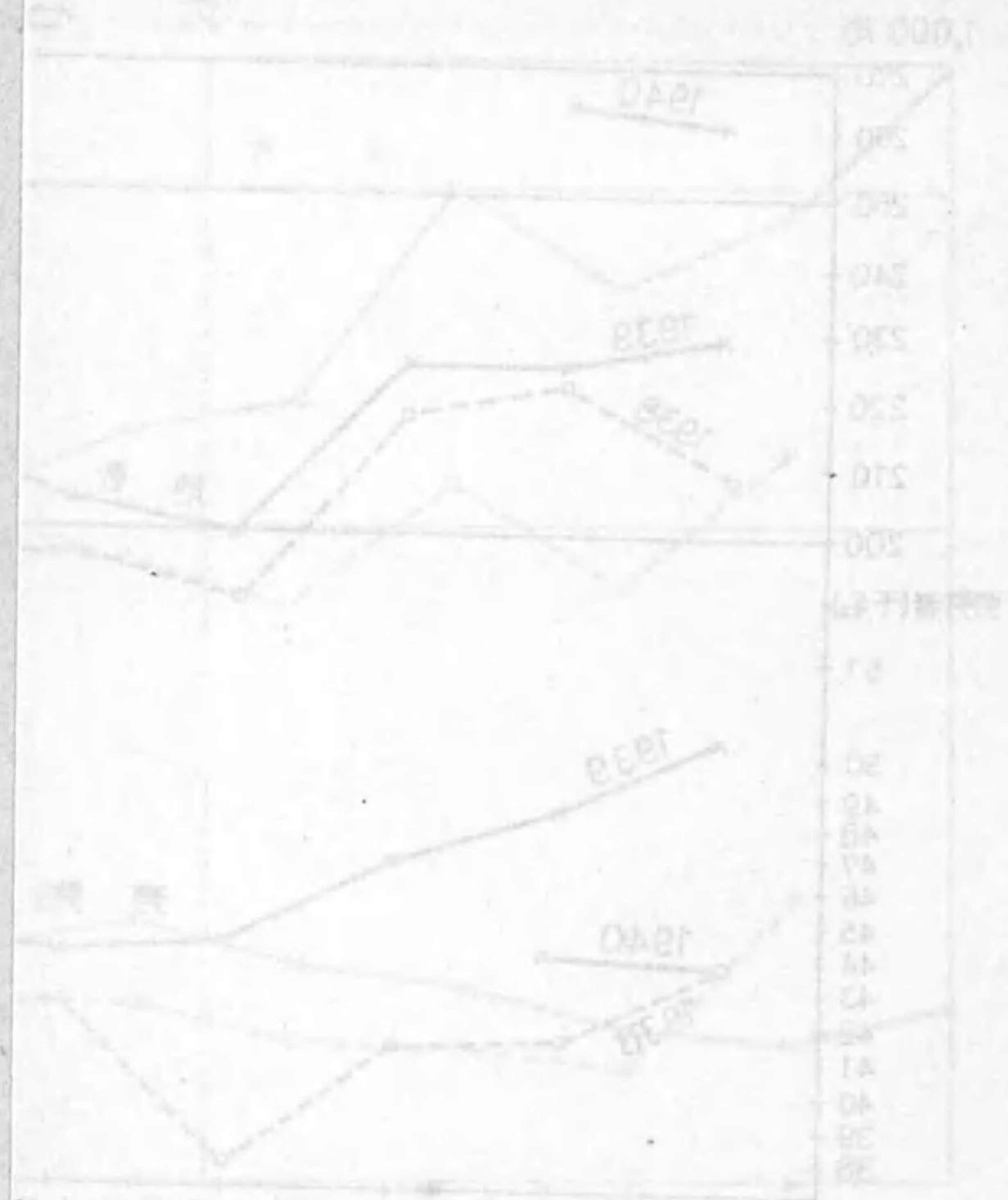
(1) 鴻基の褐炭も本欄に含む

創業以來五十年間（十年を一期とす）に於ける固形燃料採掘量を一括して表示すれば左の如し。

無煙炭	一八八九—一九九年	一九〇〇—一九九年	一九二〇—一九九年	一九三〇—一九九年	一九三〇—一九九年	計
半無煙炭	一四三九〇〇〇	二八〇六〇〇	五四七七〇〇	一一三〇〇〇〇	一八〇三三〇〇	四、一五五、〇〇〇
軟炭	〇	一五九六〇〇	一三三三〇〇	一九七三〇〇	一七九〇〇〇	四九五、〇〇〇
燐炭及有煙炭	〇	九六五〇〇	八七二〇〇	二八六二〇〇	二五三三〇〇	一、〇〇六、〇〇〇
計	一四三九〇〇〇	三、〇〇一、〇〇〇	五、七五七、〇〇〇	一、九七九、七〇〇	一、九五四、七〇〇	四、二七九、〇〇〇

次表は各國に於ける石炭生産高（單位百萬噸）を示す。

生産國	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
佛蘭西	四七・一	四六・一	四五・三	四七・五	五一(?)
獨逸、埃太利、ザール	一四三・二	一五八・七	一八四・八	一八六・四	一一〇・一(a)
同右(褐炭)	一四九	一六三・二	一八八	一九八・五	一二四・一(a)

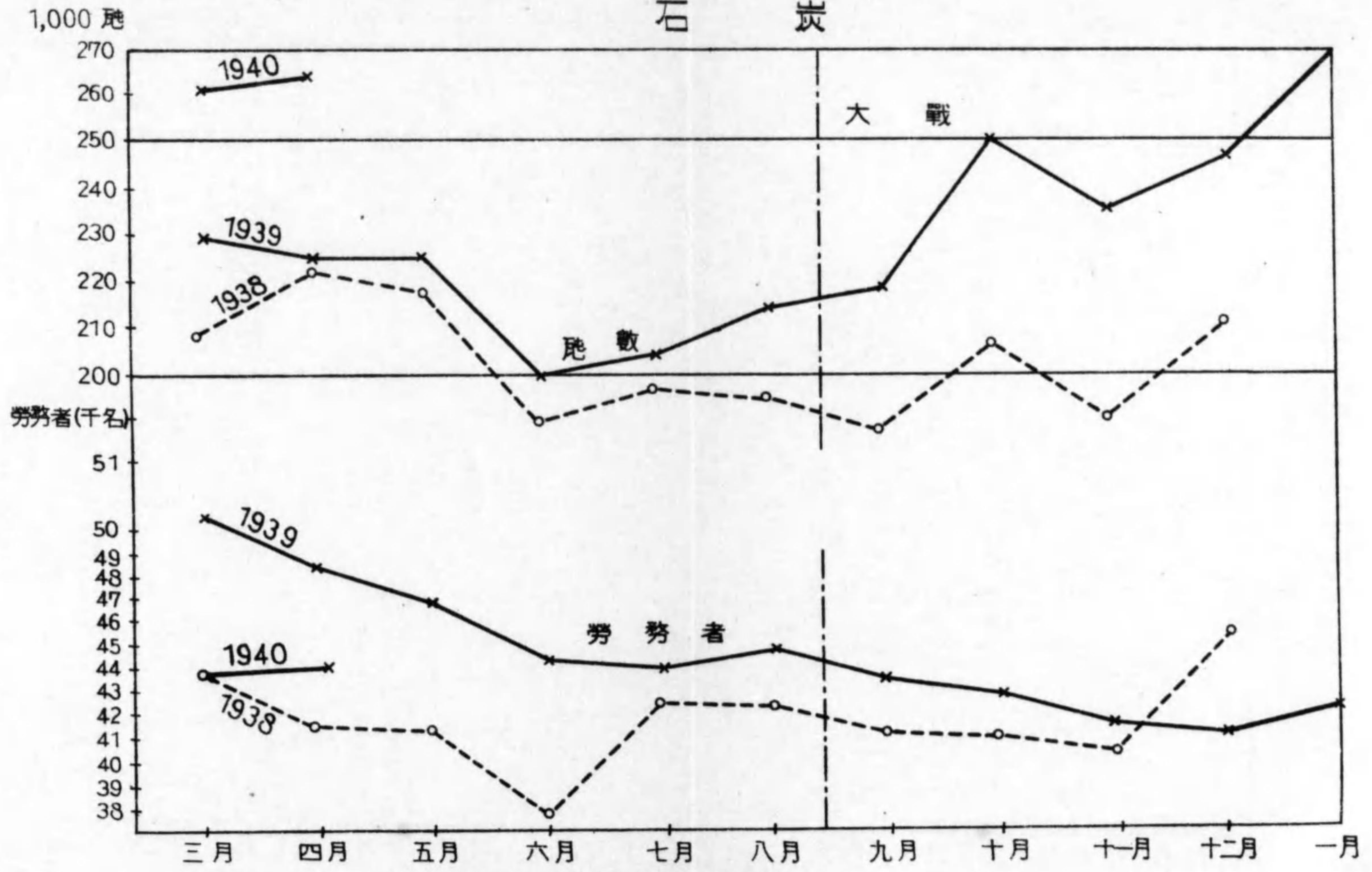


大戦以來諸外國に於いては統計に關して秘密を守り發表しない。従つて右表中(a)字を附したものは一月以來七ヶ月間の數字である。

次の第一表は印度支那諸炭鐵の生産高並に職員と勞務者の數を示す。

世界産高計	同右(褐炭)	世界産高(石炭)	英領印	日領印	印度支那	合衆國	ソ連	チエコスロヴァキア	波蘭	和蘭	白耳義	英國
一、三二四	二〇四	一、一三〇	二五・六	三七・六	一・七	三八五・一	一〇九・一	二六	二八・六	一二	二六・五	二二六・五
一、四四五	二二五	一、二二〇	二五・七	四一・九	二・二	四四三・三	一二三・七	二八	二九・八	一二・九	二七・九	二三二・二
一、五四〇	二五六	一、二八四	二五・四	四一・三	二・三	四四七・六	一二七	三四・七	三六・二	一四・五	二九・九	二四五
一、四三九	二六二	一、一七七	二五・六	?	二・三	三五一・五	一三二・九	二六・六	三八・一	一三・七	二九・六	二三三・三
六九七・四(a)	一三六・五(a)	五六〇・九(a)	二五・一	?	二・六	三九九・三	?	五・五(a)	二三・二(六ヶ)	一二・九	二九・八	一三八・三(a)

石 炭

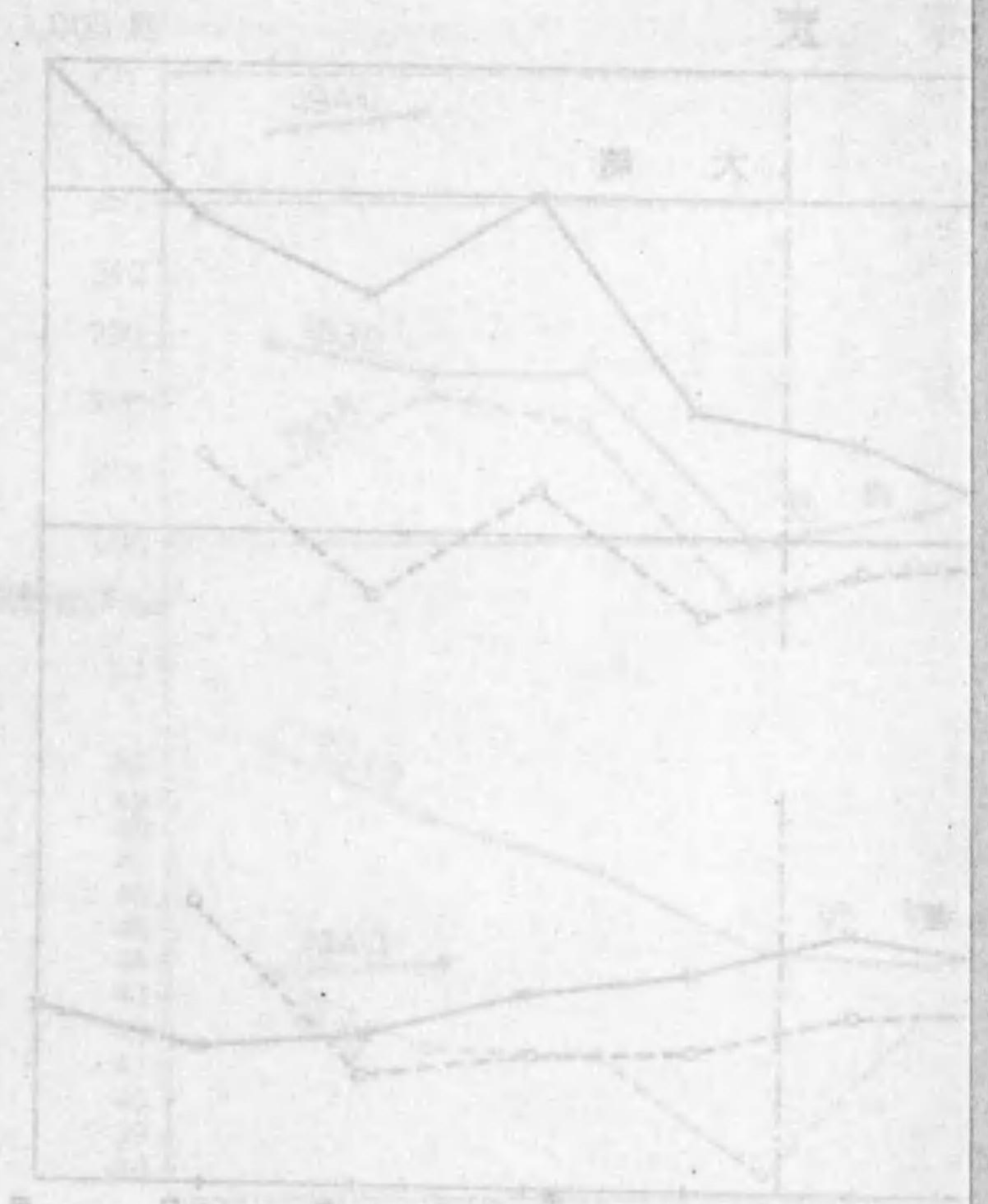


本圖は
次の各項を示したるものなり

- (1) 印度支那の石炭生産の正常なる發展
- (2) 大戦以來の増産協力
- (3) 一年以來勞力不足の持續せる状態

1939年一月、'30年二月及'40年二月はTet祭なるを以て統計なし

大戦以來諸外國に於いては統計に關して秘密を守り發表しない。従つて右表中(○)字を附したものは一月以來七ヶ月間の數字である。
次の第一表は印度支那諸炭礦の生産高並に職員と勞務者の數を示す。



戦後の四ヶ年×3
 一九三八年
 一九三九年
 歐洲人
 和
 残存職員

第 一 表

	一九三六年	一九三九年	戦後の四ヶ年×3	一九三八年	一九三九年	歐洲人	和	残存職員
鴻 基 (Hongay)	一、四七、七四四	一、六二、〇三五 (1)	一、七五、四九三	二七、三三八	三五、九六五		三三	八
マ オ ケ (Maokhe)	一、九、八八七	一、四八、四四一	一、五八、五三三	二、八二七	二、六三三			
ケ ス オ (Kasao)	二七、〇一七	二六、二二七	三〇、八三三	九三	六三			
クア・タイム (Qua-Tim)	三、五八八	一、七三〇	二、五八八	三〇六	四七			
計.....	一、六四四、二八八	一、七八七、〇九五	一、九七七、二四〇	三、二五四	三、九三五		三三	八
S.C.D.T社 〓 クロティルド (Clotilde)	四、八、二六九	五、六、二〇五	六、〇、三〇一	九、三二八	九、七五〇		五二	三
アロン・ドンタン (Along et Dong Dang)	五、四、六三三	六、四、〇三三	八、一、九五四	五、五〇〇	七、五七〇		四	二
キ・サオ (Ky Sao) 〓 タンブール (Tambour)	三、四、〇八二	三、六、四二四	四、三、四二四	五、三九	五、二五		三	〇
バ・タイ (Ba Tai) 〓 ネプチニョヌ (Neptune)	一、八、六二〇	三、四、六六六	三、三、七九三	三、五五	三、五三		一	〇
セギ (Segy) 〓 チャヤチャ (Chacha)	四、八、八三三	四、五、七六一	四、四、九四七	三、九四	四、〇〇		一	一
〓 クレレット (Clarette)	一一、一〇〇	二、八、六六七	四、三、七七八	二、四二	七、四		一	一
バツチ、タイ、フオイ (Bach Thai Phoi)							一	一
〓 ロナ 〓 (Bilolo)	三、五〇六	五、八五四	六、〇、〇六一	一九七	一三三		一	〇
ペー・キム、バン (P. Kim Bang)								

ニランタン (Prinkamps)	4,162	10,034	7,342	310	140	1	0
ニエスランヌ (Esperance)	1,370	200	1,500	50	50	0	0
ニマルセル (Marcel)	598	40	0	1	15	0	0
ニファミル (Famile)	100	337	570	10	60	0	0
計 (大盆地).....	2,379,560	2,550,590	2,805,509	43,134	41,554	144	110
ノ・ヘル・チホオン (P. L. Thong)							
ニボーク (Bo-Ha)	294	4,524	7,604	37	185	0	0
ニス・セ・フホート (S. C. Phu-Tho)							
ニリンホク (Riesses)	0	5,731	8,834	10	77	1	0
東 京 雜	2,5	150	450	7	23	0	0
老 總 二 フオン・サリー (Phon Saly)	?	4	?	?	?	0	0
無煙炭合計.....	2,379,854	2,561,035 ⁽¹⁾	2,833,398	43,338	41,838	145	110
其他の石炭							
チュエン・クワン (Tyen-Quang)	2,011	10,155	33,520	50	41	2	2
フアン・メー (Phan-Me)	3,195	3,631	35,013	600	653	4	2

ツウラ (Tourane)	0	100	?	0	?	0	0
ロット・ビン (Loe Binh) の褐炭	0	100	600	0	24	0	0
計.....	54,726	54,186	58,103	90	1,157	6	5
總計.....	2,334,580	2,615,221	2,891,501	43,328	42,995	151	115

(1) 之の數字には鴻基 (Hongay) の褐炭二六、四四〇噸を含む。
 生産物の品位に依り價格及び販路に大差あり。石炭を分つて等級炭 (charbons classés) と級外炭 (charbons non classés) 即ち切込炭及粉炭——とする。第二表は之等等級別による生産高を表したものである。

第 二 表

無煙炭及半無煙炭 (單位千噸)		生 産 物		百 分 率	
噸 數	生 産 物	噸 數	生 産 物	一九三八年	一九三九年
一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年		
等級炭切込炭及粉炭	等級炭切込炭及粉炭	等級炭切込炭及粉炭	等級炭切込炭及粉炭		
東 京 炭 鑛 (Dong-Trieh) 炭	東 京 炭 鑛 (Dong-Trieh) 炭	東 京 炭 鑛 (Dong-Trieh) 炭	東 京 炭 鑛 (Dong-Trieh) 炭		
6,125	1,018	6,593	1,127	38.2	61.8
1,018	1,528	3,534	2,092	66.0	34.0
1,171.0	1,012.7	1,336.9	2,349.6	44.3	55.8
6,125	1,018	6,593	1,127	38.2	61.8
1,018	1,528	3,534	2,092	66.0	34.0
1,171.0	1,012.7	1,336.9	2,349.6	44.3	55.8
6,125	1,018	6,593	1,127	38.2	61.8
1,018	1,528	3,534	2,092	66.0	34.0
1,171.0	1,012.7	1,336.9	2,349.6	44.3	55.8

炭	青		瀝		青		瀝	
	炭	瀝	炭	瀝	炭	瀝	炭	瀝
無煙炭及半無煙炭	九五・五	一、三三・三	二、三九・八	一、〇八三・〇	一、五三三・四	二、五六二・四	四二・七	五八・三
其他の鑛山	四・〇	七三・五	七七・五	八・六	九三・五	一〇三・一	五・〇	八・五
ナヤナヤ (Chao) 鑛山	三・六	三三・三	四八・八	一一・三	三三・四	四三・七	三三・八	三三・七
アロン・ムン・ヌン (Along of Dong-Dang)	五・〇	四九・六	五四・六	五・四	五八・六	六四・〇	九・一	九・九
合計	一四〇・五	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇	一、〇八三・〇
チユエン・クワン及フアンメ (Tuyen-Quang et Phan-Me)	一四・三	四〇・四	五四・七	一一・四	四二・四	五三・八	三六・一	七三・九
炭 鑛 合 計	一五四・八	一、一三三・四	一、一三三・四	一、一三三・四	一、一三三・四	一、一三三・四	一、一三三・四	一、一三三・四

二、生産物の内譯 (粗炭) (單位千噸)

一九三八年 一九三九年

生産 二、三三四・五 二、六一五・〇

輸入 一三・三 一四・九

貯 六三・〇

ストックより取出し 〃

同 右 (瀝青炭) 四九・〇

消費量合計 二、四一〇・八 二、六九〇・〇

煉炭及骸炭 (現地産石炭製造に使用せらるゝもの) 輸入品 一〇九・三 一五三・六

供給噸數 二、二八五・〇 一七九・六

十二月三十一日現在の貯蔵量 二一四・五 一六六・三

供給應數の内譯 (粗炭) (單位千噸)

一九三八年 一九三九年

鑛山消費量 七一・三 七八・〇

直輸出總量 一、五七三・〇 一、七一八・〇

印度支那國內消費量 六四〇・〇 七一四・〇

供給量合計 二、二八五・〇 二、五一〇・〇

次表は業者の申告に基く、會社別内譯 (一、〇〇〇噸) を示す。

S . C . D . T 社	煉炭化及鑛山消費量		植民地へ賣出		輸 出	
	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
S . F . C . T 社	一〇四・九	一四八・八	四三・七	五〇六・六	一〇八二・八	一、一三四・三
S . C . D . T 社	四・三	一一・三	六四・一	五〇・五	四六・三	四七六・三

S・C・A・D・D社	無煙炭合計	チュエン・クワン (Tuyen-Quang)	ファン・メー (Phan-Me)	瀝青炭合計	計
五・九	七〇・三	〇・四	〇・七	一・一	七二・三
六・〇	一五〇・〇	〇・四	三・七	一・四	一五三・七
一・五	七六・〇	〇・四	〇・九	一・四	七八・〇
三・一	五九・〇	一六・三	三三・一	四九・六	六四〇・〇
四〇・八	六六三・〇	一九・九	三〇・九	五二・〇	七四三・〇
六・八	一、五六〇・〇	六・九	四・三	二・三	一、五七三・〇
	一、七二〇・〇				一、七二〇・〇

其他、間接輸出を生ずる場合あり、又國內消費は實際は之れより少量である。税關統計によれば總輸出量は一七七九、〇〇〇噸である。之の數字には輸出煉炭の大部分を含んでゐる事は言を俟たない。而して該統計には八、〇〇〇噸と載つてゐるが實際は五三、〇〇〇噸である。

三、煉炭及骸炭

煉炭生産高 (一、〇〇〇噸)

生産者	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
S・F・C・T社	七二	一〇四・五	一三二	一二六	一八三

S・C・D・T社	計	賣礦及鑛山消費量	十二月三十一日現在貯礦
〇	七一	七八	一一
〇	一〇四・五	一〇三	一三
〇	一三二	一〇六	三九・五
五・五	一三一・五	一三一	四〇
一・七	一八五・四	二〇五・七	二〇

ドン・トリエ (Dong-Trien) には鑛山専用煉炭一六五一噸を生産した。東京佛國炭鑛會社 (Societe Francaise des Charbonnages du Tonkin) は一八三・七〇四噸に達した (戦後の四ヶ月間の數字を三倍すれば一五一、九五〇噸となる)。右會社は無煙炭一四六、一八五噸、タール一三、七五九噸、日本産瀝青炭 (三池) 二二、〇三〇噸、英領印度より瀝青炭二、六四七噸 (日本産瀝青炭不足を慮り最近ジャリア (Jaliah) より輸入されたものである) 更にファン・メー (Phan-Me) の瀝青炭五九三噸を使用してゐる。

煉炭の 内 譯

國內消費量	S・F・C・T社	S・C・D・T社
東京へ賣礦	一八、七八二噸	一、七四六噸
安南へ賣礦	六八、五〇二	
交趾支那へ賣礦	一八、九六五	
	四四、四一六	
	一三一、八八三	〇

佛蘭西植民地向輸出	二一、二五〇
支那向輸出	一六、一五三
日本向輸出	五六〇
暹羅向輸出	二、三六三
比律賓向輸出	五、九八一
其他	六、九四九
供給量合計	二〇三、九二一噸
	二〇五、六六七噸
	一、七四六噸

大戦の結果、從來ソ聯より仰いで居たタールの輸入に困難を體驗してゐる。
 骸炭の生産高

生産者	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
S・F・C・T社	〇	〇	〇	三、四五一	
ファン・メー(Phan-Me)	二六〇	一〇九	一二八	五二	
計	二六〇	一〇九	一二八	三、五〇五	
賣鐵及鑛山消費量	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、五五六	二、八四八	S・F・C・T社 輸入
十二月三十一日現在貯鐵量				二、〇二九	三、八三四

戦後四ヶ月間の生産高を三倍すれば四、六二三噸となる。S・F・C・T社の生産したる骸炭には無煙炭一、五七四噸、ファン・メー(Phan-Me)瀝青炭二、七〇二噸、印度産瀝青炭一三三三噸を含有してゐる。

骸炭の需給状態

國內消費量	一七三噸
東京へ賣鐵	八四一
安南へ賣鐵	一二四
交趾支那向賣鐵	三〇五
佛蘭西植民地向輸出	三〇
上海向輸出	五六一
暹羅向輸出	一七三
一九三九年度の骸炭輸入量	六四三
供給量合計	二、八五〇噸

四、海 外 市 場
 佛國—一九三九年當初には運賃は加速度的に増加し、二五比弗に達した。これに對して一九三八年には二一、五八比弗であつた。大戦以來運賃は相場立たず、輸出は實際上停止した。これが爲炭鑛業も當然打撃を蒙り、品位優秀なるものも販路を失ふに至つた。
 米國—運賃の値上りは右の販路擴張を防げ良品位炭の吸収を不可能ならしめた。十月には墨西哥サン・ロザリオ

(San Rosario) 向運賃は四二志1/6であつた。之に對して六月にはセント・ローレンス (Saint Lawrence) 向で一九志三であつた。

極東—炭業は需要を充すに足らず、價格は著るしく騰貴し國內市場の價格を凌駕した。これが爲め從來殆んど賣れなかつた、灰分を多量に含む低品位のものに至るまで賣られるに至つた。
次表は極東市場に於ける相場建値の變動を示す。

外貨	平均相場					
	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三九年十二月
磅	七・四九	八・三五	一二・五三	一七・一七	一七・七五	一七・七四
圓	〇・四四	〇・四九	〇・七三	一・〇〇	一・〇四四	一・〇三九
香港弗	〇・七五	〇・五三	〇・七八	一・〇七	一・一〇四	一・一〇九
上海弗	〇・五七	〇・五一	〇・七五	〇・七七	〇・四九	〇・三六七

第三表は一九三九年に於ける極東の石炭業の詳細を示したものである。
一九三九年に於ける極東の石炭業 (千噸)

支那	香港	日本	比律賓	馬來	印度支那	暹羅	セーロン	蘭印	佛國	其他
支那	二四五〇	二、四三二	二、四七三	一一	一二	一三	一	一	一	四八三

日	英領印度	印度支那	蘭領印度	滿洲	西アフリカ	其他
日	三六九〇	四〇二	三六七	五五一一	一〇九	二四・六
英領印度	一一四〇	一七九	二〇八	一三〇	一四・五	六・
印度支那	六六三	六一三	六六三	一八〇	二四	四・
蘭領印度	一五三九	一〇〇三	一九五	一三四	八五	三・一
滿洲	一一三六	二九	四三	八九	一四	二・
西アフリカ	三三六	三五四	三六二	一七	一四	一・
其他	一四	六〇二	一七一	一七一	二九	二・

同一劃内の右側の數字は欄頭に掲げたる國より右端の欄に表はしたる國へ該國數だけ輸出することを示し、左側の數字は右端に掲げたる國より欄頭の國へ該國數だけ輸入せられることを表はす。
但し、運搬の遅延、途中宛先の變更・再輸出等により差異を生ずる。印度支那の輸入の數字は特殊の商業、——倉庫用石炭又は輸出煉炭の製造に利用される瀝青炭として——即ち直接消費又は保税倉庫より取出すと同時に消費に供さる、石炭に對して適用するもので倉庫よりの再輸出を含まないものである。
—印は零を表はし、・印は數字のあげたるものなきことを表はす。

S・F・C・T社は一九三九年に於いて内地市場に九〇%を提供した。
 全消費量は鑛山用を除き八二九・〇〇〇噸に達した。之に對して一九三八年には七四四、〇〇〇噸、一九三七年には六九〇、〇〇〇噸、一九三六年には五六〇、〇〇〇噸、一九三五年には五〇三、〇〇〇噸であつた。
 この漸進的の數字は佛印の絶えざる産業發展を如實に物語るものである。
 六、價格の變動——無煙炭の平均價格（東京灣諸港に於ける）は左の如し。（比弗で示す）

等級炭	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
等 級 炭	八・〇三	六・六〇	六・五一	六・四四	七・五四	九・〇七	一一・八六
切込炭及粉炭	三・二〇	二・六〇	二・四七	二・八二	三・二九	三・九五	四・九四

（こゝに掲げたる價格は稅率査定の參考價格に非ず平均合計價格である。）

稅率參考價格は等級炭一九三八年の一一三比弗三六四に對して一三比弗九八三を示し、切込炭及粉炭、一九三八年の五比弗九三四に對し五比弗九二二六を示してゐる。

B 無煙炭鑛業

a 東京佛國炭鑛會社 (Société Française des Charbonnages du Tonkin)

一九三九年度の商品生産高は一九三八年の一、六四〇、七〇〇噸に對し一七八七、〇九五噸に達し、その内譯は無煙炭及半無煙炭……………一、七六〇、六五五

褐 炭……………二六、四四〇
 計……………一、七八七、〇九五

戰時下S・F・C・T社は機械化の一途を辿つた。尙ほ、一九四〇年當初に於て裝備の大擴張計畫を實行に移してゐる。
 一、露天掘と坑内掘生産高との割合は左の通り。

中 心 地	生 産 噸 數 (單位 千噸)			
	露 天	掘	坑 内	掘
ハッー・ハラム (Halon-Halam)	一九三八年 一一九・四	一九三九年 一五五・八	一九三八年 二四三・七	一九三九年 三二二・九
ポール・クルム (Port Courbet)	八二・五	七五・六	六一・二	六五・〇
カンファ鑛山 (Campha-Mines)	四三七・九	五四九・六	九四・一	四七・〇
モンゾオン (Mongthoung)	九六・四	五〇・九	三三八・五	三四三・二
マオ・ケ (Maokhé)			一三九・九	一四八・四
ケバオ (Kéba)			二七・〇	二六・二
計	七三六・二	八三一・九	九〇四・四	九五三・七
總生産高に對する百分率	四八%	四六%	五二%	五四%

二、鑛山作業と純生産高を各中心地別に示せば

鑛 區	開 發 鑛 層	利用シ得ル 鑛層ノ擴ガリ	生 産 高				
			一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
ハラム (Halau)	大 鑛 層	二〇乃至五〇米	七	二六五・四	三二四・〇	三六三・一	四七九・七
	一六米ノ鑛層	一六米					
ハツ一 (Hatou)	大 鑛 層	二〇乃至六〇米	二六	四七六・〇	五九一・〇	五三〇・〇	五九六・六
	一六米ノ鑛層	一六米					
カンファ鑛山 (Campfa-Mine)	大 鑛 層	八〇米	三九	四七六・〇	五九一・〇	五三〇・〇	五九六・六
	上 勢 鑛 層	一乃至五〇米					
ポール・クルムニナトダ (Port-Courbet=Nago'a)	一〇 鑛 層	一乃至一〇米	三五	四八九・四	四六三・三	四三四・九	五九四・二
	四 鑛 層	一乃至一〇米					
モン・ゾオン (Mong-zoung)	鑛層 A・B・J・	一乃至八米	七	一三三・三	一九〇・〇	一三九・九	一四八・四
	K・L	一乃至八米					
マオケ (Maokhé)	鑛層 2 及 4	一乃至三米	三〇	一五・一	二九・〇	二九・〇	三六・三
	鑛層 2 及 4	一乃至三米					
ケバオ (Kého)	計		一〇九〇	一、四六五・七	一、六三八・〇	一、六四〇・六	一、七七一・〇

鴻基 (Hongay) ロンセツシヨンの諸鑛區

探鑛。各中心地に於いて或種の鑛層の性状を探查すべく各種の作業を実施した。

カンファ鑛山 (Campfa-Mines) に於いて露天掘は著るしく進捗したが坑内掘は九月以來休眠してゐる。

モン・ゾオン (Mong-zoung) に於いては動員令に依る人的資源の不足よりして職場數に減少を來し生産に一頓坐を來してゐる。

ハツ一・ハラム (Hatou Halau) 中心地は前年度に比して約三〇%増産した。就中ハラムの一六米鑛層の坑内掘とハツ一の露天掘に對しては特に努力が拂はれてゐる。

ポール・クルム (Port-Courbet) 及ナゴタ (Nago'a) 鑛山に於いてはクワ・タイム (Quat-Tim) 周邊に千甍を開發し之れに依つて生産を維持してゐる。機械設備、機械化計畫は一九三九年度に於て著々實施せられた。機械シヨベル、モン・ゾオン (Mong-Duong) の電氣安全燈庫に牽引機關車を設置し、二箇所に變壓所を設け、カンファ・ポール (Campfa-Port) に於ては貯鑛所の覆が竣工した。其他煉炭製造所に於いても諸施設をなした。

マオケ (Maokhé) 中心地

探鑛 實施せず。

開發 正常なる發展をなしつゝあり。

諸施設 鑛區S₃に採掘斜坑を設く。

變壓所を一箇設く。

ケバオ (Kého) 中心地

探鑛 ツアン・カーン (Tsuan-Cân) 地方に於いては探鑛の結果鑛層の賦存が認められたが深度を測る可く探

査を繼續中である。

開發 ハン・ルイ (Han-Loui) 區を整理し、カイ・ダイ (Cai-Dai) 區は正常なる運行をなしつつあり。

b. ドン・トリユ炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong Trieu) 現在開發中のものは北部の鑛房「クロテイルド・ルイーズ (Clotilde-Louise)」のみである。

鑛層 2	二米
鑛層 3	三米八〇
鑛層 5	八米
鑛層 6	六米

生産高は一九三六年の最高五三八・三〇〇噸を凌駕し五六二・六〇〇噸に達した。

これは坑内全採掘總數である。

探鑛、探鑛作業は本年度に於いて活潑に進展した。就中、

一、窪地C——クロテイルド・ルイーズ鑛區 (Concession Clotilde-Louise) の東方、鑛層4の延長部に於いて。

二、フランソワズ鑛區 (Concession Françoise) の「ピル・皺曲 (Pi Giroud)」同鑛區の東部にあり、鑛床の延長部に於いて。皺曲外の鑛層の性状を探查すべく各種の作業を実施した。尙ほ、クロテイルド鑛區に於いては傾斜下部 a に始めて作業を実施した。即ち鑛層2より +72 高地へ斜坑を設け年末には +36 高地にも及ぼす筈である。

開發、鑛層2、3、5及6に於いて實施中であるが特に鑛層2の西部、即ち70階より 154 階に至る水平盤層中に於いて進捗した。本年末の採掘量は本地區だけで日産一、〇〇〇噸乃至一、二〇〇噸である。

坑内施設 主なるもの左の如し。

クリーパー延長工事

サント・バルブ (Sainte Barbe) 立入坑道の一部に固定電氣照明装置を設けたること。

地上設備 主なるもの左の如し。

ウオン・ビ (Uong-Bi) に新に事務所 (會計、金庫及文書課) を設く。

一、〇〇〇キロワット、タービン交流機に供給する爲め加熱面三一七米平方のバブコック、ウイルコス (Babcock & Wilcox) 式、新ボイラーを中央發電所に設置したり。

鐵道

ソン・ツォー (Long-Trâu) 線に變更線約一、六〇〇米を新設し輸送路を約三米短縮した。この變更により出鑛能力一日三〇〇噸を増加したり。

c. アロシ・ドンダン佛蘭西炭鑛會社 (Société Française des Charbonnages d'Along & Dong-Dang) 生産は繼續的に増加し年末には月産約八、〇〇〇噸に達した。

鑛區群	生産高 (千噸) (2)				
	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
ドン・ダン (Dong-Dang) 二フランシス (Francois) 氏					
デイドナン (Deidhan) = ヲン (Hien) 氏	三九・八	四九・四	四一・四	五四・六	六四・〇

カイ・ダ (Cai-Da) = アン・トナン (Antonin) 氏 (1)

- (1) 一九三九年に開發を再開す。生産高約三〇、〇〇〇噸。
- (2) 一九三五年より一九三八年迄は坑内探掘噸數、一九三九年度の噸數の四〇%は露天掘にて探掘したるもの。

探 鑛 ギア・ロ (Ngua-Lo) 地方に於いては四米の厚さを有する粉炭層が発見された。

開 發 ノエ (Noe) 坑 (ドン・ダン鑛山の中心地區) に於いて厚さ二乃至四米の四炭層に於いて開發を繼續中。

80階の下層に於いて準備作業。

デイドハン (Daidhan) に於いては一米五〇の鑛層に於いて小規模の開發を遂行中。

カイ・ダイ (Cai-Dai) では鑛層Aに於いて掘下を開始し、鑛層Bに於いて掘下を再開した。

地上施設 中央發電所に三〇〇馬力の蒸氣機關を設置し、電力を増大にした。

d. タンブール鑛山 (Mine Tambour) = ギユイエン、ヴァン、ハン氏別名キーサオ氏 (Nguyen-Van-Nhan dit Ky Sao)

鑛 區	生 産 (千 噸)			摘 要
	生	産	高	
北部、一九三九年度に開發されたる一二米の鑛層一ヶ所 (露天掘) 南部、一九三九年度に開發されたる四米の鑛層一ヶ所	一九三五年	一九三六年	一九三七年	露天掘、鑛層厚さ一六米
	一九三八年	一九三九年		
	二〇・〇	二〇・〇	二〇・〇	三四・六
				露天掘、鑛層厚さ一六米

e. ネプチューヌ鑛山 (Mine Neptune) = ドアン・ヴァン・カン氏 (Doan-Van-Can)

鑛 區 群	生 産 (千 噸)			摘 要
	生	産	高	
アオチ (Aoeth) 二乃至四米の鑛層三ヶ所 トルン・リムオン (Trung-Luong) 〇・五〇、〇・六〇乃至〇・八〇米の鑛層三ヶ所	一九三五年	一九三六年	一九三七年	露天掘、鑛層厚さ一六米
	一九三八年	一九三九年		
	二〇・七	一七・〇	三一・四	四八・八
				四五・八

f. チヤチャ鑛山 (Mine Chacha) = エル・セギ氏 (R. Seguy)

鑛 區 群	生 産 (千 噸)			摘 要
	生	産	高	
アオチ (Aoeth) 二乃至四米の鑛層三ヶ所 トルン・リムオン (Trung-Luong) 〇・五〇、〇・六〇乃至〇・八〇米の鑛層三ヶ所	一九三五年	一九三六年	一九三七年	露天掘、鑛層厚さ一六米
	一九三八年	一九三九年		
	二〇・七	一七・〇	三一・四	四八・八
				四五・八

噸數は坑内掘掘噸數である。

g. クレレット鑛山 (Mine Clairette) = エル・セギ氏 (R. Seguy)

生 産 (千 噸)	生 産 (千 噸)			摘 要
	生	産	高	
一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	生産物は主として豫備作業及び探鑛作業により産出したるものなり
一九三九年				
一六・〇	一七・八	二三・四	一一・一	一二・九

h. ビチヨ炭鑛 (Charbonnages de Bicho) — バチ・タイ・ブオイ氏 (Bach-Thai-Buoi)

生 産		高 (千 吨)		摘 要
一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	
二七・八	一七・一	三・八	三・五	五・八
坑内掘れども一九三九年度の生産は轉石拾ひと探鑛とによる				

i. プランタン鑛山 (Mine Printemps) — フアン・キム・バン氏 (Phan-Kim-Bang)

生 産		高 (千 吨)		摘 要
一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	
三・〇	四・四	二・〇	四・二	一〇・〇
坑内掘、〇米八〇及一米の鑛層二箇新たに〇米六〇及〇米八〇の等級炭層を二箇發見した				

j. ボ・ハ炭鑛 (Charbonnages de Bo Ha) — フュー・ラン・チヌオン (Phu-Lang-Thuong) 附近

炭鑛所有者は本年前半期に於いて三鑛層の探鑛をなした。

後半期に於いて前記所有者は自己所有の鑛山をボ・ハ印度支那石炭開發會社 (Société Indochinoise d'Exploitation des Charbonnages de Bo-Ha) に貸附けた。

鑛層 A、B、C の三層に於いて探鑛作業を実施、鑛層の走向探査約四五〇米に及んだ。鑛層 B に於いては傾斜上部を水平薄板狀に採掘し完全充填をなしてゐる。生産物は丘の山腹に設けたる坑道より出鑛せしめてゐる。

本鑛山は月産一・五〇〇乃至二〇・〇〇噸を出鑛すべく設備しあり。

探鑛は一九三八年に開始された。現今開發中のものはエティック無煙炭大盆地の延長に過ぎず。

k. ホア・ビン (Hoa-Binh) ソフュート (Phu-Tho) 地方の無煙炭。

チヨ・ボ (Cho-bo) 附近に於て揮發分一三乃至一八%の石炭を發見した。フュー・ヌホー・クワン (Phu Nho-Quan) の石炭の如く黃硫分に富んでゐる。一九二二年より一九二五年迄開發された。

一九三八年にホア・ビン (Hoa-Binh) の北部の一無煙炭鑛床に設備を施した。水分五・五%、揮發分三乃至四%、灰分二・五乃至一二%。

一九三九年、フュート民間炭鑛會社 (Société Civile des Charbonnages de Phu-Tho) はリンヘム鑛田 (Mine Richesse) に於て六〇〇米の探査をなし黒河 (Rivière Noire) まで出鑛すべくドローヴィル式軌道 (voie Decauville) を敷設した。

l. 老樹 (Laos) の鑛床

フォン・サリ (Phong Saly) は附近の小鑛床を以て同地方の需要を充してゐる。ヴィエンチャン (Vientiane) 附近には無煙炭鑛床中に舊坑道が存在してゐる。鑛山部 (Service des Mines) はその周邊で作業を開始せんとしたが動員令によりて實現するに至らなかつた。

サラヴァン (Saravane) 附近にも鑛床の賦存が認められてゐる。

C 瀝青炭及有煙炭鑛業

一、チエン・クワン炭業匿名会社 (Société Anonyme des Charbonnages de Tuyen-Quang)。

西部地區の南部に二本の試掘堅坑を穿つた。性状は不規則なるも鑛床の走向と傾斜を發見した。これに依り約一、〇〇〇噸の石炭を生産した。西部地區及第二ジール (Gizelle II) に於て開發繼續中である。

本鑛山は特殊用鑛山に編入されてゐる。

石炭は主にガラス工場、チョー・デイエン (Cho-Dien) 鑛山、クワン・エン精煉所 (Fonderie de Zinc de Quang-Yên)、鐵道會社に於て使用してゐる。この石炭は第三系小盆地に發見され一九一六年以來開始されてゐる。産出物は有煙炭の特徴を有してゐる。

塊炭	切込炭	純粹乾燥切込炭
水分	三・六	
揮發分	三六・〇	四一・四
固定炭素分	五一・八	五八・六
灰分	七・三	一三・五
黃硫分	〇・七	一・六
發熱量	六八三六・〇	六四四一・〇
灰分の熔解性	一一六〇度	七七七〇・〇

二、印度支那炭鑛及金屬鑛山會社 (Société Indochinoise des Charbonnages & de mines métalliques)

露天掘地區の水平坑道12に於いて走向探査をなしたる所長さ一二〇米、厚さ平均八米の板の存在を發見した。ラン・カ (Lang-Cam) に於ては板57-73に於いて開發繼續中。一〇〇-一三〇階を採掘中。露天掘に於ては地上軌道面

より下方に位する石炭及水平坑道(12)の第一薄板を開發した。

地上諸設備を同露天地區に對して施した。鑛山の生産高は著るしく増加の傾向にあり。

右の鑛山は特殊用途地區に編入されてゐる。

石炭は鴻基 (Hong Gay) 骸炭製造所、鐵道會社等に於て使用せられる。

鑛床はシェティツク石炭大盆地の北西端に位する。こゝには嘗て採掘された少量の半無煙炭と骸炭化可能の瀝青炭の美事なレンズ狀鑛脈を有してゐる。開發は一九一一年に始まつてゐる。

瀝青炭	半無煙炭
水分	一
揮發分(水分を除く)	二三
灰分	一四
固定炭素分	六二
黃硫分	一
發熱量	七九〇〇
	七六〇〇

三、印度支那銀行 (Banque de l'Indochine)

ツーラン (Tourane) のノン・ソン (Nong-Son) 舊鑛山附近に於て或種の作業を實施した。一九四〇年には少量の採掘可能の見込である。

本鑛山は一九九〇年より一九二〇年まで開發され、一九二四年より一九二七年迄再開された。若干量の無煙炭が採掘

された。併し其の附近には揮發分の含有量に種々ある（ものによりては三〇%を含有す）石炭が発見されてゐる。生産高は年産一〇乃至二〇、〇〇〇噸であつた。

四、電氣鑛業會社 (Compagnie Electrique minière)

ラン・ソン (Lang-Son) の ロック・マン (Lôc-Binh) 鑛山の褐炭鑛床に對して精密なる探査をなした。標本を佛國に送致し、乾溜試験に供した。之れ同會社がロック・ビンに設立したる中央發電所に對して低廉なる褐炭を供給して炭化石灰の製造をなさんとするにある。

水分含有量は一三乃至一五%であり、揮發分は三〇乃至三三%、灰分は七乃至二〇%、黄硫分は四%内外、發熱量は五〇〇〇カロリー内外である。

五、過去の開發

カオ・バン (Cao-Bang) の褐炭は嘗ては E・W・T 社の錫精煉所に於いて使用された。一九一九年より一九三〇年迄繼續的に採掘された。本燃料には揮發分三〇乃至三五%、灰分一〇乃至一五、黄硫分二を含有した。

エン・バイ (Hải-Bay) の石炭は一八九二年より一八九五年迄、次に一九二二年より一九二四年迄開發された。右は瀝青炭にして、其の若干は骸炭となし得る。

安南のドン・ジャオ (Đông-Giao) の褐炭は一九〇五年より一九一一年迄、一九二四年より一九三一年迄開發された。水分一九%、揮發分三六、灰分七、黄硫分一を含有した。

ニン・マン (Ninh-Binh) の フュー・ホ・クワン (Phu Nhô-Quan) のレエティツク石炭は嘗て可成盛んに開發されたることあり（一九一三年—一九一五年、及一九一七年—一九三一年）。揮發分一五%、灰分一〇乃至二〇%、黄硫分六乃至

七%である。發熱量は六四〇〇カロリーであつた。

尙其他の地方にも、殊に北安南に於いて褐炭鑛床の存在を知られてゐるがまだ開發されたることなし。

D 技術的考察

機械化 十數年來機械化計畫を採用したる諸社中、之れを遂行したるものは S・F・C・T 社及 S・C・D・T 社の二社に過ぎず、殊に S・F・C・T 社は一九三九年度に重要な努力をなした（機械運搬装置及牽引装置、機械ショベル、截炭機等々）。

之が施設に依り鑛山の出鑛能力を増加したるのみならず、一九三九年一月以來の勞力不足に對應するを得た。

能率 S・C・D・T 社に於いては作業新編成（重點主義、監督）に依り坑内の能率増加し有能坑夫を根本的に利用するを得たるは特筆に値する。

其他、一九三九年十月より十二月の間に於いて八時間制の作業所三を十時間制の作業所二つに更めたる結果盆地開發全體に於いて能率と生産高の増加となつて現はれた。

之の能率の増加は次表にも表はれてゐる。本表は坑夫一人、一日の作業によりて生産する石炭の噸數を示したものである。

年次	坑内(坑内掘及露天掘)	地上及坑内
一九三四年	二八六噸	一七三
一九三五年	三一二噸	一八〇

一九三六年	三二九瓩	一九六
一九三七年	三〇五瓩	一八六
一九三八年	二七八瓩	一七九
一九三九年	三三五瓩	一九六

火藥 一瓩當り最近の消費量は左の通り。

一九三四年	八四瓦
一九三五年	八四瓦
一九三六年	一一八瓦
一九三七年	九八瓦
一九三八年	一三〇瓦
一九三九年	一〇〇瓦

詳細は第八章H項を参照のこと。
 其他に於いては前年度に比して著るしき變化を認めず、一九三八年度年報を参照すべし。

第三章 金屬鑛業及其他鑛業

A 錫及ウオルフラム鑛業

一、市場

一九三九年に於ける錫金屬の世界産額は一八三、〇〇〇噸にして一七三八年には一五〇、〇〇〇噸、一九三七年には二一〇、〇〇〇噸であつた。一九三九年度の平均相場は長廻當り二二六磅、一九三八年には一八九・五磅、一九三七年には二四二・四磅、一九三六年には二〇四・一三磅、一九三五年には二二五・六磅であつた。
 右一九三九年度の平均相場をピアストルに換算すれば三、九四七ピアストルにして一九三八年には三、一七八ピアストルである。

七月に大戦勃發以來實施せられたる統制相場二三〇磅は十二月十二日を以て緩和せられたる結果三五六・七磅に反撥した。

タンクテンに關しては大戦以來聯合國側の相場は五十志に決定せられてゐた。一九三九年度の平均は適當り五一志に維持せられ、一九三八年には五三志、一九三七年には八七志、一九三六年には三二志、一九三五年には三五・五志であつた。ピアストルに換算すれば一九三九年度の相場は四四・七ピアストル、一九三八年には四四ピアストル、一九三七年には四一ピアストルである。

五〇

印度支那生産業者の状況は極めて良好であつて大戦以來販路は頓に増加してゐる。錫石 (Ca Cassiterite) の佛蘭西向ケ運賃は一九三八年には六三ピアストルであつたものが大戦以來一〇九志 (九六ピアストル) となつてゐる。ウォルフラムに就いて言へば一九三八年に六三ピアストルであつたものが一〇八志 (九五ピアストル) となつてゐる。

二、印度支那に於ける産額

一九三九年より以前數年間値上りを示したる爲め其全能力を發揮せしめたる結果、一九三九年末には若干の困難に逢著し其の産額は低下した。

老樹地方 S.E.E.M.I 會社 (フオンチャト Phoukhou) C.F.E.O 會社 (ボネン = Boneng)	精 鑛	戦後四 月間數 字三倍	含有錫		含有ウォルフラム3		勞務者
			一九三 九年	一九三 九年	一九三 九年	一九三 九年	
合 計 (老 樹)	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
東京地方 ガニメード (Ganiméto) 會社	500	500	500	500	500	500	500
E . W . T (錫)	500	500	500	500	500	500	500

E . W . T (ウォルフラム) (ウオルフラム) セギ (Seguy) 鑛山 テレン (Thérèse) シロザン (Suzanne)	精 鑛	戦後四 月間數 字三倍	含有錫		含有ウォルフラム3		勞務者
			一九三 九年	一九三 九年	一九三 九年	一九三 九年	
合 計 (東 京)	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500
總 計	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500

最近四十年間 (毎十年間を一期とす) に於ける錫及ウォルフラム3の産額一覽表

錫	1900-1909年	1910-1919年	1920-1929年	1930-1939年	計
上 部 東 京	137.5	80.8	3,354.0	4,973.3	9,273.6
ナム、パチーヌ (Nani Pathene)	0	0	1,698.8	7,699.8	9,398.6
計	137.5	80.8	5,052.8	12,673.1	18,672.2

ウ オ ル フ ラ ム					
上 部 東 京	二二五・八	一、五六六・六	九六八・六	二、三四五・九	五、一〇六・九

一九一七年に開始し一九三一年に閉鎖したるカオ・バン (Cao-Ban) 精煉所は金屬錫三、二一八噸を生産した。

一九三〇年以來の年産額 (噸)

年次	精鑛及混合鑛	含有錫	含有ウオルフラム
一九三〇	二、一〇五	一、〇〇九	一三二
一九三一	一、九二四	八八八	一五六
一九三二	一、九一五	一、〇一七	一四七・五
一九三三	二、〇八〇	一、〇五五	一五一
一九三四	二、三六四	一、一五一	一八二
一九三五	二、七八三	一、三三一	二五〇
一九三六	二、八四三	一、四〇四	三〇二
一九三七	三、二八二	一、六〇二	三八九
一九三八	三、二八二	一、六二二	三三〇
一九三九	三、〇三六	一、四九八	三〇九

毎一年の輸出總額

年次	錫	タングステン
一九三〇	一、一七二	一八九
一九三一	一、六〇九	二二七
一九三二	一、七〇六	二〇四
一九三三	一、九三六	二一一
一九三四	二、〇四九	二七七
一九三五	二、五五四	二八三
一九三六	二、四四二	五二二
一九三七	二、六三一	四一八
一九三八	三、三五八	四七二
一九三九	二、二二一	四六一

(年末の積荷は稀なり)

錫鑛の全量は星港に發送せられ、ウオルフラムは佛國に送られる。若干の混合物は英國に向けられることあり、地方の精煉所は今や全く放棄せられてゐる。

海防には東京經過、無税にて輸送せられる雲南コーキユ (Kokion) 鑛山の生産物を處理する二つの精煉所あり。右の二精煉所の生産額は左の如くである。

シ ユ ビ ラ 氏 (M. Suhlra)	一九三七年	一九三八年	一九三九年
	一、三六八噸	七一一噸	材料缺乏ノ爲メ閉鎖

ロンドン氏(M. Randon)	九三三噸	一、六六一噸	二、〇一四噸
計	二、二九一噸	二、三七二噸	二、〇一四噸

五四

右の二、〇一四の中四〇噸は印度支那渡し四六八噸は佛國渡しである。

支那の業者は錫を引渡すに非常な苦心をする、蓋し彼等は好んで米國弗で取引せんと欲するからである。一九四〇年最初に協定が成立した。

大量のウオルフラム(廣西産のもの)が印度支那に無税にて輸入されて来る。この傾向は日本の南支發展以來特に甚だし。支那は世界産額の約半分を産出する。

三、ラオス地方の鑛山

本地方の産物はサヴァンナケット・ドンガ(Sayamaket Dongha)路又はバンナファオソム(Bannaphao Som) || キュック(Cue)ケーブルカーを使用すればツアーヌ(Tourane)經由にして輸送し得る。但し船舶不足の爲め一九三九年には僅か一、四七五噸を發送したるに過ぎなし。

歐洲人従業員は従來、S・E・E・M・I會社に於ては八名、C・F・E・E・O會社に於ては七名を使用しありし所一會社に付四名に制限せられた。然れども生産擴充の爲近く増員せられる豫定である。

年度末に於てS・E・E・M・I會社は土民勞力の不足に遭遇した。之の點に關してはC・F・E・E・O會社は極めて有利な狀況にあるものの如くである。

印度支那鑛山研究開發會社(Société d'Etudes & d'Exploitation minières de l'Indochine) 鑛脈J10の深部調査、バルトロニー(Bartholoni)に於て四三米の堅坑掘り、ドヴィエヌヌ(De Viennes)に於て掘

鐵鑛々脈調査の爲め四〇〇米の坑道掘り、手掘り坑(第九、六、五ソランジユ)、第九ソランジユ(Solange IX)に於て磁鐵鑛脈の探鑛。

バン・トン・カ(Ban-Ton-Ka)の施設、ジユフラオ(Duflao)事務所、クアソン(Koua-Son)病院開設準備—バルトニー(Bartholoni)及ドヴィエヌヌ(De Viennes)の開發、東堅坑、歐人ヶ丘。

一二五馬力コンプレッサーと二四〇馬力モーターの設置、一二班軌道一、五〇〇精數設。

一九三九年に於て生産擴充をなした會社は唯本社あるのみである。之れ以上の擴充は洗鑛場の能力—目下手一杯なりに限度あるを以て不可能なり。

極東錫請負會社(Compagnie Fermière des Etains d'Extrême-Orient)

本社の鑛山は本年度に於て多大の技術上の困難を経験した、併し乍らノン・スン(Nong-Sun)の新鑛脈が緒に付けば挽回の餘地を期待し得る。而して少くとも一九三八年に匹敵する數字を得る事可能である。

ノン・スンに於て二軒道路の開設、高壓線九軒架設、同じくノン・スンに於て一五〇馬力洗鑛場の設置並に運轉開始。堅坑一、六九二米、探鑛九三〇米、坑道九八一米、バンノイ(Bannoi)再掘。

四、上部東京地方鑛山

生産力は甚だしく低下した。之れは主として支那苦力の不足に依るものであるが或種の高き鑛脈中に於て作業するに之れに如くものはないのである。一九四〇年初めに於て同地方主務官廳は支那人勞力の徵集を容易ならしむる爲對策を講ずる所あつた。安南苦力は若干の時期に於て不足した。一九四〇年初めに政府に於て執られたる處置は狀況を著るしく緩和したる如く思はれる。

東京錫ウオルフラム會社 (Société des Étains & Wolfram du Tonkin)

ティン・チュック (Tinh-Tuoc) の盆地の上方を開発すべく準備してゐる。新たに斜面と機械運搬装置を設けた。洗鑛能力が處理趣数の増加を許さない爲め機械師を設ける筈である。其他補助電氣を設置することも必要である。

上部東京錫會社 (Société des Étains du Haut Tonkin)

サン・アレクサンドル (St Alexandre) 及ルン・モイ (Lung-Moi) に於て多くの調査をなした。サン・アレクサンドル、リュウ (Lieu) 及 A.F. の諸鑛脈中に新たに職場を設けた。從來使用し來れる液體酸素の火藥をやめ普通行はれる火藥を使用することも考慮してゐる。

之れを要するに E・W・T 會社及 E・H・T 會社は大規模の生産擴充計畫を有する。諸施設は一九四一年に完成の豫定である。目下職員は八名(平時には佛人十二名)に限定されたが近く増員の見込である。

セギ ー 鑛 山 (Mines "Ségny")

カオ・ソン (Khaos-Son) 鑛山 (職員は平時に於ては佛人二名目下一名に限定) は精鑛一二九噸を産出した。一九三八年には二〇六噸であつた。

所有者は販賣に困難なる右鑛石を處理して混合鑛となし販賣を容易ならしむる如く命令した。

バン・カ (Bang Ka) 鑛山は最近開設せられたるものにして錫三噸とウオルフラム三四噸を含有する精鑛一二噸を産出した。

ゲツツエ (Mine "Goetzoe") 鑛山

テレーズ (Thérèse) 鑛山より産出する混合鑛は聯合國の市場に於て販路を發見すること困難である。戦前には一部

獨國へ輸出されてゐた。従つて市場は大戦以來大打撃を蒙つた。最近漸く之等混合鑛にして處理を加へウオルフラムを所有者に返したる後ペナン (Penang) に賣鑛する方法を發見したる模様なり。

B 亞 鉛

一、亞鉛の相場並に世界産額

大戦以來相場は適當り一五磅(二六一ピアストル)に統制されてゐたが十二月十七日に緩和され長適當り二五磅一五(四五〇ピアストル)に反撥した。一九三九年の平均相場は二五六ピアストル、之に對して一九三八年には二三四ピアストル、一九三七年には二六八ピアストルであつた。磅に換算すれば一四磅五に對して一九三八年には一三磅九九、一九三七年には二二磅二であつた。一九三九年十一月二日附佛國法令に依り國內及殖民地の鑛石に含有せらるる亞鉛の價格は適當り四・一〇〇法と決定せられた。

金屬亞鉛の世界産額は一、六六四・〇〇〇噸に上つた(記録年度)。之に對して一九三八年には一、五九八、〇〇〇、一九三七年には一、六一九、〇〇〇噸であつた。

一九三五年一月二十四日附法令による生産者に對する獎勵金は一九三九年上半年に於ては前後二回共鑛山局より支拂はれた。

下半年に於ては右の獎勵金は取止めとなつたものらしい。

大戦前の佛國向け船貨は四六ピアストルであつた。

二、印度支那に於ける亞鉛

が近く開始せられるであらう。又右鑛脈中、デオ・アン (Deo-An) の異極鑛層に坑道を穿つて探査を續行中である。ファイアカオ (Fiakao) 及カオピン (Kao-Pinh) に於ても正規の探掘を續行してゐる。ルン・ホアイ (Lung-Hwai) 區は再開せられ、サン・チイン (San Thinh) 鑛床は準備中である。

C 鉛、銀

亞鉛鑛鑛場に於て副産物として少量の鉛が生産される。

シン・キューイ (Sinh-Quy) の調査に依れば一九三八年に於ける如く六七%の鉛を含有する方鉛鑛〇兩五と一兩に付銀二五四瓦を發見した。

ボン・ミユ (Bong-Mieu) の生産物には銀四九兩三三三を含有してゐた。E・W・T社の物には二兩九二二を含有した。全體で一九三九年には五二兩である。

銀の平均相場は一兩に付四八ピアストルであつた。

最近四十年間(毎十年間を一期とす)の探掘量を示す表

鉛——(亞鉛を参照すべし)

方鉛鑛に含有せらるるもの	一九〇〇—一九〇九年	一九一〇—一九一九年	一九二〇—一九二九年	一九三〇—一九三九年	計
	〇	〇	二、二一一	一一六	二、三二七兩

ボン・ミユの金鑛に含有せらるるもの	計
一八一	一八一
三一七	三一七
〇	〇
五三二	五三二
六四八	六四八
一、〇三〇	一、〇三〇
三、三五七	三、三五七

D 金鑛業、砂金採集

一、東京地方の探掘場

東京地方の錫及フォルフラムは七五%の金一兩六八六を生産した。其中三兩七五二は大戦以來である。

金採掘を兩を以て示す

E ル ダ グ ル	W ネ	T (Rene) (Vang Yen) (Dal Thong) (Ban Nam) (Louis(Soula))	一九三八年	一九三九年	大戦後 四ヶ月の三倍	勞務者
八、一二九	〇、〇五七	〇、〇三〇	八、七六四	〇、〇四八	八、四四二	一
〇、〇三〇	〇	〇	〇、〇四五	〇、〇四五	〇(苦力なし)	四〇名
〇	〇	〇	一、七九二	一、七九二	一、六〇〇	二三
〇	〇	〇	〇、一四〇	〇、一四〇	〇	七五
〇	〇	〇	〇、一三〇	〇、一三〇	〇、二二〇	五
八、二一六	一〇、九一九	一〇、二五二	一〇、九一九	一〇、二五二	一〇、二五二	八
計						一五一

二、ボン・ミュン山（安南）

印度支那鑛山農業開發會社 (Société Indochinoise d'Exploitations Minières et Agricoles = 略稱 S. I. E. M. A 社) は一應に付五瓦の金を含有する鑛石二二、七〇九噸を採掘した。之に對して一九三八年には二六、二八六噸であつた。アン (An) 及ニューイ・ケム (Nui Ken) に於ても採掘を續行してゐる。アンでは鑛脈 O、I、D に於て又ニューイ・ケムでは鑛脈 A・B・C、D、O、I に於て準備作業を實施した。エルベ (Herbat) に於ては調査を實施中であつたが應召の結果人員が一〇名より七名に減少した。之に依り準備作業は一頓挫を來した。

産額の低下したる主たる原因は勞力の不足である。右に關しては主務官廳に於て對策を講じた所である。一九四〇年には産額は上昇を示した。大戰以來、平均八四三名の勞務者を要する所に僅か六八〇名を使用してゐるに過ぎない。従つて最近四ヶ月間に産額が六、八五三噸に低下したのである。

	一九三八年	一九三九年	戦後四ヶ月の三倍
金 (噸)	一四三、一五二	一〇九、八四二	一〇三、九六八
銀 (噸)	七五、三六六	四九、三三三	?
計	佛國へ輸送		鑛石中の含有量

右は約五〇%の金塊、二四%の銀塊として發送するものである。

(諸作業) 舊ロバイ (Colbay) 工場を復舊し第六水平坑道に百馬力のコンプレッサー取付け、エルベ作業場用として高壓線工事、ソンヴァン (Song Yang) 河の流れを調節しマラリヤ豫防を容易ならしむる爲め浸水ダム工事、六百馬力の

チーゼル・エンジンの取付け、ボン・ミュン路、橋の補強工事、フィオラス樹の (firaz) 植付け。

三、砂 金 採 集

砂金の採集高は依然として頗る不詳であるが地方官廳より提供せられたる數字を掲ぐれば左の如くである。

安 南 地 方	一〇乃至一五 噸
コ ン ツ ム (Kontum)	一乃至二 噸
ヌ ゲ ・ ア ン (Nha-An)	不 詳
フ ア イ フ オ ー (Faifo)	約 一五 噸

老 樁 地 方

ヴ イ エ ン チ ヤ ヌ (Vientiane)	一・五 噸
タ ケ ツ ク (Thakhek)	二 噸
チ エ ボ ー ネ (Tchepone)	〇・八一〇 噸
ル ア ン ・ プ ラ バ ン (Luang-Prabang)	一四 (?) 噸
ウ エ ー サ イ ・ サ ム ヌ ア (Houei-Sai-Samneua)	?

老樁地方の總産額は大約二五噸程度ならん。

東 京 地 方	一九三八年	一九三九年
バ ッ ク ・ ジ ア ン (Bac-Giang)	〇、三三〇	〇、九二二

鑛	一九二〇—一九二九年	一九三〇—一九三九年	一九四〇—一九四九年	計
	鑛石	五、八〇〇	二、二一一	
金屬鐵の含有量	二、九〇八	一、四一二	一六二、一〇七	一六六、四二七
金屬マンガンの含有量	〇	〇	七、一七三	七、一七三

S. F. C. T. 「ケヤクオ (Kéao)」 シホウラ (Sutira) 「アベリ (Abel)」 ヌギノイホン・セロ・ラン (Nguyen-Huu-Lan) ヌギノイホン・エポワール (Nguyen-Huy-Espoir) ヌギノイホン・セロイ・ラン (Nguyen-Huy-Tran) 「タナク・ロン (Thanh-Khoan)」 ドロン・タン (Do-Long-Giang) トランシロヤ (Tranchesse) シホウラ (Sutira) 「トウタタツ (Too-tat)」 ガ ル ニ ュ (Garnier) ミタール (Mitar) 「フドイ・ヤン (Fui-Ban)」 ビユイ・ヌンク・ノドオン (Bui-Ngoc-PhuPhuong) 「タン・キー (Thanh-Ky)」	生産額		鐵含有量		マンガンの含有量		勞務者	
	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
	10,212	4,232	4,718	2,072			263	183
	20,221	5,523	43,173	26,772			22	22
	2,200	5,232	2,022	2,220			7	7
	2,222	12,100	2,102	2,220			120	100
	0	1,222	0	972			0	20
	0	100	0	22			0	0
	0	1,220	0	22			0	0
	2,100	2,220	2,222	1,222			102	100
	2,220	10,220	1,222	2,022			101	100
	0	2,000	0	1,222			0	200

グドイ・ユトイ・チン (Bui Huy Tin) 「ケ・タム (Khe-Quang)」 フドク・タン (Pho Thanh) 「ハ・キド (Yen-Du)」 ヌギノイホン・セロイ・ラン (Nguyen-Huy-Tran) 「タナク・ロン (Thanh-Khoan)」 ヌギノイホン・セロイ・ラン (Nguyen-Huy-Tran) 「タナク・ロン (Thanh-Khoan)」 「チン・チン (Chien-Tien)」 其	生産額		鐵含有量		マンガンの含有量		勞務者	
	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
	2,222	2,222	4,222	1,222			22	22
	10,222	12,100	4,222	2,222			22	22
	12,222	2,222	2,222	2,222			22	22
	1,222	1,222	100	22			?	22
計	12,222	120,222	22,000	27,222	1,222	1,222	2,220	2,200

少量の鐵の貧鐵はセメント工場に賣鐵するのを常とする。尙、一工業家の求めに應じてマンガンを七八噸を賣渡し富化、粉砕其他の用途（酸化物は電池用に）供せしめた。戦時船腹の不足に依り純鐵を佛國に向け輸出せんとする計畫は失敗に歸した。

日本向け輸出は依然繼續されてゐる。印度支那商工業會社 (La Compagnie Indochinoise de Commerce et d'Industrie) は海防經由、八隻の船舶を以て六一、四一一噸の鑛石を輸出した。其の内譯は左の通り。

鐵

- | | |
|--------------------------|---------|
| アベル・リリット (Abel, Lillith) | 四〇、〇九四噸 |
| タツチ・コアン (Thach Khoan) | 九、四四三噸 |
| エスポワール (Espoir) | 三、七九五噸 |
| ニユイ・バン (Nui Ban) | 四、九七六噸 |
| フン・ヅノオン (Hung Vuong) | 一、七〇三噸 |

計
マンガン
六〇、〇一一 噸

カオ・バン (Cau Bang) 九五〇 噸
エン・キエー (Yen Cu) 三〇〇 噸
サン・ロイ (Xuan Loi) 一五〇 噸

計 一、四〇〇 噸

業者の言に従へば更に之れに安南海岸よりの輸出として左記のものを加算すべしとしてゐる。

	鐵	三〇對二十五の混合物	マンガン
ケ・クワン (Kieu Quanh)	五、三六八 噸		
エンキエ等 (Yen Cu)	一〇、三四六 噸	一、七五〇 噸	一、〇〇〇 噸
チャン・チエン (Chan Tien)	七、六〇〇 噸		
計	二三、三一四 噸	一、七五〇 噸	一、〇〇〇 噸

之れに依り左記の計を得る。

鐵 八三、三二五 噸
マンガン 二、四〇〇 噸
混合物 一、七五〇 噸

計 八七、四七五 噸

之れに依つて見れば年半ばにして許可證の交付が困難となれる爲、一九三八年に比して僅かに減少したのを見る。税關の統計に依れば

鐵 七五、五六〇 噸 價格 五、六三五、〇〇〇 法
マンガン 二、八六六 噸 價格 七六八、〇〇〇 法
計 七八、四二六 噸 價格 六、四〇三、〇〇〇 法

但し右の統計には安南海岸よりの積荷を除外してある。

許可證の受領困難なる事實は鑛業の經營を著るしく阻害した。大戰以來營業を開始したる鑛山は左記數鑛山に過ぎないのである。

	鑛石	含有鐵	含有マンガン	勞務者
ケ・バオ (Kéao)	四九八 噸	二三四 噸	〇 噸	一二〇 名
アムル・リット (Ahol, Lihh)	二〇、七八五 噸	一一、一二〇 噸	〇 噸	四八八 名
エスポアル (Espohr)	二、〇二五 噸	一、〇八〇 噸	〇 噸	五六 名
トック・タック、フン (Toc-Tat, Hung)	一七五 噸	— 噸	八二 噸	一〇 名
エン・キエー等 (Yen-Cu)	八二六・五 噸	三八七 噸	二二 噸	一二〇 名
計	二四、三〇九・五 噸	一一、八一 噸	一〇三 噸	七九四 名

右の数字を三倍し	七二、九二八・五	三八、四三三	三〇九	七九四
平年と比較すれば	一三九、二二四	六六、七四八	一、六七四	二、九〇〇

七〇

主務者より總督宛に許可制の緩和方を要請したる結果斯業の經營は徐々に現狀に復しつゝある、ケバオ(Kelao)鑛山 經營狀態極めて不振、最優秀鑛にして四五%に過ぎず貧鑛はセメント工場に賣渡してゐる。アベル・リリット(Abel, Liith)鑛山 リリット鑛山は殆んど採り盡し、アベル鑛山の生産擴充を計り六十疋軌道の敷設、新發車場の設置、車輛の購入を急いでゐる。

タンキー(Thanh-Ky)鑛山 一九三九年初めより運轉を開始す。

エンキュー、ヴァントリン(Yen-Cu, Van Trinh)鑛山 數次に互り休止したるも目下生産擴充をなしてゐる。

大戰以來日本向け船賃は一〇ピアストルより一六ピアストルになつてゐる。鐵鑛の海防甲板渡し價格は約六ピアストル五〇である。

ニューカレドニアより日本向け鐵鑛の輸出開始狀況に就いて言及せんに、一九三九年に始まり八三、五六七噸を輸出してゐる(ゴロ鑛山)(mine de Goro)一九四〇年には四〇〇、〇〇〇噸の輸出計劃がある模様である。二殖民地の鑛物に關しては日本市場に於て大販路ある見込である。而して目下の處競争者の處れもない。

F アンチモニー

一九三九年に於けるロンドン市場の五〇乃至五五%の硫黃の相場は平均八一片、一九三八年には五七片、一九三七年には八四片であつた。從來上部東京地方の諸鑛山より専ら採掘されて居たが緩慢に維持せられたるに過ぎず。順調に繼續せられたるものは一つも見當らなう。毎十年間の採掘量は左の通りである。

一九〇〇—一九〇九年	三一〇噸
一九一〇—一九一九年	四、六五〇噸
一九二〇—一九二九年	〇噸
一九三〇—一九三九年	一、三四三噸
採掘量合計	六、三〇三噸

	噸		數		戰後四ヶ月の三倍		アンチモニー含有量		勞務者	
	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
ボムツク(Bobek)(酸化物)、 タツケケ(That Khe)	三、三	一、四九	〇	〇	一、七八	〇、七四	無名	無名	〇	〇
マリ・フオミン(Marie Phong)(酸化物)	一七	五七、五七	〇	〇	九五、六五	三二、〇〇	一三	二〇	〇	〇
チュウ・ン・ン(Thu-Rang)(硫黃)	五	〇	〇	〇	二、五	〇	一	〇	〇	〇
ナム・サイホン(Nam-Vien)(硫黃)、 ティン・テトク(Tinh-Tue)	五	〇	〇	〇	三、五	〇	一	〇	〇	〇
ティン・サユオン及ティンロン(Tinh-Vuong & Tinh-Luong)(酸化物)、 バンツク・カン(Bao Kan)	〇	三、五	〇	〇	〇	一、五七	〇	一	〇	〇

七一

同	右(硫黄)	同	右	0	1.5	6	0	0.675	0	1.5
—	—	—	—	120.3	25.04	43.65	104.3	34.02	(註) 1.5	20

(註) 各種の調査をも含む。

全輸出額は四六〇六、價格一〇五、〇〇〇法に達した。マリー・フォンの二〇〇噸はアントワープへ發送された。大戦以來佛國向け船貨は七二志(六四ピアストル)となつた、一九三八年には三六ピアストルであつた。海防を經由して大量の支那産アンチモニー(支那は世界産額の三分の二を占めてゐる)が無税にてポール・バイヤー(Port-Bayard)に輸送せられてゐる。少量の蒼鉛も輸送せられてゐる。

G 燐

海防(S・N・P・T會社)及ヴィン・ベン・チュイ(Vinh Ben-Thuy)(C・P・A會社)の工場に於ける産額は左の如くである。

粉	末	燐	一九三八年	一九三九年	戦後四ヶ月間の 數字を三倍す
東京燐製造新會社 (S.N.P.T.) 安南燐製造會社 (C.P.A.)	Société Nouvelle des Phosphates du Tonkin Comptoir des phosphates de l'Annam		三三、一七四噸 四、一六七噸	二八、八一五噸 六、八八三噸	一一、三八〇噸 六、五八二噸
計			三七、三四一噸	三五、六九八噸	一八、九六二噸

東京燐製造新會社(Société Nouvelle des Phosphates du Tonkin — S・N・P・T)は三八、六七七噸の粗製燐を處理した。其中一七、三〇六噸はヴィン・ベン・チュイ(Vinh-Ben-Thuy)及ヌゴ・カン(Nguyen-Canh)附近の鑛山より産出したるもので労働者百名を使用してゐる。之等の鑛山は東京燐製造新設會社と契約したる量の採掘を終へたるを以て目下業務を停止してゐる。チュオン・ホワ(Thuong-Hoa)鑛區(安南)に於ては一六、四八七噸を産出した。其中八〇噸は鑛山局視察團の指示に基きバラセル(Paracels)群島より輸送せられたものである。來春には再び發送せらるであらう。右の鑛物は總督廳の命に依りS・N・P・T會社に賣渡された。

八月七日附法令に依り、タイ・ヌグエン(Thai Nguyen)の特定地區に於てS・N・P・T會社に對して鑛區が許可された。

C・P・A會社はマノン(Manon)鑛山に於て平均五五名の勞務者を使用して五、三九二噸を採掘した。十月、十一月には豪雨の爲め事業は甚だしく停頓した。

一九三九年初めには燐の需要頓みに増大した。然るに同年末に至りて需要が俄かに低下したのは主としてS・N・P・T會社に對する交趾支那の購買力が減少したるに起因するものである。即ち一九三九年下半年に於ては五、〇七〇噸(而して大戦後は一、四五〇噸)である。然るに一九三八年の上半期、下半期には夫々一一、九〇〇噸、五、四五〇噸を示した。一九三九年末の早魃は一九四〇年初めに於ける販賣力の繼續的危機を豫想せしむ。其他、諸鑛山、勞力飢饉に悩み、且又河川、海上運賃の値上りは分散的販路を有する本製品の廉價販賣に重大なる影響を齎すことは論を俟たない所である。

粗製品の價格は二六五、〇〇〇ピアストルにして粉末燐の賣價は(運賃共、但し袋の値段を除く)約七〇〇、〇〇〇

ピアストルである。輸出額は一一、八四六噸、價格四、三七〇、〇〇〇法であつた。特殊の用途に供せられる(園藝用、砂糖黍の肥料として)チュニス向け燐を考慮に入れる必要がある。

年々一、〇〇〇、〇〇〇噸の燐を消費する日本は其の一部を愛蘭に仰いで来たが、戦時船舶關係より次第に印度支那に對して關心を有するに至つた。將來ラオカイ(Lao-Kay)の燐灰石を採掘する可能性が充分考へられる。本燐石は其儘日本に發送され酸性燐酸鹽に變化されるのである。

天然燐の毎十年間の採掘量を示す表

	一九〇一—一九一九年	一九二〇—一九二九年	一九三〇—一九三九年	計
東 京	四、一〇〇	一〇四、八八九	八〇、〇九六	一八九、〇八六噸
安 南 及 東 埔 塞	二、九五〇	五三、四二三	九二、七八一	一四九、一五三噸
總 計	七、〇五〇	一五八、三二二	一七二、八七七	三三八、二三九噸

H 凍 石

凍石鑛山は一九三九年に再探掘せられたものである。ボーカルノ氏(M. Baucarnot)は第Iマン(Maso II)(フエー・ト・フア・ティン)鑛山に於て露天掘りにて探掘した。土石は手選した(炭酸石灰及白雲石)。採掘地附近一帯を踏査したる所、轉石を發見したるのみ、鑛脈の存在を認めない。歐洲人の鑛山長一名あり。

山出し方法 ドン・ヴァン(Dang-Van)迄貨物自動車、ドン・ヴァンより河内迄サンパンによる。

鑛石の全部は所有者の經營する河内工場に於て破碎せらる。大戰以來諸工業(東京紡績工業、ダップ・カウ(Dap-Cau)製紙工場、ゴム製造工場等)の發展の結果地方への販路が急速に増加した。

ラグット氏(M. Lagoutie)は極めて良質の凍石のレンズ狀鑛脈を坑内掘した。右鑛山は勳員令の爲一時休止したるも、佛國の一電氣陶磁器工場より注文ありたるを以て近く開始の運びに至るであらう。一九三九年にはマルセイユに向け七〇噸を發送した。ボーカルノ氏經營の工場に於て破碎したるもの四〇噸。

前記の二所有者(ラグット氏及ボーカルノ氏)は夫々耐火煉瓦工場及凍石鑛山に常時勤務す。

	噸 數		勞 務 者	
	一九三八年	一九三九年	一九三八年	一九三九年
第Iマン(Maso II)	〇	二七〇	?	二四
ラン・ウオイ(Lang-Voi)	〇	一三〇	一一	三三
計	〇	四〇〇	一一	五六

一九三五年(最初の探掘)以來の全採掘量は一、四四八噸である。

I ポーキサイト、石綿、天然硫酸バリウム

ポーキサイト

一九三六年(最初の探掘)以來の全採掘量はラン・ソン(Lang-Son)鑛山に於ては五二〇噸、イオ・ケー(Mao-Khe)

鑛山に於ては九、〇〇〇噸である。ボーカルノ氏のボーキサイトと採掘場周邊(ラン・ソン)の産額は三三〇噸、一九三八年には一六〇噸であつた。勞務者は一九三八年の二〇名に對して二八名を使用した。右は白色ボーキサイトにして印度支那煉瓦工場タツプ・カウ製造所に於て礬土耐火煉瓦の製造に使用せらるゝものである。大戰以來之等礬物の需要は著るしく増加した(セメント工場、蒸溜所、精煉所等)而して最近四ヶ月間の採掘量は一八〇噸である。主要盆地の周圍(四五%の白色ボーキサイト)に對して、試験をなしたる所五〇%以下の赤色ボーキサイトを發見したに過ぎない。

一九三九年に於てラン・ソン及マオ・ケー地方産のボーキサイトの見本多數を佛國に送り試験に供した。

ヌギユイエン・ヒュー・ラン(Nguyen Huu Lan)氏は大戰以來マオケー地方より四五%のボーキサイトを二、〇〇〇噸採掘し香港に輸送すべく計劃した。

石 綿

採掘は再開始せらるゝに至らず、鑛山局はホア・ピン(Hoa Binh)地方の産出物に對して各種の利用方法に關する試験を命じた。一九三六―三七年に於て一三噸五の石綿を採掘した。其後全然採掘せられてゐない。

天然硫酸バリウム

ソン・ジアン(Song Giang)鑛山に於て五五噸を産出した。一九三八年には五〇噸であつた。従前通り二二名の苦力を使用してゐる。近き將來に於て東京の天然硫酸バリウムの輸出が計畫されてゐる。之の目的に従ひコ・チュック(Co-Thue)に於て調査したる所一〇〇噸を得た、内三五噸は地方用に供し、六五噸は上海に輸送する(一五名の苦力使用)。上海向け運賃は大戰以來一〇ピアストル五〇となつてゐる。

一九三五年(最初の採掘)以來の全採掘量は二四五噸を示した。エディト(Edith)鑛山は一九四〇年初めに開始す

る(目的は合衆國向け輸出)

丁 寶 石 類

バイリン(Pailin)採掘場に於ては左の成績を示した。

サフアイヤ	一二・四三	價格	五八、六三二ピアストル
ジルコン	三九・九一五		三、七〇〇
ルビ	〇・五〇〇		三〇〇
計	六一・八四五		六一、六三二

ボケオ(Bokao)採掘場に於ては一、〇〇〇名の苦力を使用して七〇噸價格四〇、〇〇〇ピアストルを産出した。結局總計すれば左の如し。

一九三九年	一三三三噸	一〇三、〇〇〇ピアストル	勞務者	一、二〇〇名
一九三八年	九三三噸	六四、〇〇〇ピアストル	勞務者	一、一五〇名

研磨作業は現場に於てビルマ人職工が實施し又は之を泰國或ひはブノン・ペン(Phnom-Penh)(シム・ハンド Gemindo 社)に輸送して實施せられる。一九四〇年には大量の註文特に青ジルコンが合衆國より同會社に對して發せられた。

其他、ダングレットク(Dangrecks)山脈(泰國々境)中の鑛脈を擧げなければならない。上記は泰人が時折發掘するに過ぎない。

税關の統計に依れば輸出は三七九噸、價格一六一、〇〇〇ピアストル(特に泰國向)であつた。六五〇、〇〇〇法の

磨き済寶石類が英領印度向け發送せられた。

輸入は四疋一九、價格八六四、〇〇〇法であつた。パイリンよりは一九一八年以來六二〇、〇〇〇ピアストルの寶石類、ボケオよりは一九三二年以來一九〇、〇〇〇ピアストルの寶石類を産出した。

K 黒玉

東埔塞のペラン氏の採掘に係りブノン・ベンに販賣される。

	一九三八年	一九三九年
アン・ロン・チャウ (An Long Chau)	六・一九七	八・五四八
ルイゼット (Louissette)	七・九九八	八・三三八
計	一四・一九五	一六・八八六
勞務者	二一九名	一〇〇名

ルイゼット鑛山の中央部は既に採り盡された。

尙、雨期に入れるを以て鑛山は例年の如く閉鎖した。鑛山長の應召、支那市場の閉鎖により同鑛山は休眠状態を豫想せられる。

早魁季節が例年より早く到來したるに拘らず、十二月に入りて未だ産出を見ない。

採掘は三米又は四米の堅坑に數箇の坑道を穿つて實施せられ、黒玉は砂岩と近世の泥灰石に接觸して厚さ數厘の薄板状をなして極めて不規則に發見せられる。

一九三三年開始以來の全採掘量は一〇六噸四に上る。

L 硫黄

サム・ヌア (Sam Neua) (老樞地方) の硫化鐵を蒸溜するに土民は次の方法を用ひる。それは土鍋を倒に立て其口には竹棒をつなぎ、鍋の中には二級品の硫黄を入れ他の容器に一級品を受ける様にするのである。一級品の價格は疋に付〇ピアストル五〇である。輸入したる硫黄の河内に於ける賣價は〇ピアストル五〇乃至〇ピアストル六〇、サム・ヌアより河内迄の運賃が約〇ピアストル一五であるから、賣價が少しく上げば之の硫黄の利用が可能となるであらう。

従來、之の硫黄は現地に於て土民が火藥製造に使用してゐる。品位は九九・五六乃至九九・七六である。印度支那に於ける硫黄の輸入量は一九三九年に於て三二三噸に達した。其中一五五噸は東京に輸入せられたるものである。

M 其他 鑛物

先般鑛山局に於て、嘗て支那人の開發したるハイ・ジアン (Ha Giang) 鑛山の水銀鑛脈を視察したが何等關心に値する結果を齎らさなかつた。東京經由にて大量の水銀が支那より無税にて輸送せられる。

南部地方のモリブデン鑛脈は目下鑛山局の注意を引いてゐる。近く同局に於て調査を開始するであらう。嘗ては左記の諸鑛物が採掘された。

銅	(一九二〇—二一年)	鑛石の採掘量	一、一〇〇噸
ユラニウム	(一九二〇—二一年)	一二%鑛石の採掘量	三噸五
クローム	(一九二四—三一年)	鑛石の全採掘量	四、二六四噸
石	墨 (一九一九—二七年)	全採掘量	九、五三六噸
		金屬の含有量	一一、一五七噸

年次	有效ノ調査許可證 十二月卅一日迄	ケル鑛業特許件數 十二月卅一日ニ於テ	總產額 (百萬ピートル)	勞務者總數 (千名)	石炭生產總額 (千噸)	亞		鉛ノ屬生產額 (千噸)	生産額(1)金 (千噸)
						鑛石生產額	金屬含有量 (噸)		
1913	3,109	139	4.0	12.0	509	33,400	15,400	—	72
1914	2,005	162	4.8	15.0	620	31,500	14,900	—	84
1915	1,306	198	6.5	13.5	644	34,300	17,000	—	98
1116	1,103	205	8.6	17.0	686	48,800	23,000	—	100
1917	1,224	215	6.8	17.0	654	42,500	19,700	—	115
1918	1,467	218	5.5	16.0	637	28,600	12,900	—	85
1919	706	222	4.6	12.2	665	16,000	7,000	—	—
1920	673	224	4.5	12.2	700	7,200	3,400	—	—
1921	782	236	7.3	15.6	921	11,100	5,000	—	—
1922	948	251	8.2	20.6	990	20,936	8,656	—	3
1923	1,290	266	9.6	21.6	1,057	30,500	13,014	—	3
1924	1,347	287	11.4	28.6	1,236	42,558	16,795	72	4
1925	1,863	311	13.8	32.2	1,363	53,026	20,792	1,158	11
1926	3,424	322	14.9	34.4	1,090	61,462	25,245	1,858	5
1927	4,776	350	16.5	38.3	1,486	55,162	22,274	1,167	7
1928	8,185	320	18.5	54.0	1,967	52,201	21,486	2,884	10
1929	17,685	352	18.6	52.0	1,972	47,509	18,760	3,809	13
1930	16,818	420	16.8	45.7	1,955	38,164	15,891	3,856	9
1931	13,098	536	13.1	36.5	1,726	18,724	8,066	2,882	7
1932	1,973	572	11.8	33.5	1,714	10,095	5,000	2,280	7
1933	1,317	563	10.0	35.4	1,591	12,382	4,990	3,249	5
1934	957	556	9.6	34.8	1,592	11,968	4,959	4,240	220
1935	906	500	11.2	39.0	1,775	11,602	5,046	3,904	266
1936	1,000	402	13.0	43.8	2,186	11,382	5,221	4,112	204
1937	1,356	355	19.3	49.2	2,308	11,100	4,958	4,204	182
1938	1,620	339	26.5	52.7	1,335	11,735	5,162	4,470	151
1939	1,631	339	29.5	55.0	1,615	13,360	5,867	5,328	119
1940	1,531	292	30.2	49.0	2,500	15,340	6,900	6,104	134

佛印鑛業情勢一覽表

錫及タングステン				鐵及マンガン			粉末燐ノ生産額 (噸)	鹽坑(千噸) 生産額	(1) 砂金採集ヲ含マズ 一九三三年及 一九三四年ハ 輸出量ナリ	(2) 精煉シタル 錫 一九三三年 ヨリ	(3) 一九三三年 及 一九三四年 ハ 輸出量ナリ
鑛石生産額	錫含有量	無水酸含有量 タングステン	錫生産額 (噸)	鑛石ノ生産額	鐵含有量	マンガン含有量					
197	44	92	—	—	—	—	—	175.1	—	—	
310	51	161	—	—	—	—	—	193.5	—	—	
420	84	210	—	—	—	—	—	171.4	—	—	
430	87	205	—	—	—	—	—	131.4	—	—	
520	104	247	26	—	—	—	—	147.9	—	—	
610	152	247	69	—	—	—	—	127.0	—	—	
430	141	147	68	5,800	2,908	—	—	159.5	—	—	
440	185	99	96	2,376	1,145	—	—	142.4	—	—	
600	310	80	175	—	—	—	—	130.4	—	—	
708	410	63	247	200	100	—	7,600	118.2	—	—	
677	360	77	307	85	42	—	9,300	124.3	—	—	
853	470	88	334	250	125	—	10,200	159.9	—	—	
1,068	590	110	327	—	—	—	14,700	200.1	—	—	
1,070	603	99	333	—	—	—	16,700	201.8	—	—	
1,279	710	127	312	—	—	—	18,700	195.8	—	—	
1,446	763	105	263	—	—	—	11,800	161.2	—	—	
1,579	842	119	394	—	—	—	17,700	255.1	—	—	
2,105	1,009	132	289	—	—	—	26,565	237.3	—	—	
1,925	888	156	68	—	—	—	3,858	249.7	—	—	
1,915	1,017	147	—	—	—	—	6,500	251.2	—	—	
2,080	1,055	151	728	—	—	—	—	145.5	—	—	
2,364	1,151	182	1,038	1,540	600	—	4,064	160.5	—	—	
2,742	1,331	250	1,230	2,200	310	620	5,888	206.8	—	—	
2,880	1,403	302	1,135	13,450	4,870	1,613	10,336	192.2	—	—	
3,182	1,602	389	2,691	38,570	16,370	2,536	20,252	180.0	—	—	
3,282	1,625	327	2,872	132,500	71,880	1,114	37,340	180.0	—	—	
3,037	1,491	304	2,014	138,200	70,660	1,675	35,700	213.5	—	—	
2,869	1,496	234	2,132	33,100	17,250	320	24,340	189.4	—	—	

第四章 鑛山諸施設

A 發電設備—發生エネルギー

發電設備	二二、六〇〇キロワット	燃料鑛山	一三、四〇〇キロワット
		金屬鑛山	八、二〇〇キロワット
發生及消費エネルギー		燃料鑛山	二九、一三〇、〇〇〇キロワット時
四四、四六〇、〇〇〇キロワット時		金屬鑛山	一五、三三〇、〇〇〇キロワット時

火力中央發電所と水力中央發電所との内譯は左の通り。

火力中央發電所	一四、八〇〇	裝備電力(キロワット)	發生エネルギー(キロワット時)
水力中央發電所	六、八〇〇		三九、四〇〇、〇〇〇
計	二一、六〇〇		五、〇〇〇、〇〇〇
			四四、四〇〇、〇〇〇

供給エネルギーは一、八五〇、〇〇〇キロワット時であり、中一、二二〇、〇〇〇キロワット時はマオケ (Maokhé) (S.F.C.T) に六三〇、〇〇〇キロワット時は東京新設磷製造會社 (Société Nouvelle des Phosphates du Tonkin) に供給、前記會社の中央發電所は一九三八年以來休止してゐる。

チュエン・クワン炭業會社 (Société des Charbonnages de Tuyen-Quang) はチュエン・クワン市にエネルギーを供給してゐる (六〇、〇〇〇キロワット時)。

B 精 煉 所

印度支那鑛山の錫精煉所は依然不活潑である。雲南産鑛石の海防精煉所に關しては第七章に述べる所あるべし。クワン・エン錫精煉所は第三章Bに述べたり。

其他の工場

骸炭及煉炭工場 (第二章A) を除外すれば二つの磷破碎工場 (第三章B)、滑石破碎工場 (第三章H) 及寶石研磨工場 (第三章J) があるのみである。

マイ・ナム氏 (M. Mai Nam) 氏がダツブ・カウ (Dai-bau) [木炭] 附近に設立中の大型爐は未だ竣工せず。同地方に於いて製鐵業の諸計畫があるが一月一日迄は未だ實現に至らず。

第五章 鑛山勤務員、労働條件、鑛山衛生と救濟施設。

A 勞 働 法

一九三九年八月三日附總督令を以て一九三六年八月二十九日附總督令を改正し坑内作業中事故に關する訴訟手續を簡

易ならしめた。

一九三九年九月十一日附總督令に依り、一五乃至一八歳の男子の坑内作業に關し特別條件を決定した。

勞務總監督局は一九三九年九月三日及二十日附を以て戰時中鑛山産業總監督局の統制する企業に關する現行法規の勞働時間を改正すべく決定した。

其他勞務總監督局に於いて規定したる條文多數あり（最低給料、勤務期間、休暇、勞働時間及所定時間外勤務の拒絶に對する制裁）

B 職員數と其の内譯

諸鑛山に於いて使用せる定員（申告數）第一章Gの表に記したる數字より稍々少である。之れ若干の推定を含むは左の如し。

年次	歐洲人	亞細亞人
一九三三年	二二〇	三五、四〇〇
一九三四年	二〇〇	三四、八〇〇
一九三五年	二〇一	三九、〇〇〇
一九三六年	二二二	四三、八五〇
一九三七年	二七一	四九、二〇〇
一九三八年	二六五	五二、六五五

一九三九年

二二九

五五、〇〇〇

右表中亞細亞人のものは出席者數平均である。炭鑛の精働者は五〇%であるから、臨時勤務又は常時勤務坑夫總數は約九〇、〇〇〇と推定せられる。

勞力の内譯は左の如し。

安南	三、〇一五
老撾	二、一〇〇
東埔	一、三〇〇
東塞	一、三〇〇
東京	残り全部
鑛山別に見れば	四八、五七五

鑛山別	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
燃料	二九、七〇〇	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	三七、二〇〇	四〇、〇〇〇	四三、六〇〇	四三、五〇〇
金屬	五、六〇〇	四、五〇〇	四、七〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、五〇〇	一〇、八〇〇
其他	—	三五五	二〇〇	二五〇	八二〇	四〇〇	一、五〇〇
計	三五、〇〇〇	四八、〇〇〇	四五、〇〇〇	四三、八〇〇	五〇、二〇〇	五二、六〇〇	五五、〇〇〇

C 勞力不足

前掲の表に於ては一九三八年度の勞務者數と一九三九年度の勞務者數との間に著るしき差は認められないが、一九三九年度の生産高は顯著な發展を示して居り、勞務者に不足がなければ一層増産をなし得たらんと思はれる。

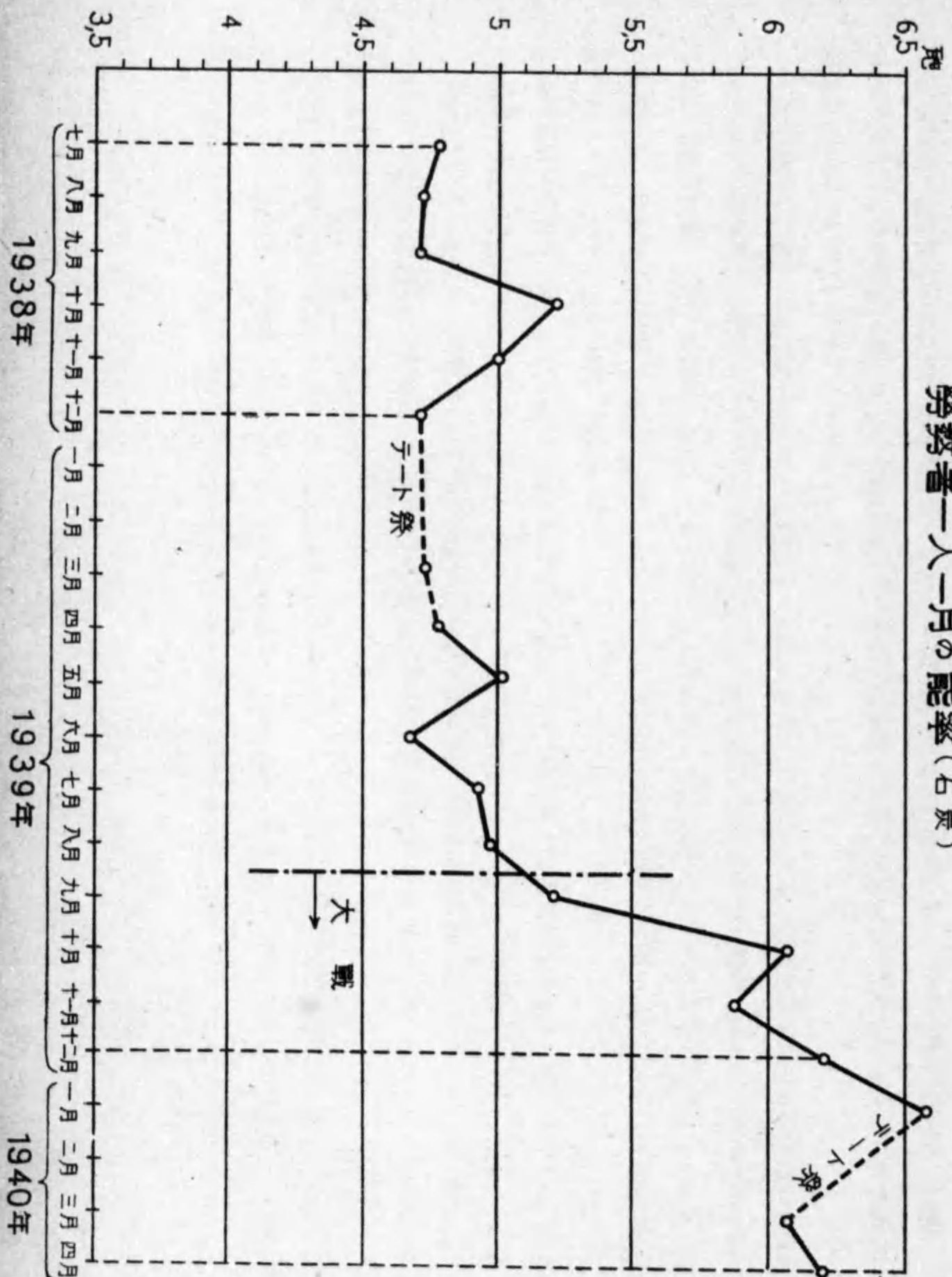
實際、定員數の低落は大鑛山に於いて甚だしかつたが、小鑛山に於いては之に反し勞務者數は大であつた。之、安南人を郷里より召集する事が困難なる爲である。臨時に數百名の坑夫を求めるとは到る處で出来るが之等の坑夫を大中心地に移住せしむる事頗る困難である。

次表は大鑛山の毎月の勞務者數を示したものであるが、之れにも勞力不足狀態が判然と表はれてゐる。

鑛山別	勞務者數												
	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計	燃料	金屬
大鑛山	五〇・七	四八・九	四七・〇	四四・五	四四・二	四四・一	四三・七	四三・〇	四一・七	四一・五	四八・二	五〇・七	七・五
小鑛山	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五	五二・五

燃料鑛山は特に打撃を蒙つたがわけても地下坑内業者である。この種の作業は安南人の好む所でないからである。戦時下、特殊技能を有せざる勞務者を南部地方、ニューカレドニア、大洋洲開墾事業に、軍隊に、作戦道路工事に大量の人的徵用を行つたに因るものである。本作業に熟練したる勞務者を徵集する方がこの非常なる事態に對し即應すべく全然不適當なる農夫を使用する方より簡單なるは言を俟たない。鑛山地區以外の地方に於いて私的徵集を制限する爲

勞務者一人一月の能率(石炭)



戦前に於いて既に應念の策を構ぜられたのである。一九四〇年一月には、勞務者がテート (Tate) 祭の爲め歸省するに先立ち強力なる處置を講じた。之れ等の對策は、テート祭後の對策と相俟つて満足なる結果を招來した。右に關しては來年度報告に掲載すべし。

一九三九年の試みとして五月より七月迄の間に於て給料を平均一〇%引上げたる結果は事態を更に悪化せしめたるに過ぎなかつた事を確然と證明してゐる。統計書類に據れば、その直後に於て勞務者平均數が同じパーセントだけ低下したのを見るのである (即ち精勤率が同パーセント低下した理である)。斯くしてドン・トリユ (Dong-Trieu) に於ては精勤率は60%より突然54%に低下したのである。之れに依つて見れば安南人は最低生活費を以て満足し、而も最少限度の努力を以て之れを得んとすることが窺はれる。

多年の努力の結果一會社は一小部分の職員に對して訓練を施し「歐人風」に働けば貯蓄をなし生活向上をなし得ることを教ふることに成功した。

現時の勞力不足に直面し諸會社はこの方法を採用し番號を附せられて姓名を有せざる苦力を身分を有し、直屬の上長を有する勞務者に變化すべく試みた。併し乍らこの變更は土着民の精神状態と背反するを以て時日を要し且極めて困難であるが兎に角徐々に効果が現はれて來るであらう。

諸會社にては急速なる結果を齎す爲、緊急なる機械化を必要としたのである。之の方法は確かに成功したと言へる。何となれば大戦以來勞務者數の低下にも拘らず石炭生産高は急速に増加した。が、勞力が低廉なる國に於ては機械化は經費を多く要する。九月以來能率が増加したるはこの機械化と八時間の制法の撤廢に因る。

D 歐人職員

植民地の動員は左記理由に依り佛蘭西内地に於けるより重大なる反響を齎した。

- 一、印度支那は開發の植民地であつて、植民の爲めの植民地ではない。戦時に於いてはあらゆる活動力は夫々利用されてゐる。
 - 二、歐人は高給を支給されてゐる。従つてその人員は平時にあつては嚴密に最小限を保つてゐる。
 - 三、氣候の悪しきこと、佛本國に於けるよりも大なる労働を要求する爲、職員は若き事を必要條件とす（本國に於いて宣傳せらるゝ所は全く異り）。従つて兵役免除となるもの殆んどなし。
- 斯くの如き状態なるを以て、軍部と左記の重要産業の意見の調停を計る可く極めて困難なる問題が提起されたことは言を俟たない。

- 一、佛國へ軍需品を輸出する産業
 - 二、植民地國防産業
 - 三、外貨獲得の爲の輸出産業
- 結局満足なる解決方法が発見された、首府の國防に協力する産業に對して多數の職員を維持せしめた。之れに依り一九四〇年度及一九四一年度の一大増産か豫想せられてゐる。
- 地方經濟と國防に關しては殘存職員の割合（兵役免除者、特別轉業者）は四〇乃至六六%である。この數字を以てしては前述の理由に依り非常に窮乏である。

輸出産業に對しては最後迄殘されたが結局平時の状態を保存されるものと思ふ。

現今の職員は極めて窮乏である。従つて外人を採用してゐるがそれにも亦困難が伴ふものである（専門技師の應召により機械の損傷すること、職員の過勞、疾病の爲め監督怠り勝ちとなるの危険）。

この故に絶えず職員の変更を行ふ。

今日までは特別の場合を除きこの殘存職員の問題に依り生産高が制限されはしなかつたが、今少しく度を越せば或種の企業は極めて不振になつたであらうと思はれる。

E 一九三九年度の事故數

事故の原因	事故數		被害者數	
	坑内掘及露天掘	地上	坑内掘及露天掘	地上
土砂崩壊	一六	一	一九	一
岩石其他の物質の落下	五五	一	四九	一
斜面	一三	一	七	一
運搬車	六九	一六	六六	一三
鐵道	二	六	二	四
			死	傷
			一九	一
			四	七
			二	六六
			二	三
			四	一三
			二	七
			七	七
			八	八
			一九	一
			四九	一
			七	七
			七九	六
			六	六

計	其 坑 夫 の 轉 落	火 藥	火 藥 落	坑 夫 の 轉 落	其 他
二〇六	二二	二一	八		
五二	二四	五	一		
四八	五	三	二		
一六七	一七	一九	七		
一〇	五	一	一		
四四	二一	五	一		
五八	一〇	三	二		
二一一	三八	二	八		

金 屬 鑛 山

事故の原因	事故數		被害者數	
	坑内掘 及 露天掘	地 上	坑内掘 及 露天掘	地 上
土砂崩壊	二	一	二	一
岩石其他の物質の落下	二	二	二	二
斜面	二	一	二	一
運搬車	八	三	六	三
鐵道	一	一	一	一
火藥	二	一	二	一
坑夫の轉落	一	一	一	一
計	二二	一三	二二	一三
計	二二	一三	二二	一三

計	其 他
一五	一
一五	九
六	一
一〇	一
七	三
一〇	七
一三	三
二〇	八

一九三九年度の事故及被害者數

鑛 山 別	職員總數	事故數		被害者數		坑夫一〇、〇〇〇名 ニ對スル死者百分率
		地 上	坑 内	死	傷	
燃料鑛山	四二、五五〇	五二	二〇六	五八	二一	一一・九
金屬及其他鑛山	一二、四五〇	一五	一五	一三	二〇	
計	五五、〇〇〇	六七 二八八	二二一	七一	二二	

鑛山全體として坑夫一〇、〇〇〇名に對する死者の割合は左の通り。

- 一九三五年.....二二・五
- 一九三六年.....一九・四
- 一九三七年.....一五・三
- 一九三八年.....一八・二
- 一九三九年.....一二・九

以前には鑛山事故の申告無き者相當多數あつたが、現今では死亡者を出したる事故ある場合には斯る事は皆無と云つて差支へない。印度支那鑛山の安全率は歐洲鑛山のそれに匹敵してゐる。

F 社會政策の適用

a クワン・エン (Quang-Yen) 盆地の炭鑛。

給與、全鑛山を通じて本年度の給料は平均一〇%程度の増額をなしてゐる。

之等増俸は生活費の高騰するに伴ひ漸次鑛山業者より給與せられるものである。右は給料の諸要素、即ち本俸、生産手當、季節手當、米の値下りに對する手當に對して個々に加俸される場合と全體に對してなされる場合とあり。

この時宜に適したる増俸により、四月より六月迄植民地の多數企業に於いて種々の社會闘争の發生を見たるも鑛企業に於いては之れを食ひ止める事を得た。

然れども唯一つのストライキ、之れには二〇〇名の職工が千名の職工を巻き込み十二時間に亘つて行つたウオン・ビ (Uong-Bi) 工場のストライキを擧げなければならぬ。

勞務者に對する新規社會施設。

東京炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Tonkin) — 職工社宅一九一戸と土着民職員宿舍一一戸を建築。

學校一棟、及ジヨルジュ・ヤロ (Hôpital Georges Pirat) 病院に病棟二棟を建築、諸村落に飲料水供給諸設備を建造。

ドン・トリユ炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong-Trieu) — 一九三八年より開始したる勞務者用舎宅建築

計畫を繼續中。内譯は

二間、炊事場及便所付、一四戸

八所帶用二階建、附屬建築物附一戸

クロナルド (Cloude) 村の舊舎宅を整備したり。其他、面積九〇〇平方メートルの屋根付市場を建造しクロナルド村商人の用途に供せしめた。

雇入契約に依る坑夫

安南土着民勞働力を固定せしめん爲、ドン・トリユ炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong-Trieu) は一九三七年十月二十五日總督令の規定に依る特別契約を以て坑夫の徵集をなす可く決議した (南印度支那開鑿に對して採用したる方法に類似す)。

第一回徵集者 (約四十名の坑夫) は安南のグー・アン (Nché-An) 地方に於て徵集せられるものは十二月末、同鑛山に到着した。

職業教育

S.F.C.T 會社鑛山監督學校 (École des surveillants mineurs de la S. F. C. T.) — 一九三九年度には同監督學校は開校されるに至らなかつた。講義は一九四〇年一月五日開講、聽講者三〇名あり。

S.C.D.T 會社坑夫有資格者養成所 (Formation des mineurs qualifiés de S. C. D. T.) 坑夫に對し實際的教育を施し有資格たる鑛山勞務者にのみ委任せらるる作業を適當に實施するを得しむる目的を以てクロナルド鑛山に二つの鑛山採掘學校の設立を見た。

採掘作業は特に一名の歐人技師と監督の指導を受く。生徒は之等採掘場に集合し、坑夫としての諸作業に従事す。技師は各生徒の力を監視し、充分なりと思考する時は之を坑夫に任命し普通採掘場に配属する。訓練期間は個人の能力に従ひ六ヶ月乃至一年を要す。本方法に依り一九三九年度に於て二〇〇名の坑夫を養成するを得たり。

休日支給。左表は一九三九年度の休日給與を得たる勞務者數とクワン・エン (Quang-Yen) 盆地鑛山に於てこの名義にて支給したる金額を示す。

所有者名及鑛山名	休日受給勞務者數	上記名義支拂金額
S. F. C. T社・鴻基中心地區	四一、四三七	七九、二七七・七五
ケバオ (Kebao)	四九三	五、八二〇・八一
マオケ (Maokhe) 中心地區	七四四	二、〇一七・七七
S. C. D. T社・クロチルド (Clotilde) 中心地區	四、〇六〇	
ウオン・ビ (Uong-Bi) 中心地區	六、三八九	二九、八五〇比弗
ポール・ルドン (Port-Rodon) 中心地區	二、三二九	
フロン・タン社 (Sie Along et Dong-Dang)	三五〇	一、五〇〇比弗
セギー (Seguy) 氏・チヤチヤ (Chachia) 及		
クレット (Clairette)	二六四	四六〇比弗
ドアン・ヴァン・カン氏 (Doan Van Can)		
ネフチューム (Nepume)	六七	二四〇比弗

ギユエン、ヴァン・ハン (Nguyen Van Han) 氏

タンブール (Tanhour)

總計

七〇

二九、八一四

一八〇比弗

一一四、三四六比弗

b. チュエン・クワン炭鑛會社 (Société des Charbonnages de Tuyen-Quang)。

本會社はチュエン・クワンに滞在することを希望せざる勞務者の爲更に六棟の假小屋を設置した。水道と電氣照明を勞務者宿舍二〇に對して設備した。

勞務者六三四名は、六〇六比弗に上る休日給與を受けた。

八名の勞務者の入院延日數三〇日に達した。その中二〇日は負傷により、一〇日は疾病によるものである。

e. 印度支那炭鑛及金屬鑛山會社 (Société Indochinoise de Charbonnages et de Mines Metalliques)

本會社はジャン・チエン (Jiang-Tien) 救護所の改造に着手した。

六四八名の職員及勞務者が、〇四九比弗の休日支給を受けた。

一九三九年度には入院したるもの一名もなし。

d. 東京錫及ウオルフラム並に上部東京錫會社 (Société des Etains et Wolfram du Tonkin & des Etains du Haut-Tonkin)

一九三九年には増俸なし。

本會社は一九三九年度に於てティン・チュック (Tinh-Tue) に

勞務者舍宅を數棟新設

ボンプ給水所一、備付

飲料水供給網の完備と蛇口の設置。

プア・ウアック (Pia-Ouac) 二

一、サン・タレクサンドル (St. Alexandre) 出張所二、

勞務者及職員宿舍二七

市場 一棟

給水設備 一

二、ルン・モイ (Lung-Moi) 出張所

勞務者及職員宿舍一六

支那人村の再建築をなした。

ティン・チュックの都心區域の整備工事は依然繼續中、一九三八年に開始したる用水取入並に導入工事は一九三九年に竣成した。

印度支那醫學博士を指揮者とし、醫師長一名、醫師一名、助手數名よりなる診療部は前記二會社の勞務者三八三名を診療し之を疾病又は輕傷として入院せしめた。入院を必要とせざるもの二二、〇〇〇を診療した。

入院延日數は一〇、〇〇〇日に上り、中八、〇〇〇日は疾病、二、〇〇〇日は輕傷による。

一九三九年度の休日給與。一九三九年度には錫ウオルフラム會社 (Societe des Etains et Wolfram) の勞務者一、二八〇名及上部東京錫會社 (Etains du Haut-Tonkin) の勞務者一、四二四名は休日給與を受けた。各々の中一、二二

三名は二五〇日以上の出勤日數を有してゐる。右名義支拂金額八、七一五比弗に達した。

e. 上部東京の其他の鑛山セギー氏及ゲッツェ氏の鑛山

之等鑛山に働く勞務者は主として鑛區の所在地の村落内に居住する人夫であるが、鑛山業者は新たに徵集せられた勞務者を收容する爲社宅を數棟建築した。

一九三九年に於いてゲッツェ (Goetze) 氏は自己のテレーズ (Therese) 鑛區に働く勞務者及職員の爲舍宅を數棟建築した。

一九三九年度の休日給與。セギー氏の鑛山に於いては休日支給を受けたるもの勞働者一一九名、右名義支拂金額三五九比弗に上る。

ゲッツェ氏鑛山では休日支給を受けたるもの僅かに六名、宣戰布告の際下山したる苦力多數あり。この名義支拂金額六八比弗に上る。

f. 印度支那鑛山探鑛開發會社 (Societe d'Etudes et d'Exploitations minières de l'Indochine) (S. E. E. M. I.) の中心地區

坑夫の給料は約一〇%増加した。其他の勞務者の給料は變化なし。

安南の一村を建設する計畫は一九三九年度に考究された。

歐人社宅に對し給水設備及綠地帯を設けた。

病院は印度支那醫師一名の指導する所であつて寢臺二〇餘、産室及手術室を具備す。

一九三九年度の入院勞務者數は三一一名であつた。入院延日數、三、五二五日、その中疾病二、六〇〇日、輕傷八四

五日となつてゐる。

休日支給、一九三九年度の休日支給を受けたる勞務者數六五九名。右名義支拂金額三、五三〇比弗に達した。
g. 極東錫請負會社 (Compagnie fernière des Étains d'Extrême-Orient) (E. T. E. K. O.) の中心地區各種勞務者に對する給料は少しく増加した。この増加率は約五乃至一〇%である。

ノン・スン (Nong-Sun) の新設探鑛開發中心地區に社宅を數戸建築した。

ボネン (Boneng) には、村の中央部に水道を備ふる公園を新設した。

ボネン病院は印度支那醫師の指導する所。

一九三九年度の入院勞務者數七七〇名、入院延日數六、〇〇〇日、疾病、五、四〇〇日、輕傷六〇〇日である。

休日支給、一九三九年度の休日支給を受けたる勞務者三八四名、右名義支拂額二、五一七比弗に上る。

h. 印度支那鑛業金屬會社 (Compagnie minière et métallurgique de l'Indochine) の中心地區

本鑛區は職員の移動なき爲め勞力は常に安定を保てり。一九三九年に新たに惹起したる事件なし。

休日受給者、職員及日給者共七九七名。支拂額總計三、五九六比弗。

疾病に依る入院勞務者數一〇一名、負傷者一名。

i. 印度支那鑛業及農業開發會社 (Société Indochinoise d'Exploitations minières et agricoles.—S. I. E. M. A.) の中心地區

本會社に於いては職員の滞在條件を改善すべく繼續的に努力してゐる。勞務者及職員は凡て無料宿泊せしむ。職員には米を元價にて販賣してゐる。

一九三九年度には勞務者宿舍を建築す可く準備作業を実施した。ボン・ミウ (Bong-Mieu) では飲料水供給の爲、綠地帯を設けた。

ボンミウ病院では一九三九年度の入院勞務者數三五二名、入院延日數二、三五一、中疾病二、三〇日、輕傷四一日。

マラリヤ豫防は全鑛區に於て実施しつゝあり。

休日支給、一九三九年度の休日受給勞務者は三四五名、中一二〇名は賜暇一〇日乃至一五日、一二五名は賜暇は三日乃至八日である。

右名義支拂額は一、六五〇比弗に達す。

j. タイ・ギユエン (Thai-Nguyen) のリリット・アベル (Liith & Abel) 鑛山

救護所を建設した。採掘勞務者は殆んど全部タイ・ギユエンに居住せるを以て勞務者舍宅は考慮せず。

休日受給勞務者、二二六名、金額五七五比弗。

入院者數七〇名、疾病三〇名、負傷四〇名。

k. 其他の鑛山

各所の小鑛山に於いても勞働監督局の規定は遵守せられてゐる。この事實は鑛山部技師が巡回の際、確認した所である。

之等の鑛山に於いて實施せる給料は公定、最少給料より高く日曜休日は嚴守せられてゐる。鑛山業者は何れも應急衛生材料を有してゐる。職員にはキニーネを無料配布してゐる。稍々大鑛山には公認醫師の指導する救護所あり。

勞務者が鑛山附近村落の住民ならざる時は、鑛山業者は勞務者を宿泊せしむる爲め、宛然、都市の體を具ふる部落を建設した。斯の如くしてボー・ハ (Bò-Ha) 鑛山〔東京、バック・ジアン (Bac-Giang 地方)〕では鑛山附近の健康地域に鑛山町を建設した。安南のヌイ・バン (Nui-Ban) では數棟の家屋、飲料水井戸を設置し、安南のエン・キュー (Yen-Cu) 及ヴァン・トリン (Van-Trinh) 鑛山では鑛石積出し従業員を收容する爲め、ソン・カ (Song-Ca) 河合流點、ハイ・エン (Hai-Yen) にテント張りを設けた。

次表は一九三九年度の休日支給を示す。或種鑛山の不規則状態、殊に一九三九年下半年の安南鐵鑛山の休眠状態にも拘らず、之等休日支給は相當數に達してゐる。

所有者名並に鑛山名	休日受給勞務者數	上記名義支拂額
フニク・タン・ヌン (Phu-Thanh & Nua) 氏		
エン・キニ及ヴァン・トリン鑛山 (Yen-Cu et Van-Trinh)	123	100比弗
ギン・ン・シニアン・ウ (Nguyen-Xuan-My) 氏		
ミダオ (My-Dao) 及チャン・チン (Chan-Tien) 鑛山	11	八五比弗
フニート炭鑛會社 (Société des Charbonnages de Phu-Tho)		
リシニク (Richesse) 鑛山	28	二六九比弗
ボ・ハ炭鑛會社 (Société des Charbonnages de Bò-Ha)		
フニール・ギニエン (Phu-Nguyen) 鑛山	165	三四五比弗
ゴ・テイエン・カン (Go-Tien-Canh) 氏		
鑛山、バック・ジアン (Bac-Giang) 地方	20	八五比弗

新設鑛製造會社 (Société Nouvelle des Phosphates)

安南及東京鑛山	36	三〇六比弗
其他諸鑛山	30	一三〇比弗
總計	413	一、三二〇比弗

之に依つて見れば全鑛山を通じて休日受給者總計三六、七四九名。右名義支拂額一四〇、一三〇比弗である。

休日受給者數を比較すれば

一九三七年度	三三、一〇〇名
一九三八年度	三六、九〇〇名

大鑛山の勞務者の減少により受給者數は減少した。然れども小鑛山に於ては統制を強化しこの減少を償ふを得た。その結果一九三九年度の數字は一九三八年度のそれと殆んど匹敵してゐる。

第六章 石油類 (炭化水素類)

液體燃料輸入三會社〔シェル (Shell)、ソニー (Socony)、テクスロ (Texco)〕は大戦以來鑛山部の統制下、液體燃

料及潤滑油局 (Office des Combustibles liquides et Lubrifiants) に統轄されてゐる。

一九三九年度の販賣容量は左の通り。

航空用ガソリン	二、八四五佛瓩
自動車用ガソリン	四二、六〇〇佛瓩
石油	四四、八一八佛瓩
瓦斯油	五、九四一佛瓩
ディーゼル油	一一、四〇八佛瓩
燃料油	一一、九四二佛瓩
雑油	二、四八一佛瓩
脂肪	七二〇佛瓩

自動車ガソリンの價額は一九三八年當初の〇比弗二五二より一九三九年當初の〇比弗二六四、一九四〇年當初の〇比弗三二八となつた。

九月六日附總督令に依る法定貯藏量(年販賣高の二〇%)の内譯は國內四〇%、輸出向け貯藏六〇%であつた。一月一日には諸會社は國內用として五〇%を貯藏する見込である。但し之等の數字に正規商業用貯藏及支那向無税、輸出入貯藏量を加算する必要あり。

ガソリンのアルコール含有割合は一一・一一%乃至一七・六四%となつた。(一九三九年九月十二日附總督令)。又一方無水アルコール貯藏義務が法定された。(年販賣高の二五%)

ナム・デイン (Nam-Dinh) 及リュセー・ケオ (Rusey-Keo) の總督府立脱水所は近く竣工すべし。全生産能力は之れにより一二五・〇〇〇より一二五・〇〇〇ハクトリツトルとなる。純アルコールを自動車用燃料として使用せんとした試験成績は良好である。

特別任務工場に編入された印度支那蒸溜會社 (Société des Distilleries de l'Indochine) は多量の飲料アルコールの他無水アルコールを供給してゐる。全工場の各種アルコール總生産高を示せば一〇〇%のアルコールを含有するものとして河内工場(一九四〇年二月再開)では〇・ナム・デイン工場 (Nam-Dinh) では七三、〇〇〇ハクトリツトル(一九三八年度には六六、〇〇〇であつた)。ハイデュオン工場 (Haïduong) では七九、五〇〇(一九三八年度には七三、〇〇〇)、交趾支那のビン・タイ工場 (Binh-Tay) では一五二、〇〇〇(一九三八年度には一四四、五〇〇)、東埔寨のリュセー・ケオ工場 (Rusey-Keo) (竣工間近)では〇である。

平均實数は著るしく増加した。東京では一九三八年度に九一七、一九三九年度の八ヶ月間に九八六、大戰以來一、二五〇、交趾支那では一九三八年度が七〇九、一九三九年度の八ヶ月間に七〇七、大戰以來七一五、東埔寨では一九三八年に一〇〇、一九三九年度の八ヶ月間に一六二、大戰以來二七六となつてゐる。

賣價(勿論無水アルコールを除く)は大戰以來大差なく且つ入手は特に困難ではない。諸製品、殊に硫酸が漸次日本より輸入される筈である。

現地産炭化水素に關しては特記すべき事項なし。ロック・ビン (Loc-Binh) の褐炭の蒸溜試験を續行中である。

第七章 其他の鑛産物

A セメント

海防セメント工場の増産は一九三九年度にも繼續してゐる。

工場の生産能力が限度に達したるを以て爐を更に一基近く建造する筈である。

年次	生産高(一、〇〇〇噸)
一九三一年	一五一
一九三二年	一七〇・五
一九三三年	一一五
一九三四年	一一五
一九三五年	一〇七
一九三六年	一四九
一九三七年	二三五
一九三八年	二六六・四
一九三九年	三〇五・八

本工場には二、八〇八名の土民を雇用してゐる。平時には佛人三二名、職場一九を擁してゐた。

輸出額は左の通り。

年次	支那(香港)	暹	港	佛蘭西植民地	計
一九三一年	四七・二	五	三・五	一・八	五三・一
一九三二年	八五・三	一	一・三	一・三	九〇・八
一九三三年	三四・二	〇・九	一・三	一・三	三七
一九三四年	三五	〇・七	一・五	一・五	三八
一九三五年	三〇・一	一八・八	一・五	一・五	三二・三
一九三六年	二四・三	四一・一	七・五	八・五	五九・二
一九三七年	四三・九	五四・一	八・五	一・九	一二四・五
一九三八年	六三・三	五五	五・九	一・一	一四三・五
一九三九年	六五・六	五五	一	一	一五九・一

蘭領印度向け輸出は一七、六〇〇噸に上つた。輸入は依然少い。(單位千噸)

一九三三年	三・三
一九三四年	一一・一
一九三五年	一〇・三
一九三六年	一一・六
一九三七年	三・七

一九三八年
一九三九年

一・三
一・二

一〇六

現地の年消費高は

一九三三年
一九三四年
一九三五年
一九三六年
一九三七年
一九三八年
一九三九年

八一・三
八八・一
八五
一〇一・四
一一四・二
一一九・二
一五二・七

(ストックより取出し六、〇四四噸)

B 耐火煉瓦

本製品は東京の河内、ダツプ・カウ (Dab-Cau)、交趾支那のロン・ビエー (Long-Bieu) の三工場を有する印度支那煉瓦製造會社 (Société des Tuileries de l'Indochine) の生産する所である。

之等工場は戦前には大活躍をなしてゐた。現在六〇〇名の職工を擁してゐる。生産量には大戦以來變化はないが耐火煉瓦の需要は頗る高まつた (佛國より輸送困難なる爲)。建築材料の製造に使用したる舊式爐を改造使用するに至り生産

物の種類も異つて來た。國內河川運輸難に因りフュー・ト (Phu-Tho) の耐火土の一部をチュエン・クワン (Tuyen-Quan) の耐火土 (礬土の代りに高陵土を用ふ) を以て代用をした。ダツプ・カウ (Dab-Cau) 工場に於ては礬土耐火煉瓦七〇〇噸、硅土耐火煉瓦五〇〇噸並に石墨の坩堝七〇ヶを生産した。

高陵土の輸入 (主に香港より) は一九三九年度には一、〇七〇噸、價格五六七、〇〇〇法に達した。

C 鹽

本工業は税關及一般稅務部 (Direction des Douanes & Régies) の管理する所である。

一、土民の製鹽業

東 京	海水の自然蒸發による製鹽法 ヴァンリ・地方 (Van-Ly)	三二、三三三噸	二二、一二二噸
安 南	人工的蒸發による製鹽法 (爐を使用する鹽田)	三、三一六	三、二二二
		六七、〇五五	八六、一三九
交趾支那	白 鹽 (ベリア (Baris) の) 淡赤色鹽 (バック・リ (Bac Lieu) の)	二四、八四八	三一、九一七
計		一三九、五五六噸	一六九、三一六噸
二、カナ (Cana) の印度支那製鹽會社 (Société des Salines de l'Indochine)		四〇、四一二	四四、二一〇
合 計		一七九、九六八噸	二一三、五二六噸

一〇七

一九三七年度の数字（一九三、六〇〇）は安南の増産を交趾支那の再増産の結果、突破せられた。
 カナ (Cana) の鹽田は専ら輸出用である。但し一〇、〇〇〇噸の貯蔵は新たに命令の下る迄保存せられる筈である。
 日本向け輸出は四四、二〇六噸、價格三、九八一、〇〇〇法であつた。

D 鑛 泉

南安南のヴィン・ハオ (Vinh-Hao) 鑛泉より一九三七年度に五二・五〇〇リットル、一九三八年度に三五、五〇リットルの二炭化曹達水 (eau minérale bicarbonatée sodique) を聯合國の諸國に販賣したが、一九三九年度には三〇、六〇〇リットルを賣渡した。南部地方への販賣高は一七、六〇〇リットル、北部地方へは一三、〇〇〇リットルであつた。右の採取には佛人一名、苦力八名が従事してゐる。大戦以來の生産高は八、六〇〇リットルであつた。佛國では一九三九年度には一、二四五噸二、價格六、六二七、〇〇〇法の鑛水が輸入されて居る。

安南には海岸線に平行して温泉の線あり。一九三九年に、ヴィン (Vinh) のヴィン・ジャン (Vinh Giang) に一鑛泉所有權の獲得を見た。右は黃硫酸泉にして溫度五五度である。

E 採 石 場

一九三九年度の採掘量は次表の通りである（採石場賦課金整理事務を擔當する公共事業部 (Service des Travaux Publics) の提供したる報告に依る）。

上欄＝採石場數

下欄＝採掘立方米

	東京	安南	交趾支那	東埔寨	老撾	ワケチエウ	計
玄武岩及流紋岩	一	二	二	二	一	三	一〇
花崗岩及斑岩	二	三	五	一三	一	一	二八
石 灰 岩	一〇	二〇	五	二七	一	一	一七
珪 岩	三	一	一	三	一	一	八
砂 岩	一	二	一	三	一	一	九
片 岩	一	一	一	一	一	一	六
紅 土	一	一	一	一	一	一	六
石 英	一	一	一	一	一	一	六
砂 礫	一	一	一	一	一	一	六
粘 土	一	一	一	一	一	一	六
高 陵	一	一	一	一	一	一	六
長 石	一	一	一	一	一	一	六
白 砂	一	一	一	一	一	一	六
一九三九年度累計	一三三	一七〇,一八一	二二九	一四四,三三三	一六六	一,二〇〇	四九八
一九三八年年度累計	九三	五,六四八	一七	一七,六八九	一六五	一六七,八三六	四八〇

總採掘總量は上昇して居る。之れ恐らく頻繁なる道路工事に依るものであらう。安南の白砂採取の中止を記載するを要する(一九三七年には八八、七〇〇立方米、一九三八には五六、〇〇〇)。これに反し一九三八年に休眠したるアロン灣(Baie d'Along)の採石場が再開せられた(一九三七年には二六、二〇〇立方米、一九三九年には三三、〇〇〇立方米)。之の珪砂の輸出高は七〇、九二四噸、價格八〇〇、〇〇〇法に達した(中五二、五六六噸は日本向け)。尙ほ、東京(主にクワン・ヘン(Quang-Yen)地方)地方の石灰岩採掘の飛躍的發展に就いて言及せん。これは一九三八年の四五、三〇〇立方米より一九三九年の二二八、七〇〇となつてゐる。一九三九年度には石灰石は香港向け、多量の輸出があつた。輸出高一四〇、三七七噸、價格九一六、〇〇〇法。

F 鑛山部附屬資料試驗所 (Laboratoires d'Essais de Matériaux du Service des Mines)

一九三九年度の事業(試驗標本數)

コンクリート(壓縮)	四五三	一九三九年
セメント及漆喰(壓縮)	三、六三四	二、六八〇
"(應力)	三、六二〇	一、二〇六
"(凝結)	三三〇	一三三三
"(變形)	一、一三三	
"(粒度)	三	
石材及煉瓦(壓縮)	九六	

"	(磨滅)	七一
"	(吸收)	五
"	(口徑)	五
鐵及銑鐵(應力)	三七	
"(resilience)	一九	
"(硬度)	一	
"(撓曲)	二	
砂	礫(粒度)	二六
木	材(撓曲)	三六
計		九、五五〇

次表に依つても右試驗所の事業發展の狀態が明瞭に看取される。

一九三三年	一、〇六一
一九三四年	七、八二六
一九三五年	七、四六二
一九三六年	九、二八六
一九三七年	九、一九四
一九三八年	八、一五八

一九三九年.....九、五五〇

G 蒸氣機關

鑛山部は東京の蒸氣機關の統制を實施した。本年の未より交趾支那及東埔寨に於いても同様に實施した。
一九三九年度に鑛山部の施行したる検査件数は左の通り。

諸鑛山	五三
諸工業	四五
雲南省鐵道	三三
官廳	二三
計	一五三

一九三八年度の検査件数は四一四であつた。

第八章 化學工業

従來、各工業者を打つて一丸とするものとしては東京鑛山協會 (Association des Mines du Tonkin) が唯一の存在であつた。大戰以來印度支那製紙會社 (Société des Pâpeteries de l'Indochine) 社長を會長とする北部印度支那工業問題研究會 (Groupeement pour l'Étude des Problèmes Industriels du Nord Indochine) が設立された。本協會は既に

種々の場合に於て私設工業の代表者を指定すべく任命された。

本植民地新工業の一發展を遂げたる事實と、戦前に於ける印度支那工業者の輿論が重要視せられざる現狀に鑑み斯る機關の必要は感ぜられてゐたのである。

A 鑛山部附屬化學實驗所

次表は鑛山部附屬化學實驗の業務成績を示す。

標本の種類	標本數	一九三九年	
		分量數	作業價額
セメント	二二六	三五九	一、九〇八比弗
岩石	五三	一二六	五〇七
鑛石	一二五	三三三	一、八二二
金屬及合金	三三	一七七	九〇二
燃料	一九〇	五七一	一、七九〇
燐料	一三三	一六七	九二六
塗料	五〇	二一一	九三八
油類	四四	三一六	一、二一〇
コンクリート、漆喰及セメントタイム	一七	六〇	二八二
			一一三

アスファルト、 コールター、石油類	二一	一四九	五三八
其他	三六	一八六	八一〇
計	九三八	二、六五五	一一、六三三比弗

一九三七年度には試験に供されたる標本數一、〇八二(分量數二、三八一)
 一九三八年度には標本數七〇八(分量數二、〇四五)
 一九三九年の業務成績は分量數によつて計られるがこれを見ると先年度より遙かに高くなつてゐる。従つて一九三九
 年末には一大再整理を必要とした。

B 酸素、アセチレン。

特別任務工場に編入された極東酸素、アセチレン會社 (Société d'Oxygène et d'Acétylène d'Extrême-Orient) は海
 防及西貢に各一工場を有し、六〇名の土着民を雇備してゐる。
 一九三九年度の生産能力と生産高。

酸 素 (立方米) 溶解アセチレン(立方米)	西 貢		海 防		計	
	生産高	生産能力	生産高	生産能力	生産高	生産能力
104,000	120,000	82,000	10,000	181,000	267,000	230,000
23,000	50,000	4,000	10,000	37,000	60,000	60,000

炭 酸 瓦 斯 (疋)	54,000	140,000	—	—	54,000	140,000
-------------	--------	---------	---	---	--------	---------

本會社では其他壓搾空氣と少量の酸素を販賣してゐる。アセチレンは佛國より輸入する炭酸石灰を處理して得る。酸
 素は空氣液化に依り生産してゐる(液體空氣による方法)。
 大戰以來需要は必然的に増加した。近々西貢に酸素供給所を新設する筈である。雲南省に若干の小販路を有する外本
 會社は印度支那以外に販路を有せず。

ラン・ソン (Lang-Son) 附近のロック・マン (Lô-Binh) 炭酸石灰工場の建築は進捗した (鑛山電氣會社 (Com-
 pagnie Electrique Minière))。

C 鹽 素

ナム・ディン (Nam-Dinh) の東京紡績會社 (Société Cotonière du Tonkin) は海鹽を電解して脱色性次鹽素酸鹽
 (hypochlorites décolorants) を製造してゐる。

大戰以來、海防の諸紡績會社及ダップ・カウ (Dap-Cau) の諸製紙工場に電池を据附けた。
 石灰鹽の補給は漸次困難となつてゐる。一九四〇年當初には東京に無税輸入せられる獨逸産カポリット (Caporit) 二
 石灰次鹽素酸鹽 (hypochlorite de calcium) を止むを得ず代用した。東京に鹽酸ナトリウムを電解處理して曹達並に諸
 鹽化物を製造する工場(製紙業、石鹼製造業に利用する)を役立せんとする案あり。同様にしてパッセ (Passe) の製
 紙工場設立案にも曹達及鹽化物の現地製造の問題を包含してゐる。

D 油類、石鹼、グリセリン。

最も重要な石鹼製造所（マルセル石鹼類）は西貢、シエロン（Saigon-Cholon）地方に在り。同地方の工場の職員は多く土民にして残置職場を享有してゐる。

交趾支那。本社〔ヴィエット・ナム（Viet Nam）石鹼工場〕では一九三九年度には四五〇名の土民常務者を以て次の諸製品を生産した。

石鹼三、〇〇〇甕中二、三七五甕は現地の消費に、三八二甕は佛國植民向け輸出に供した。

グリセリン計六八甕五、中四〇・五は米國へ販賣した。之の製品の甲板渡價格は一甕に付六乃至七法である。

コブラ油一、九〇〇甕、ヘヴェア油四〇〇甕、蓖麻子油九一甕、木綿油一八甕、之等製品は蓖麻子油七五甕の佛國向輸出を除き他は當地に於て利用せらる。

コブラ油粕一、二五〇甕、ヘヴェア・ゴム六五〇甕、蓖麻子一四五甕、木綿六四甕、之等製品はヘヴェア油粕四四

三甕の佛國向け輸出とコブラ油粕五甕のニュー・カレドニア向け輸出とを除き、他は地方的に利用せらる。

テレピン油九甕、中七甕は佛蘭西植民地に供給す。

コロファン四七甕（現地の用途に供す）。

極東油脂、石鹼製造會社（Huileries et Savonneries d'Extrême-Orient）では百名餘の苦力を使用し、一九三九年度に於て

石鹼一、一七〇甕、諸油一、一四〇甕、油粕三、〇五〇甕、を生産した。

大戦の結果、佛蘭西植民地及首府より諸油類の大量注文を受けた。一月乃至八月の生産高六一〇甕が九月より十二月迄の四ヶ月間には五三〇甕に上つた。

左に稍々小規模の諸會社を挙げれば、ヴィエット・ナム（Viet Nam）社は佛印の全需要に應ずる爲グリセリン（約二十甕）の精製を計畫してゐる。

東京、唯一の重要會社として海防のアリム・マッカ（Alim Macca）會社は普通石鹼六三五甕、芳香石鹼四甕を生産、専ら現地の消費に充てゝゐる。グリセリン汁の回收が考慮されてゐる。

印度支那は七〇〇甕の諸石鹼を輸入してゐる。その半数は芳香石鹼（佛國製）である。

輸出は普通石鹼六七一甕、その過半数は佛蘭西植民地向けである。其他、テレピン油五四甕、中一五甕は支那向、コロファン二七八甕、中一九六甕に香港向けコブラ油一二、〇〇〇甕、蓖麻油三、〇〇〇、諸油（アブラザン、落花生）五〇、〇〇〇甕を輸出した。

一九四〇年、海防に亞麻仁油製造所が開業した。種子はカルカッタより輸入され、生産高は日産六〇〇乃至七〇〇甕に達し得べし。これと同様の小工場が交趾支那に存在するが目下休業してゐる。

E 硝子工業

土民經營の硝子工場多数あり。

海防に於て一有力會社が活動中である。之は特別任務工場に編入されたる極東硝子會社（Société des Verrieres d'Extrême-Orient）である。

同工場は従業年産燻用硝子三〇〇噸を基準としてゐた。

一九三九年十一月には五〇〇噸となつた。窓硝子製造は一九三四年中止した。増産計畫（爐を新設）ある模様なり。一九三九年同工場には二二六名の土着民を使用した。

材料は化學藥品を除き、當地にて補給してゐる。例へばアロン灣 (Baie d'Along) の白砂、クワン・ハン (Quang-Yan) の石灰、チュエン・クワン (Tuyen-Quang) の石灰及長石の如し。

F 製 紙 業

印度支那製紙會社 (Société des Papeteries de l'Indochine) は特別任務工場に編入されてゐる。

同會社はダップ・カウ (Dap-Cau) 及ヴィエトリ (Vietri) に工場を有し、夫々職工九〇〇名、及六〇〇名を使用してゐる。

土民勞力の下足により増産に支障を來してゐる。特殊技能者は同社に於て養成してゐる。

生産高は二年以來最高に達した。年八〇〇噸を生産する純現地製の新式機械が三月中に運轉を開始する見込である。

三臺の舊式機械に改良を施し、年産三、〇〇〇乃至三、五〇〇噸に達せしむる筈である。全能力は遠からず三、〇〇〇噸より四三〇〇噸出し得る見込。

生産能力三、〇〇〇噸の一大機械を計畫中であり、補助設備も準備中であるが、竹材の補給に非常な困難を來してゐる。材料は印度支那に大量栽培されては居るが伐採道路より遠く不便なり。之れが爲、同社では松、フィラオス (filas)、カイ・ジオ (Cay-Gio) 及稻藁を處理してクラフトパルプ (pâte de Kraft) を製してゐる。

年産、七三〇〇噸が最高能力と見られて居るが、之れ丈あれば戦時下の印度支那に供給するに充分であらうと思はれる。一方佛國よりの着荷は益々品薄となつて來てゐる。

海外市場よりの需要は日立つて多くなつてゐる。前記製品を上海に輸出しその交換として當植民地では製造不可能なる特殊パルプを入手する方法が考究されてゐる。併し輸入パルプの割合は一九三五年の六五%より一九三九年の一%となつてゐる。

其他同社は數千軒の手製製紙職人にパルプを供給してゐる。

ラビユ (M. Rabut) 氏の花火工場では日産一噸のボール紙を製造して居ることを挙げねばならない。尙、一般製紙をも行ふ豫定である。カツファ (M. Catifa) 氏は近々交趾支那に供給する目的を以て大製紙工場を開始する筈である。同工場は多分、老樾のバクセ (Palsee) に設けられるであらう。

G 吸 着 炭 (Charbons absorbants)

戦前には椰子の殻を實際的に木炭化した事なし。然れども、安南のビン・ティン農業組合 (Coopérative agricole de Binh-Dinh) を擧げる事が出来る。

尙、亞細亞商會社 (Société commerciale asiatique) ——之れはナム・ティン (Nam-Dinh) に工場を有し主として椰子の纖維を處理するのであるが——大戰當初に安南のナム・クワン (Nam-Quann) に十五基の爐を設置した。平均生産高は月産二〇噸の見込。

交趾支那に於ては之より更に大なる噸數を供給し得る。従來フユ・クオック島 (l'île de Phu-Quoc) が唯一の木炭

生産地であつた。最近設立せられたミト農業組合 (Coopérative agricole de My-Tho) は交趾支那に於て椰子の實木炭を大量生産す可く、試験を實施した。

總督府令に依りアクテイヴィット (Activit) 社に對して設立を命ぜられた増産工場は一九四〇年開業すべし。又近く交趾支那のヒエツブ・ホワ製糖會社 (Sucrerie de Hiep-Hoa) に合併される筈であるが、同工場では椰子の實木炭を處理して當植民地用のマスク用木炭を製したる外、各種木炭を處理して、印度支那全需要量の吸着炭を製造する筈である。

H 火薬及花火製造

火薬工場。フューサ (Phu-Sa) 火薬工場は印度支那オムニウム社 (Omnium Indochinoise) に屬し特別任務工場に編入されたが本年度の生産高は左の通り。

フュクシット (Phuxite)	一一六噸五〇〇
シェディット (Chedite)	五噸二一九

結局一九三八年度に比しフュクシット四噸、シェディット二噸の減少である。

一九四〇年度の市場の需要は更に大である。この事實は、火薬の積荷が著るしく増加してゐるに反し諸種の原料の積荷はさ程増加してない事に依つて證明される。

最近、總督令を以て認可、採用せられた新フュクシットは次の調合方法であるが成績良好である。

硝酸アンモニア	七九%
---------	-----

結晶ダイニトロトルエン	一一%
過クロール酸加里	五%
硅化石灰	四%

花火工場。一九四〇年二月二日附總督令を以て印度支那花火會社 (Société Indochinoise de Pyrotechnie) の工場擴張の件許可された。

最近四ヶ年間に於る印度支那工場の火薬及花火製造高は次の通り。〔噸數(藥莢共正味重量)〕

製造所名	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
印度支那オムニウム (Omnium Indochinoise)	一六三	二五六	一八〇	二〇一
テイボイ會社 (Thibault & Cie)	一五一	二〇〇	二〇七	一六七
ラビエー (Rabat)	三二	四八	三一	七二
印度支那花火會社 (Société Indochinoise de Pyrotechnie)	一一	四四	九六	一三七
計	三五七	五四八	五〇九	五七七

一九三九年度に製造したる火薬五七七噸にはクロール酸加里六七噸、過クロール酸加里一二噸、硝酸加里二噸五〇〇を要した。之等原料は輸入品である。

一九三九年度に當植民地に於ては各種娛樂用花火三九噸五〇〇を輸入した。主なる輸入先は香港で、三八噸六〇〇を示してゐる。

I 鑛山用火薬、雷管及導火線の消費量

品目	輸 入 高 (噸)				現地製造高 (噸)				現地供給總量 (噸)			
	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
ダイナマイト	一三五・四	九六・〇	九六・六	一四六・八					一三三・四	九六・〇	一四六・八	
其他の火薬	一〇一・四	一四六・五	一〇〇・四	一三四・一	六六・六	一九三・〇	一二七・〇	二二二・〇	三三八・五	二四七・四	二四六・一	
雷管	一〇・三	二・三	一〇・六	一七・〇					一〇・三	一〇・六	一七・〇	
導火線	四九・二	五四・〇	三八・三	五四・六					四九・二	五四・〇	三八・三	五四・六

一九三九年九月末現在印度支那貯蔵量

ダイナマイト	一〇二噸	炭化水素及炭化水素ナフタリン	一四噸
フニークシツト	二二噸	過クロール加里	一二噸
シエデイツト	三噸	硝酸加里	六噸
ベルクラヴィツト (Berclavite)	八〇噸	黑色火薬	四噸
ニトロコーバリツト (Nitrocopolite)	一九噸	雷管	四噸

輸 入 轉 賣 者

輸 入 會 社 名	輸 入 品	輸 入 先 會 社
ポアンサール・ヴェレ社 (Poinard & Verget) コントワール・テクストレーム・オリヤ (Comptoirs d'Extreme-Orient) (匿名會社)	電氣點火装置、雷管 ダエリニツト (Dachinite) [註] 雷管、導火線 鑛山用導火索 導火線	マルセル・モーゴア會社 (Etablissements Marcel Gaupillat) 自耳義合同火薬會社 (Poudreries Réunies de Belgique) 同 右 同 右 佛國ユール縣ジョートル市 アムル兄弟商會 (Harle Frères & Cie, Pîtres (Eure))
(註) 硝酸アンモニア火薬		

輸 入 消 費 者

輸 入 會 社 名	輸 入 品	輸 入 先 會 社
東京佛國炭鑛會社 (Société française des Charbonnages du Tokin)	ベルクラヴィツト (Berclavite) グリズナフタリツト (Grimaphalite) ベルクニウヰツト (Berclavite)	ツールーズ國立火薬會社 (Poudrerie Nationale de Toulouse) 安全火薬會社 (佛國) (Société des Poudres de Sincle (France)) サン・チャップ國立火薬製造所 (Poudrerie Nationale de St. Chamus)

印度支那鑛山及農業開發會社 (ボン・ミ ン金山) Société Indochinoise d'Exploitations minières & agricoles (Mines d'or de Bong Mieu)	ダイナマイト 電氣點火裝置 ダイナマイト	(火藥及化學藥品製造をなす) (匿名會社なり) 巴里、モーリス會社 (Etablissements Campilat) 佛國ルーアマン、ゴッツイ・ピツクフオー ド社 (Dreyer Biefford & Rouan)
	ダイナマイト 雷管 導火線	

一、常設火藥庫數 (一九三九年鑛山部の調査による)

地方別	第一種	第二種	第三種	計
東京	一一	三	一	二五
安南	二	ナシ	一	三
東埔	ナシ	一	ナシ	一
老樹	一	ナシ	ナシ	一
交趾支那	ナシ	ナシ	一	一
總計	ナシ	ナシ	一	三

二、臨時火藥庫 (一九三九年鑛山部の調査による)

東京	四三
安南	一三
老樹	二
東埔	二
塞	一一
東京	一三五
老樹	一五

三、一九三九年鑛山部より交附したる火藥購入許可證數

鑛山消費量。

火藥の主な消費者は鑛業である。一九三九年度に於て火藥を多量に使用したる鑛業會社の消費量内譯は左の通り。

東京佛國炭鑛會社 (Société française des Charbonnages du Tonkin)

ダイナマイト	九萬六六
グリズナフタリット (Grisounaphalites)	六・六五
ベルグラヴィット (Berclavite)	三九・一八
フュークシット (Phuxites)	一二六・二五
バエリニット (Baerinites)	一〇・一一
計	一九一萬八五

ドン・トリユ炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong-Trieu)

ニトロコオブリット (Nitrocoopalites)	四九〇一〇
ダイナマイト	二・八九
フユークシット (Phuxites)	〇・九五
バエレニット (Baenite)	〇・三〇
計	五三〇二四

上部東京錫鑛業會社 (Société des Mines d'Étain du Haut Tonkin) 及東京錫及ウオルフラム會社 (Société des Etains & Wolfram du Tonkin)

ダイナマイト	二五〇八〇
ベルクラヴィット (Berlavite)	〇・一〇
コオパリット (Coopalite)	〇・〇六
フユークシット (Phuxite)	〇・一一
計	二六〇〇七

印度支那鑛業及農業開發會社、ボン・シユ金山 (Société Indochinoise d'Exploitations minières & agricoles - Mines d'Or de Bong Mieu)

ダイナマイト	一〇七五
シエヂイツト (Chedites)	八・三三
計	一〇〇〇八

一九三九年度の鑛山業に於ける火薬(ダイナマイト・硝酸鹽)消費量は當植民地に輸入若くは製造されたるダイナマイト、硝酸鹽、鹽酸鹽の三九二〇七に對して二八一〇二四に上つてゐる。全消費量の七一%に當る。

第九章 印度支那諸會社

A 概 括

一九三九年の印度支那鑛業會社の資本金は四一、二四三、〇〇〇法の尨大なる數字に達した(一九三八年には二〇〇、〇〇〇)。この數字は一九三〇年の不況期以來記録されたあらゆる數字を越すものである。但し一九二六年より一九三〇年迄の數字には及ばない。

年 次	額 面	實際申込高
一九二四年	一八・七	一八・七
一九二五年	一八・八	一九・三
一九二六年	七二・六	九四・三
一九二七年	七二・四	七九・五
一九二八年	一五六・一	一八四・四
計		一二七

一九二九年	一二五・八	一四九・五
一九三〇年	九一・八	一〇八・〇
一九三一年	三三・一	三二・八
一九三二年	一一・二	一一・二
一九三三年	一一・七	一一・七
一九三四年	三・四	三・四
一九三五年	〇・二	〇・二
一九三六年	一一・六	一一・七
一九三七年	一〇・八	一〇・八
一九三八年	〇・二	〇・二
一九三九年	四一・二	四一・二

東京佛國炭鑛會社 (Société Française des Charbonnages du Tonkin) 最初の資本金(五九、一七〇、七五〇)に對し準備金より二六、五九八、五〇〇法控除し、次で積立金より一四、二九四、七五〇を繰入れ増資をなした。

ボ・ハ印度支那炭鑛會社 (Société Indochinoise des Charbonnages de Bô-Ha) が三五、〇〇〇比弗の資本金を以て設立された。

尙ほ、資本金二八、〇〇〇、〇〇〇法のドン・トリユ炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong-Trieu) は一〇〇法の株一四〇、〇〇〇口を一〇五法にて發行し一四、〇〇〇、〇〇〇法の増資を議決すべく來る一九四〇年四月臨時總會を開く旨通知した。

一九三八年六月設立、資本金一〇、〇〇〇比弗の調査探鑛會社 (Société d'Études et de Prospection) は一九三九年十二月を以て開散することとなつた。

次表は巴里株式取引所に於ける印度支那諸會社株相場を示す(一九二七年十二月を二〇〇とす)

年次	佛國有價證券 總數(各種 利益を含む)	印度支那株		
		一般指數	炭坑	金屬鑛山
一九三〇年	一三九	六六	五七	四四
一九三一年	九八	三四	二七	二一
一九三二年	七八	二五	一九	一五
一九三三年	七四	二二	一三	一三
一九三四年	六二	二〇	八	一〇
一九三五年	五九	二三	八	一〇
一九三六年	五七	三一	九	一四
一九三七年	七二	五五	一五	二九
一九三八年	六六	四八	一二	二四
一九三九年	七〇	五二	一四	二四
一九三九年一月	七四	五三	一四	二三
一九三九年二月	七二	五一	一三	二二
一九三九年三月	七二	五一	一三	二二
一九三九年四月	七二	五一	一三	二三

五月	七六	五八	一四	二八
六月	七三	五二	一四	三四
七月	七四	五四	一三	二六
八月	七〇	五一	一三	二四
九月	一	五一	一一	二八
十月	一	五九	一二	三四
十一月	一	七六	一九	四三
十二月	一	八五	二四	四八
一九三九年(平均)	一	五九	一五	二九

之等の数字に依つて見れば一九二六年乃至三〇年の鑛山ラッシュに次いで一九三〇年乃至三四年の崩落を以てした爲め、佛國は其の貯蓄を印度支那地下資源に振向けることに對して全く興味を失ふに至つた。併し經濟的状況の漸進的好轉は遂に其の實を結ぶに至つた。一九三四年乃至三五年の相場は不況の最高潮であつたが、好轉は一九三九年に至つて始めて緒について居る。

大戰以來産業的見地より見て印度支那が特に有利となつた狀況は十一月株相場の急激な上昇によつて證明される。前述したる如く一九四〇年度には本地方産業の名部門に於て多數の新計畫が實現を見るに至るであらう。

B 諸會社の情勢

次表は財政雜誌其他の諸雜誌より轉載したものであるが眞偽の程は保證し難い。

鑛山、石油類、化學製品、鑛物關係の匿名會社及有限責任會社
(年報に掲載したる順序による)

會社名	事業及事業地	設立年度	現在の資本	摘要
東京佛國炭鑛會社 (Société française des Charbonnages du Tonkin)	無煙炭=鴻基、マオケ (Maohé, Kwé-Tsin) (Qu-Tin)	一八八八年	匿名會社 資本金 100,000,000法	一九三九年三月及九月に増資
ト・ン・リット炭鑛會社 (Société des Charb. du Dong-Trien)	鐵=ハヤット (Hayat) 無煙炭=クローティル、ルイーズ (Krothide-Louise)	一九〇六年	匿名會社 資本金 2,000,000法	一九三〇年 資本金 2,000,000に増資
フロン・クン・クン佛國炭鑛會社 (Société française des Charbonnages d'Along et Dong-Dang)	同 右=フランシス・コロン (Francis-Hien)	一九〇七年	匿名會社 資本金 2,000,000法	
ボ・ハ印度支那炭鑛會社 (Société Indochinoise des Charb. de Bo-Ha)	同 右=ボ・ハ (Bo-Ha)	一九〇九年	有限責任會社 資本金 3,500,000法	
フ・ト石炭、探鑛開發會社 (Société d'Etudes et d'Exploitations des Charb. de Phu-Tho)	同 右=リシエス (Riessse)	一九〇八年	匿名會社 資本金 100,000法	
テトヘン・クワン炭業會社 (Société des Charb. de Tuyen-Quang)	有煙炭=テトヘン・クワン (Tuyen-Quang)	一九三三年	匿名會社 資本金 8,000,000法	
炭鑛及金屬鑛業會社 (Société Industrielle de Charb. et de Mines Métalliques)	瀝青炭=フアン・メ (Phan-Me)	一九三四年	匿名會社 資本金 30,000,000法	
東京錫及ウオルフラム製造會社 (Etanis et Wolfram du Tonkin)	錫、ウオルフラム=ティン・チン、ツク (Tinh-Tin)	一九二二年	匿名會社 資本金 20,000,000法	

上部東京錫鑛山會社 (Société des Mines d'Etains du Haut-Tonkin)	同 右 * (Pia-Oue)	一九〇三年	匿名會社 資本金 三,000,000法
印度支那錫山探鑛開發會社 (Société d'Etudes et d'Exploitations minières de l'Indochine)	錫ニフォンチウ (Phonhon) 金ニカム・タット (Cam-Keut)	一九〇〇年	匿名會社 資本金 一五,000,000法
東西錫請負會社 (Cie Fermière des Etains d'E-O)	錫ニボネン (Boneng)	一九〇〇年	匿名會社 資本金 四,000,000法
カンモン錫會社 (Société des Etains du Cammon)	C.F.E.E.O社の資本金の五% を有す	一九二七年	匿名會社 資本金 四,000,000法
印度支那錫會社 (Société des Etains de l'Indochine)	鐵區をC.F.E.E.O會社に賃貸す	一九二六年	匿名會社 資本金 四,000,000法
印度支那錫山金屬會社 (Cie Minière et Métallurgique de l'Indochine)	亞鉛ニチヨ・タイエン鐵山 (Mine Cho-Dien) 精煉場ニクワン・ナン・ハン (Quang-Yen)	一九二九年	匿名會社 資本金 二,000,000法
印度支那錫山農業開發會社 (Société Indochinoise d'Exploitations minières et Agricoles)	金ニボン・ミョ (Hong-Mieu)	一九二九年	匿名會社 資本金 一,300,000 佛印比弗
印度支那商工業會社 (Cie Indochinoise de Commerce et d'Industrie)	鐵及マンガンを東京に賣鐵す	一九二八年	匿名會社 資本金 一,000,000 佛印比弗
東京新設鑛製造會社 (Société Nouvelle des Phosphates du Tonkin)	機 (海防に工場を有す)	一九二四年	匿名會社 資本金 七,200,000法
佛蘭西亞細亞石油會社 (Cie Franco-Asiatique des Pétroles)	石油類の輸入並に供給	一九二一年	匿名會社 資本金 五,000,000法

スタンダード石油會社 (Standard Vacuum Oil Company)	同 右	一九二五年	匿名會社 資本金 一〇,000,000 米弗
テキサス會社 (Texas Company)	同 右	一九二九年	匿名會社 資本金 五,000,000米弗
印度支那佛國蒸溜會社 (Société Française des Distilleries de l'Indochine)	アルコール、無水アルコール	一九〇一年	匿名會社 資本金 一〇〇,000,000法
印度支那人工ポルトランド・セメント會社 (Société des Ciments Portland Artificiels de l'Indochine)	海防にセメント工場を有す	一九二九年	匿名會社 資本金 四,500,000法
印度支那煉瓦製造會社 (Société des Tuileries de l'Indochine)	耐火煉瓦、三工場を有す	一九二九年	匿名會社 資本金 一,500,000法
極東酸素、アセチレン製造會社 (Société d'Oxygène et Acétylène d'Extrême-Orient)	海防及西貢に工場を有す	一九二九年	匿名會社 資本金 一〇,000,000法
極東硝子製造會社 (Société des Verres d'Extrême-Orient)	海防に硝子工場を有す	一九二三年	匿名會社 資本金 一五,000,000法
極東油脂石鹼製造會社 (Huilleries et Savonneries d'Extrême-Orient)	西貢に工場を有す	一九二三年	匿名會社 資本金 六,500,000法
印度支那製紙會社 (Société des Papiers de l'Indochine)	ダツプ・カウ (Dap-Cau) 及ウイ ネトリ (Vietri) に工場を有す	一九二三年	匿名會社 資本金 六,500,000法
印度支那オトニオト社 (Omnium Indochinois)	フネーサ火藥 (Explosifs Phu-Xa)	一九二六年	匿名會社 資本金 二,500,000法

株 と 利 益 (眞偽を保證せず)

會社名	額面	株の最高及最低相場			配當金			種類	利		益
		一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三七年	一九三八年	一九三九年		一九三七年	一九三八年	
東京佛國炭鐵會社 (Sic France des Charb. du Tonkin)	三〇〇	一九三〇	一九三五	一九四〇	一七・五	一六四	價却未済	三六、一三八	三三、七三七	三三、四四九	?
メ・ノ・トリト炭鐵會社 (Sic des Charb. du Dong-Trieu)	一〇〇	八五・九	五五・六	一五・六〇	〇	〇	賣上高	七、一三四	七、七二六	六、三〇〇	?
ムン・ドン・タン炭鐵會社 (S. C. Along & Dong-Dang)	一〇〇	一五・五〇	一四・三〇	三・六〇	〇	〇	賣上高	二〇一、四九九	九五、七八七	?	?
チヤン・クワン炭鐵會社 (S. C. Tuyen-Quang)	一〇〇	三三・一〇	三九・五	一三・四	〇	〇	賣上高	三九九、五六八	三四九、五九〇	二〇一、二〇五	?
印度支那炭鐵金屬鑛山會社 (S. I. C. Mines Metalliques)		相場無	無	シ	〇	〇		四九九、五九四	?	?	?
東京錫ウオルフラム會社 (Etain Wolfram du Tonkin)	一〇〇	一八・九	一九・九	二・九〇	三五	三五	純益	二、〇九九	八、八二五	七、〇七四	?
上東京錫會社 (Etain du Haut-Tonkin)	舊五〇〇	相場無	無	シ	二七・二五	三三・〇〇	純益	一、四三三	七、九〇二	七、八〇三	?
同右	新二〇〇	相場無	無	シ	一五・七	一五・七	純益	一、四三三	七、九〇二	七、八〇三	?
S. E. E. M. I 社	一〇〇	三三・五	三六・五	三三・一	三五・二	四三・五	純益	六、五七五	九、一八〇	四、五二九	?
C. F. E. E. C 社		相場無	無	シ	〇	〇	價却未済	四九九、〇八一	二、八四三	五、四八	?
カンモン錫會社 (Etain Cammou)		相場無	無	シ	〇	〇	價却未済	五四、九六八	?	?	?

印度支那錫會社 (Etain Indochine)	一〇〇	二一・一〇	二五・三	一四・六九	五	四	賣上高	六、三七一	四、九八五	五、四三八	?
C. M. M. I 社	二五〇	一八・七	二二・三	一七・〇	一	一	純益	六〇八、八四六	?	?	?
S. I. E. M. A 社		一九三八年に設立	一七・四	一五・六	一	一	純益	九七一、七三五	九七四、〇三三	?	?
印度支那商工業會社 (C. Industries de C. E. d'Indochine)	一〇〇	一七・〇	二〇・四	一六・五	〇	〇	純益	九七一、七三五	九七四、〇三三	?	?
東京新設機製造會社 (Sic Nlle Phosphates du Tonkin)	一〇〇	一六・八	一四・三	一四・九	二五	二五	純益	一七、八八八	四、六二七	九、八〇	?
印度支那佛國蒸溜會社 (S. F. Distilleries Indochine)	一〇〇	二二・〇〇	二七・五	二五・〇	二五	二五	純益	一七、八八八	四、六二七	九、八〇	?
人工ポルトランドセメント會社 (S. Ciments Portland Artificiels)	一〇〇	一五・五	一四・六	一四・七〇	二	二	分	七、一〇〇、〇〇〇	一一、一七〇、〇〇〇	?	?
印度支那煉瓦製造會社 (Sic Tuileries Indochine)	一〇〇	相場無	無	シ	一〇	一	賣上高	三、五五三、五五九	五、〇七九、九三九	?	?
極東酸素アセチレン會社 (S. Oxygene Acetylene Ext-Orient)	二五〇	四〇・〇	三〇・〇	六五・〇	五〇	五〇	賣上高	三、五五三、五五九	五、〇七九、九三九	?	?
印度支那製紙會社	五〇〇	—	—	—	五〇	五〇	純益	一、五九二、六七四	九三九、一九五	?	?

持 分

會社名	持分最高及最底相場			持分率		
	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
ドン・トット炭鑛會社 (Société des Charbonnages du Dong-Trien)	500-1500	500-1800	1000-1300	0	0	
アロンドンタン佛國炭鑛會社 (Société Française Ch. Along & Dong-Dang)	20-200	20-200	20-200	0	0	
上部東京錫會社 (Etain du Haut-Tonkin)	相	場	無	88.6%	1,833.6%	
印度支那鑛業探鑛開發會社 (Société E. Minieres de l'I.C.)	381-500	100-200	197-200	33.2%	29.3%	86.3%
印度支那錫會社 (Etain Indochine) (120)	200-900	281-400	221-500			
人工ポルトランド・セメント會社 (Société Ciments Portland Artificiels) (10)	200-500	200-200		1%		
印度支那製紙會社 (Société Papeterie de l'Indochine)			100-200	19.5%	9.8%	

結語

販路の絶えざる増加と鑛物及工業製品の相場高に依り印度支那開發事業は商業的に極めて有利なる情況に置かるゝことゝなつた。

土着労働力の不足がなければ生産力は施設能力の限度まで發展したであらう。にも拘らず生産高は著るしく増大した。大戰に依りて印度支那の經濟情況は強化された。運賃の値上りは石炭の歐洲向け輸出を幾分阻害したが又一方、當地方及極東に有利なる販路を有する多數製品の増産を可能ならしめた。鑛石の需要量は莫大となつた。日本及支那の消費量は日々増加する一方である。之が爲に鑛業及化學工業に於ては生産擴充計畫を立つるに至つたのである。一九三八年乃至三九年の好景氣により巨額の資金を新規建設費に投ずるを得しめた。經濟的利益は少であるが、國家的利益の大なる企業に對しては總督府が直接之れに關與することゝなつた(例へば無水アルコール、マスク用木炭)。

併し乍ら佛國への大量徵召は勞力不足に對し拍車をかけるに至つた。之れと同時に一部佛人職員が動員された。茲に於て會社法を改正し、又一九四〇年當初には工業勞力保持の爲強力なる處置をなすの必要に迫られた。これに依り、一九三八年度に正規の發展をなしつゝあつた生産高は(一部生産品を除き)一九三九年當初、大戰開始以來更に飛躍的發展を示した。

或ひは國家的利益の爲、或ひは商業的利益の爲に協力する各人の努力は相俟つて一九四〇年度に更に高き數字に達せしむるであらうことは想像に難くない。

一九四年度迄には現在の計畫は大部分實行に移され、生産高は諸種の部門に於いては大いなる割合を以て増加して居るであらう。

大戰は印度支那を刺戟して工業化せしめ、且つ極東市場に於ける其の在來の任務を増大せしめたであらう。が、然し大戰終結に依り印度支那經濟が致命的打撃を蒙むるとは考へられない。戰亂は必要諸設備の設置を促進し之に依り工業者の利得を増加せしめたるに過ぎない。

反之、日支紛争の終結は或種産業に對し打撃を與へることゝならう。日本は支那の莫大なる資源を開發するであらう。故に現在の生産高が需要よりはるかに低い事は問題とするに足らない。さもなければ、日支協商の成立したる曉には重大なる危険が到来するであらうからである。斯る状態にあればこそ炭鑛業者は需要が著るしく減少せる事實に相對し乍ら冷靜たり得るのである。

附録 一九四〇年一月乃至四月の生産高

一月及二月を一括し一九三九年との比較對照に便ならしめた(テート祭は毎年同一日時に行はれるとは定つて居ない)。大鑛山のみに止める。

燃料

	一九三九年				計	一九四〇年				計
	一、二月	三月	四月	月		一、二月	三月	四月	月	
S・F・C・T社	二〇六三五	一六四九六	一四八七五	五一九七〇	二七〇五〇	一七六一四	一六〇六五	六三三〇	六三三〇	
S・C・D・T社	七五八〇	四一四〇	五二五〇	一六三〇〇	七三五四〇	五七五五	六〇六〇	一九七〇五	一九七〇五	
アロン・ダンタン (Along D. Dang)	六三八〇	五二〇	六三〇	一七九〇	二九一〇	七二〇	八〇五	二八一〇	二八一〇	
タンノール (Tanhour)	二九五〇	一〇三〇	一〇九〇	七〇〇	八七四五	五三七五	五八〇〇	一九九〇	一九九〇	
セギー鑛山 (Mine Seguy)	一三三〇	五五七五	六三二〇	二三四五	五七九五	四五五〇	四四九五	一九九〇	一九九〇	

ジンヨ (Bieho)	0	1000	四四五	二四四五	九一〇	一七〇〇	一六一五	四三五
ネプチューン (Nephune)	七五五	四三〇	四六五	一六五〇	五七三〇	二七二〇	二二〇	一〇三〇〇
ボ・ハ (Bo-Ha)	—	—	—	—	二五〇〇	一五五〇	二五〇〇	五五八〇
無煙炭	三〇四五〇	三三三五	二九四〇五	七五五一九	三八七九〇	二五五〇五	二五八九六五	九〇六六〇
テュエン・クワン (Tuyen-Quan)	二二〇	一六〇	一七〇	六二〇	三三四〇	一八八〇	一八〇〇	六二五〇
ファン・メー (Phan-Me)	四六〇	二〇一〇	三二〇	一〇三〇	五二三五	三八七〇	三九三〇	一三九五
瀝青炭	七二〇	四六〇	五〇八〇	一六九五〇	七五六五	五七五〇	五七〇	一九七五
計	三三六四〇	三三〇一五	三三三四八五	七七一四〇	三九四七五五	二六三三五	二六四七五	九二七五

錫及ウオルフラム

S・E・E・M・I社	一〇三・五	六・〇	五九・〇	三三・五	一〇五・〇	六〇・〇	五六・〇	三三・〇
C・F・E・E・O社	四五・〇	二二・〇	二八・五	九六・五	六四・〇	四〇・二	三二・二	一五・二
EWT—EHT	一〇三・〇	五三・五	六〇・〇	二二五・五	九二・五	四八・〇	四五・四	一八・九
Sn 合計	二〇五・五	一三・五	一四七・五	五三六・五	二六一・五	一四八・〇	一三三・六	五四三・一
EWT—EHT (Wo3)	三九・〇	一七・五	二三・五	八〇・〇	三九・〇	一九・七	一八・五	七・二

亜鉛 (鑛石中の金属含有量)

		一九三九年			一九四〇年		
		三	四	一	三	四	
		月	月	月	月	月	
C・M・M・I社		七八・〇	四五・〇	一六四・五	七〇・〇	五四・〇	五九・〇
S・I・E・M・A社		一四・七四	四・六七〇	三四・九七	一五・五五九	一三・三〇七	二・三八〇
E・W・T社		—	—	—	一・二〇〇	〇・五六三	〇・七六七
計		一四・七四	四・六七〇	三四・九七	一六・七五九	一三・八七〇	二・二四七
勞務者數							
計		五八、一八〇	五六、二八〇	四九、〇四〇	五一、七六五	五一、四七六	
燃料	山	五〇、七〇〇	四八、八七〇	四二、一一五	四三、九六五	四四、〇二〇	
金	山	七、四八〇	七、四一〇	六、九二五	七、八〇〇	七、四五六	

以上を總括するに一九三九年度に比して左の如く明かに増産を示してゐる。

石炭……………一九%
 鉛……………一二%

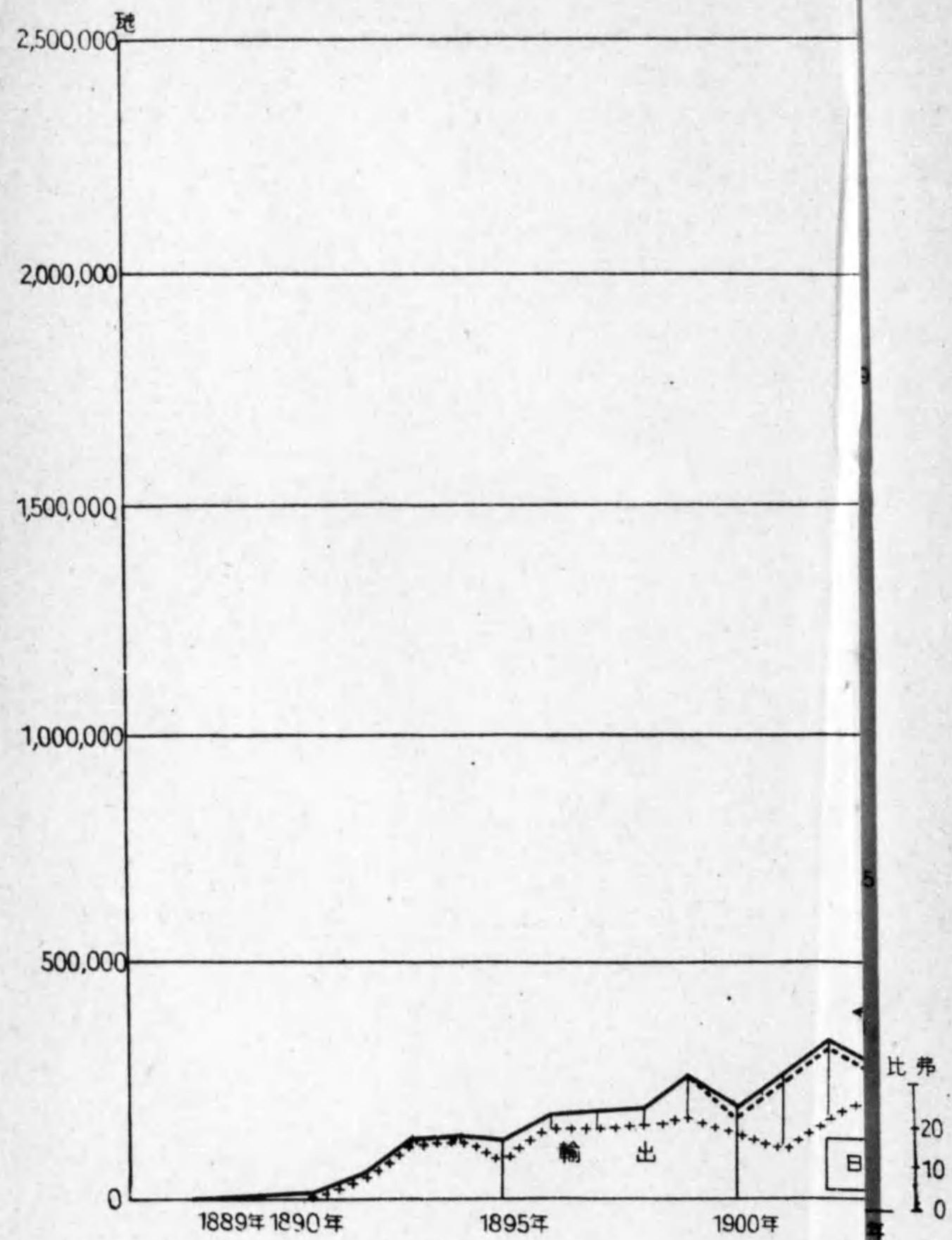
錫……………一%
 金……………一二%

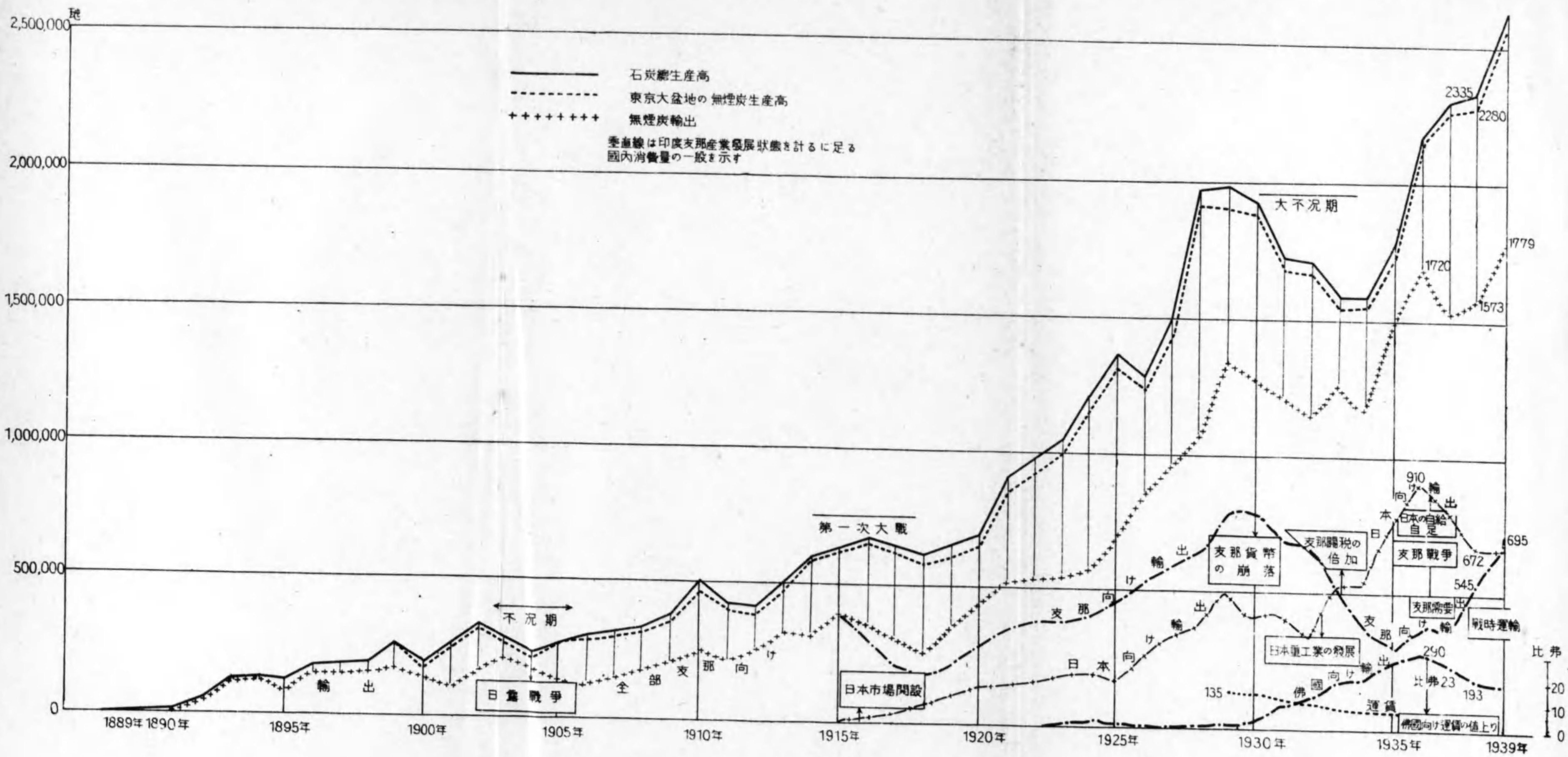
ウオルフラム丈は三・五%の減産をなしてゐる。

勞務者に付いては監督官廳に於いて採られたる諸般の方策宜しきを得て情況は殆んど安定さるるに至つた。之れを一九三九年度の生産高と比較すれば

	一九三九年	一九四〇年一月乃至四月迄の數字 ×3
無煙炭	二、五六一、〇二五	二、七〇七、九八〇
青炭	五四、一八六	五七、二二五
錫	一、四九八	一、六二六
ウオルフラム	三〇九	二三二
鉛	五、八六七	五、五一一
金	一一〇・七六一	一二八・三二八

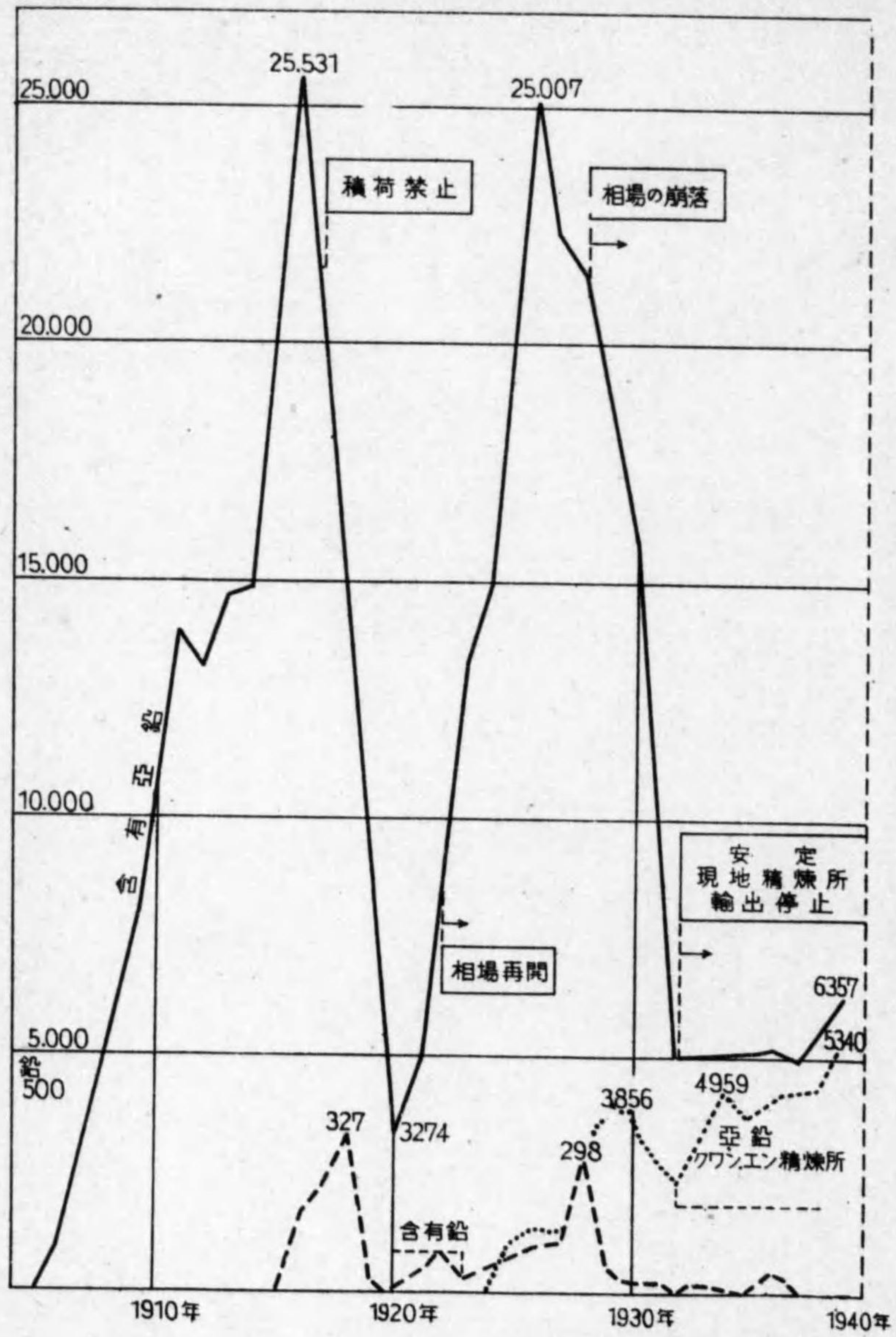
第一に一九四〇年一月より四月迄の數字は大鑛山丈のものであり、第二に四ヶ月間の生産高の三倍は常に年産高より低い(テート祭の行はれる月(二月)は減産するを常とす)ことを考慮する時は殆んど全分野に於いて大增産をなしたことを認め得るのである。

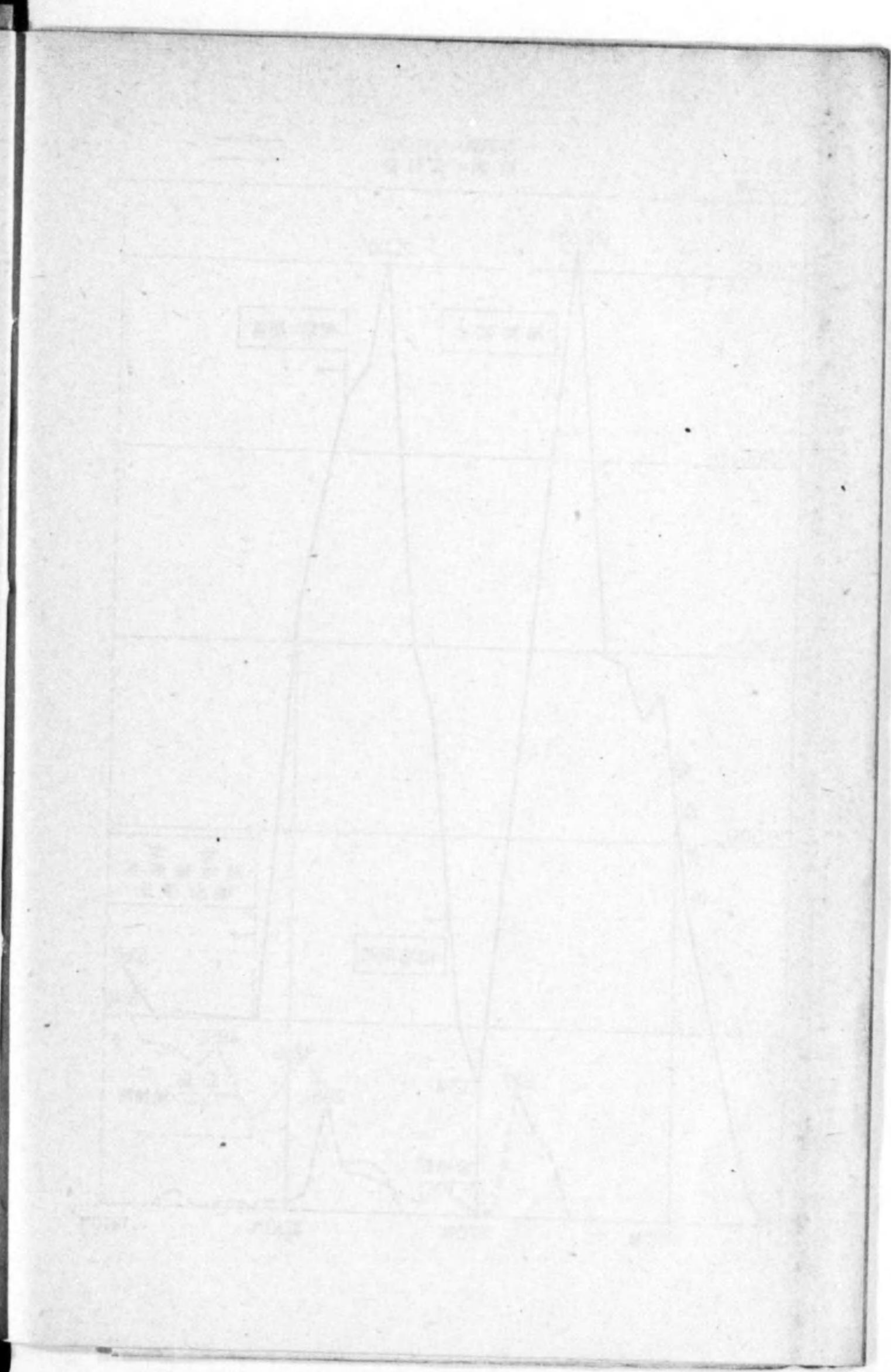
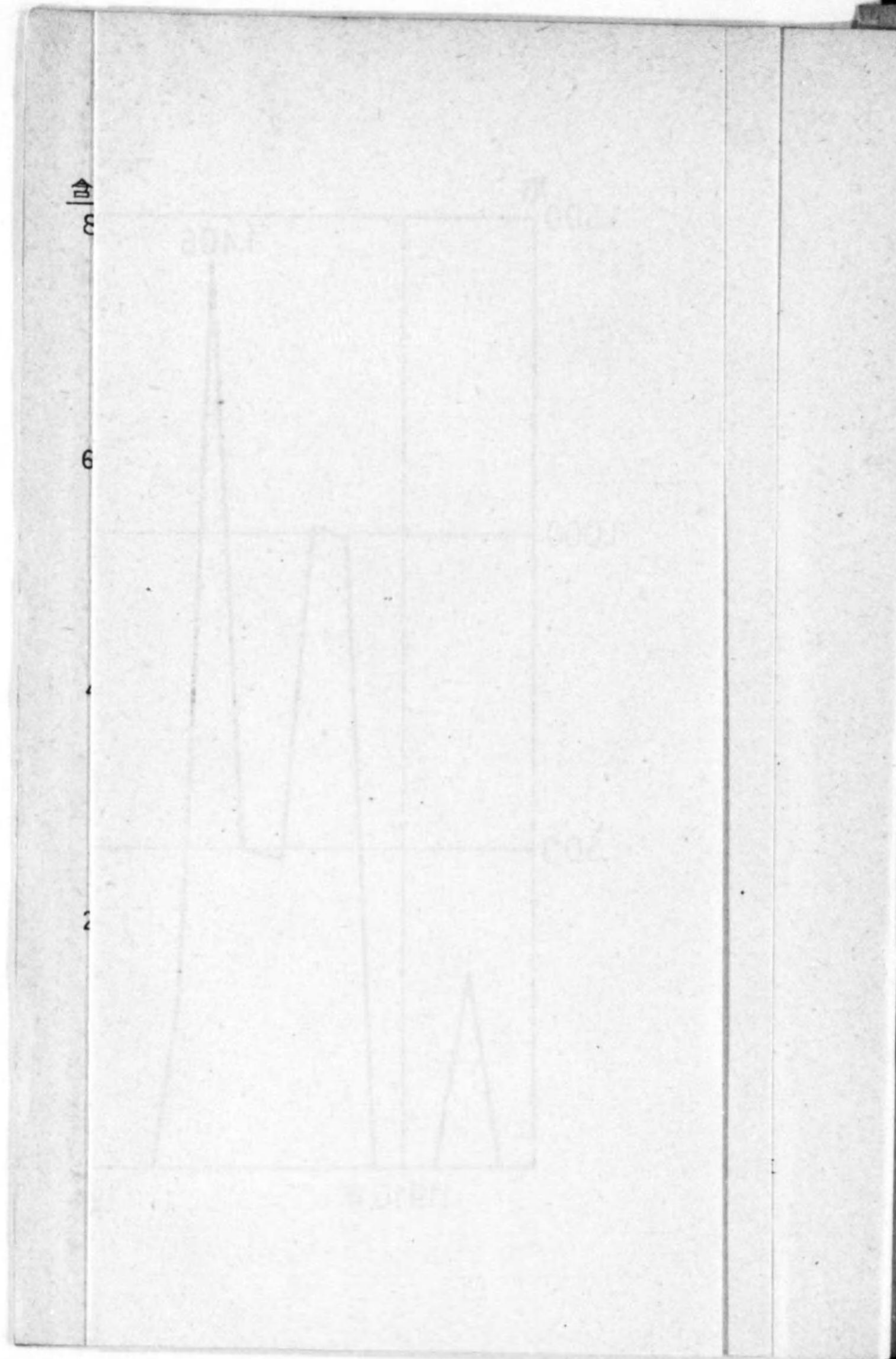




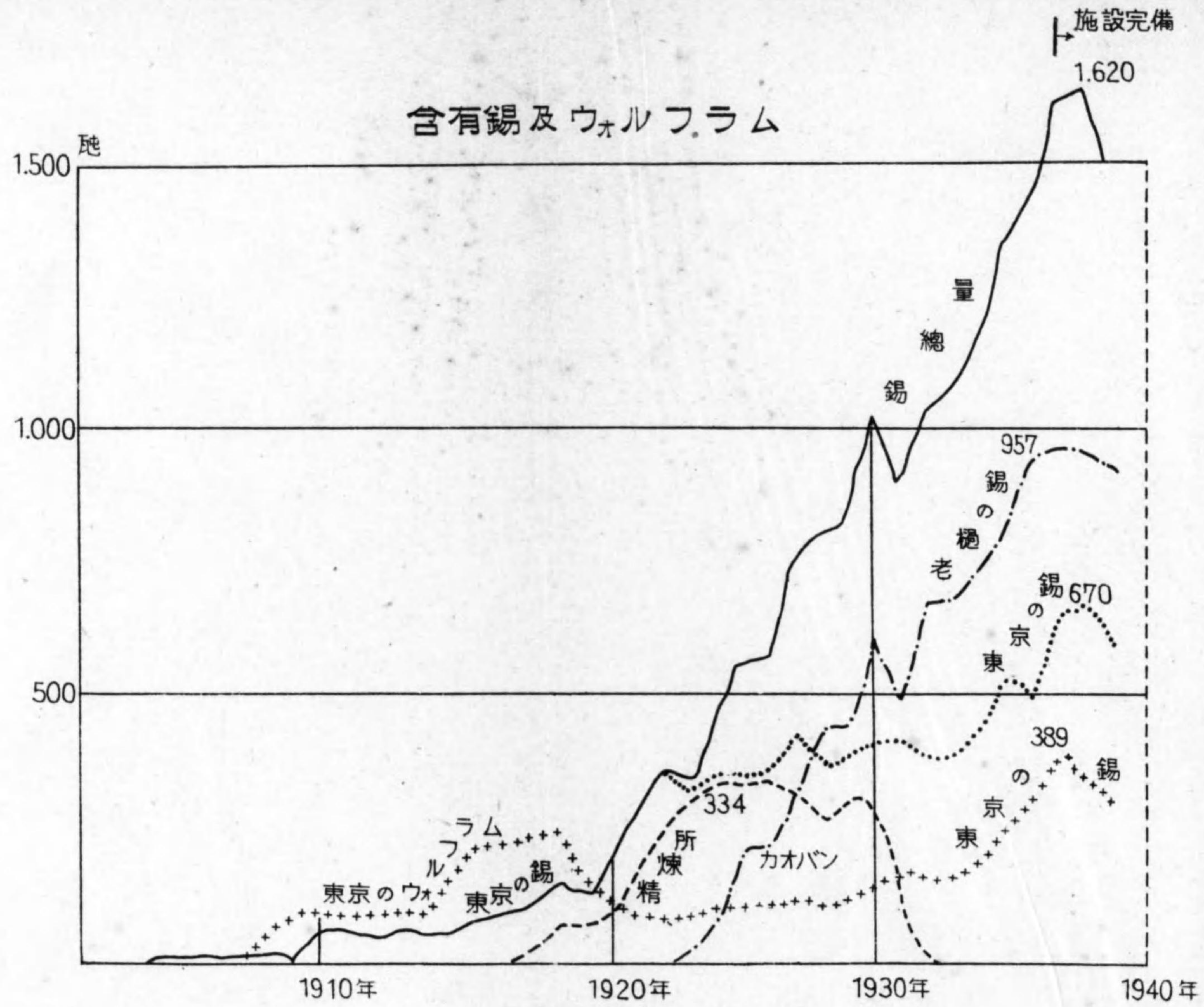
亞鉛
27,000 噸

亞鉛礦の含有亞鉛
鉛礦の含有鉛

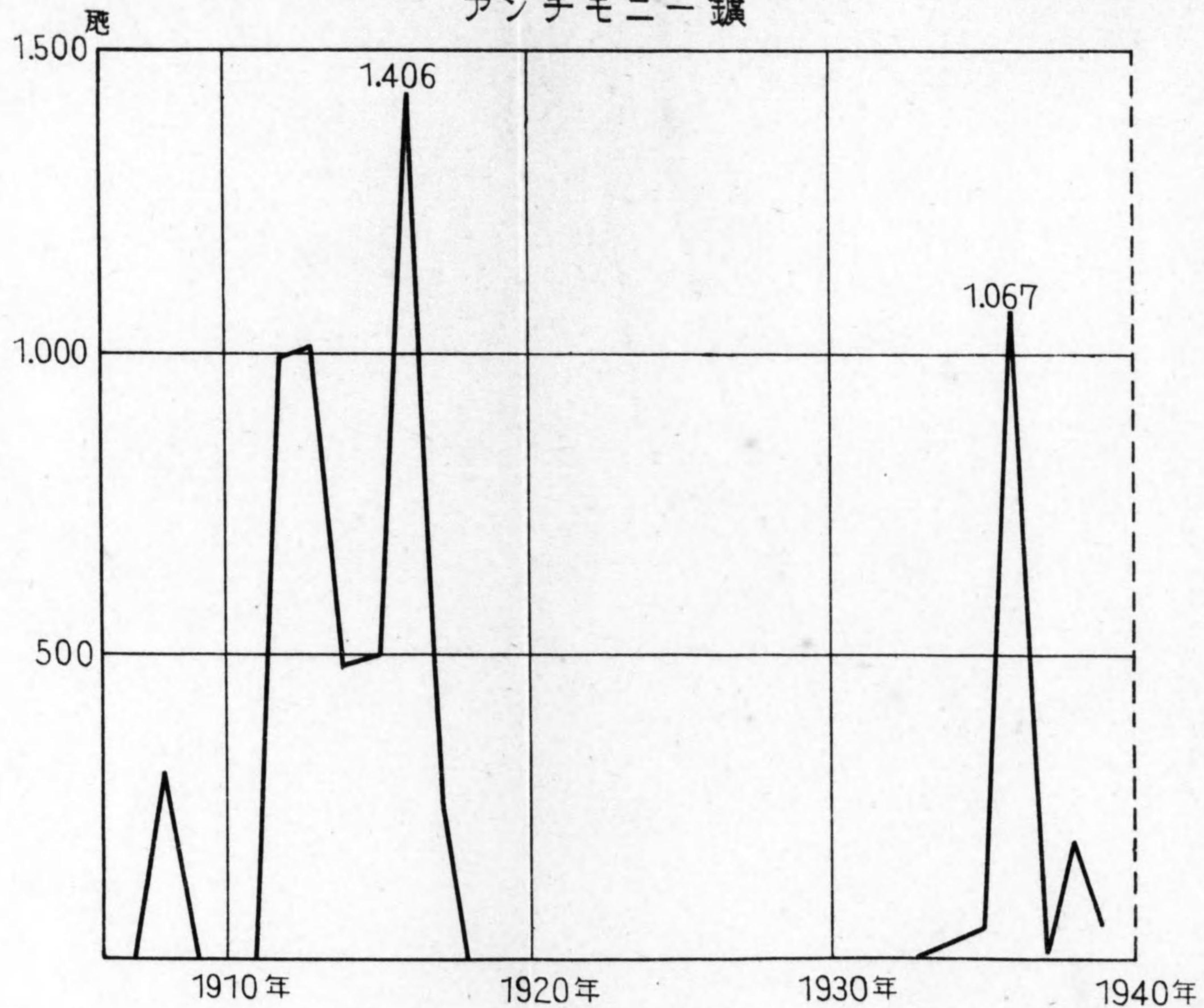


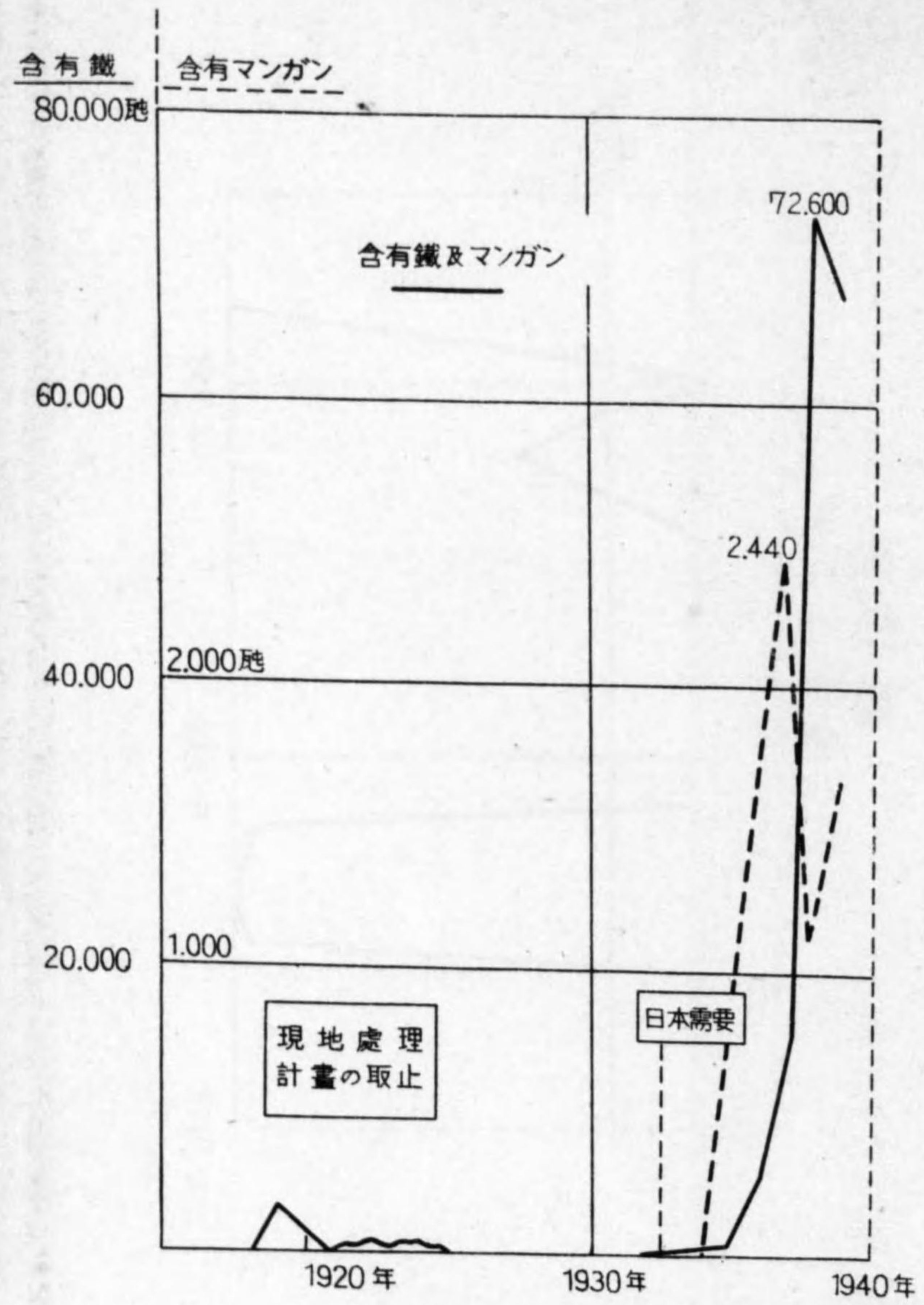


含有錫及ウォルフラム

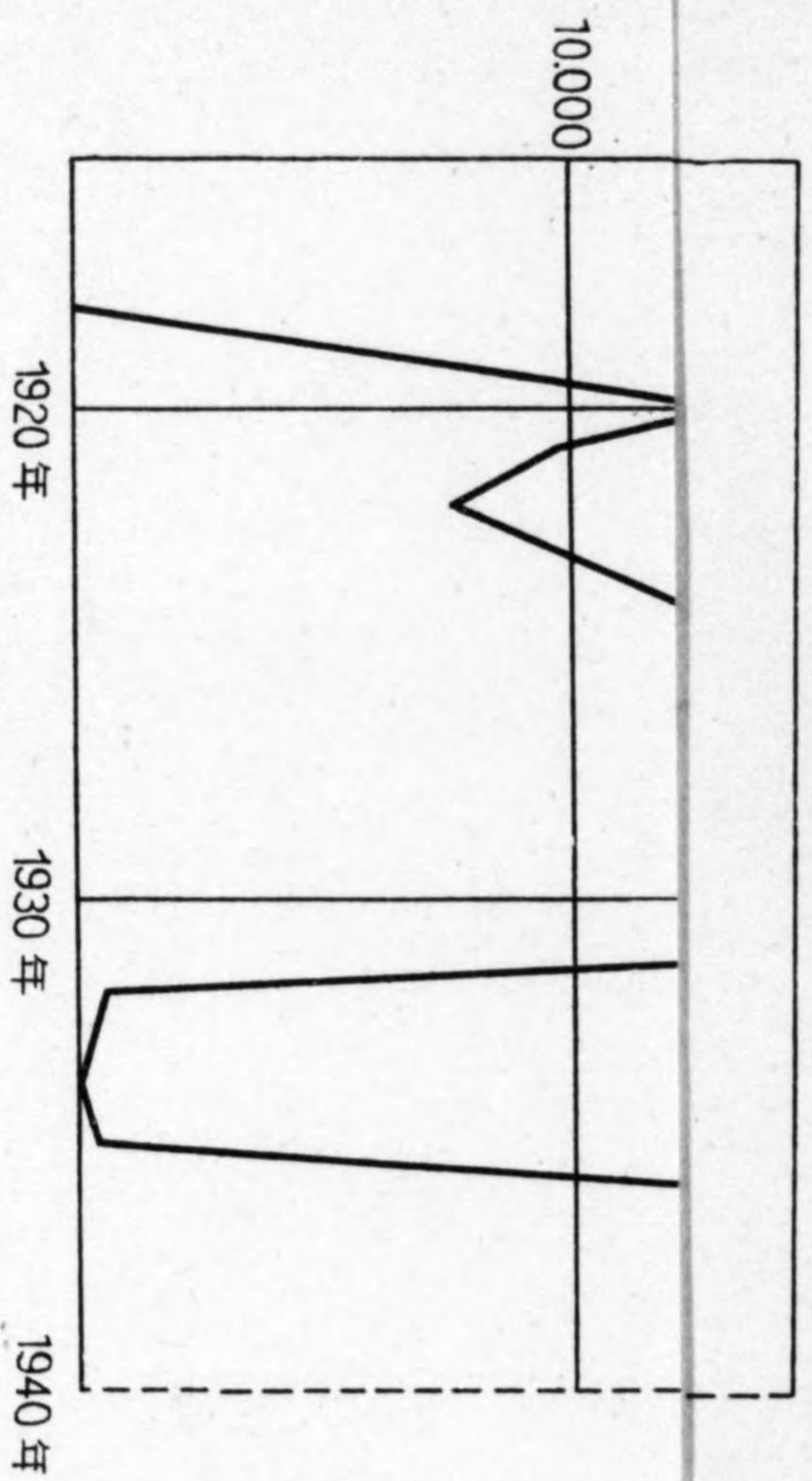


アンチモニー 鑛

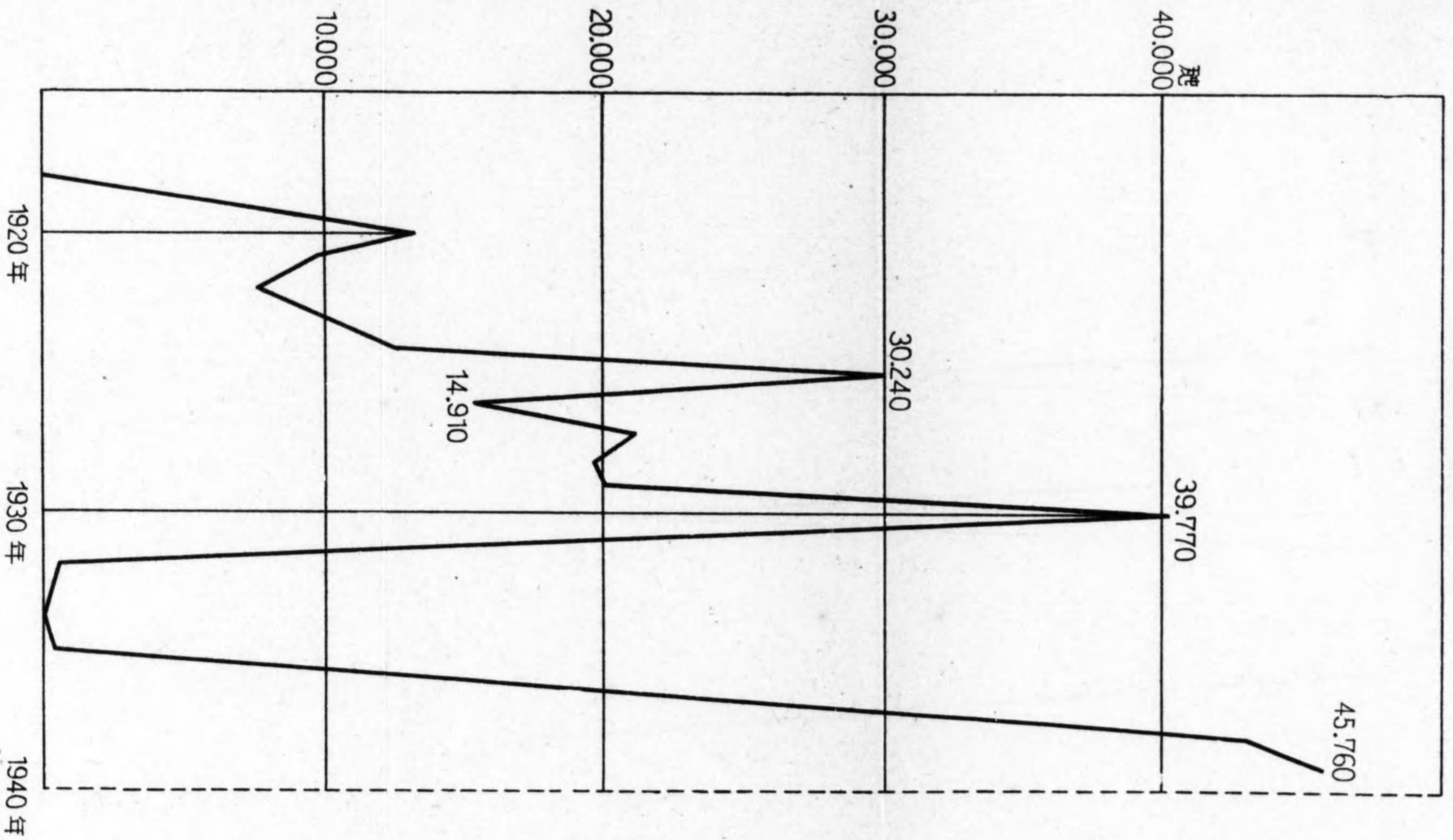




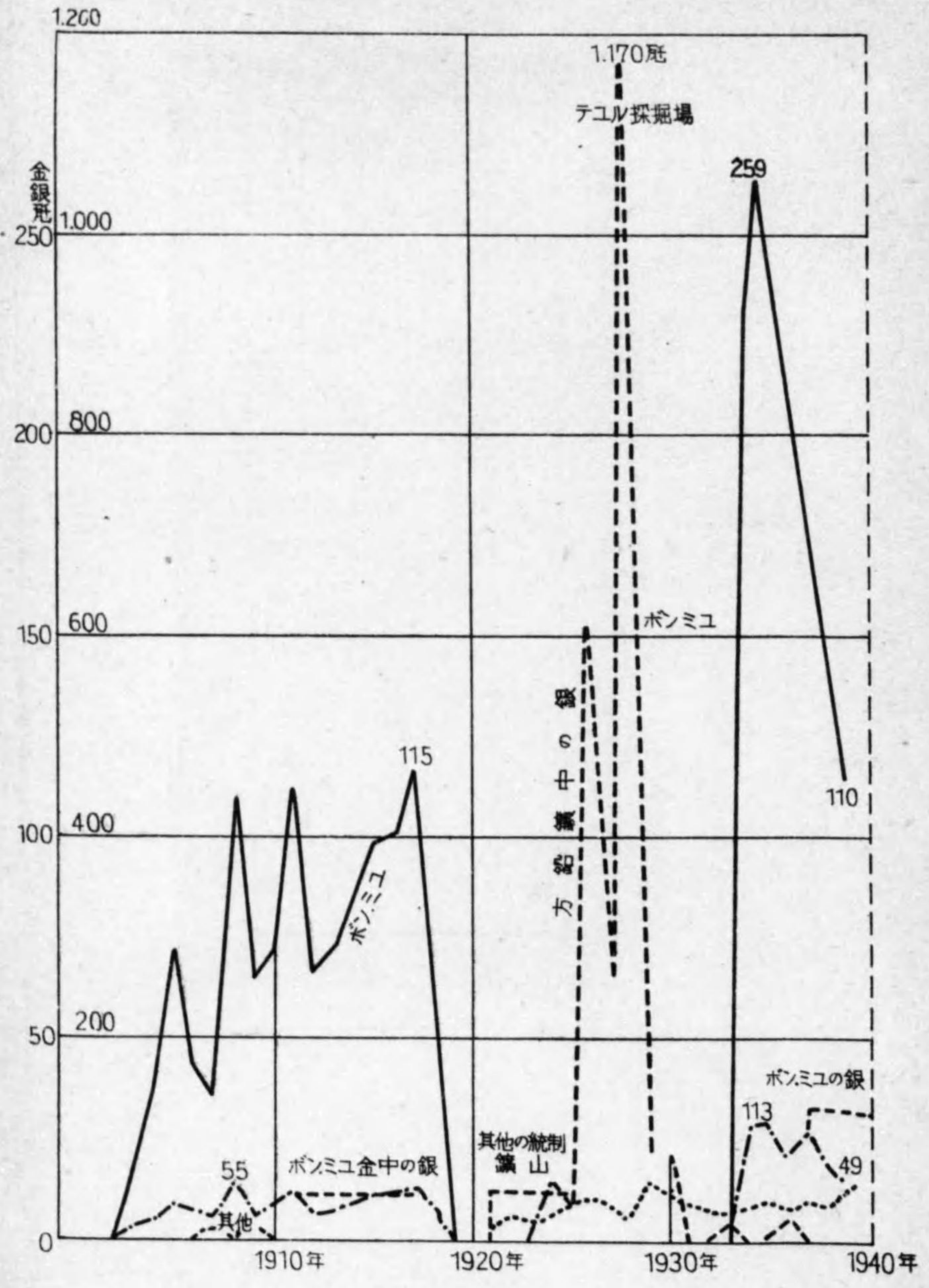
粗製磷
(鑛山採掘量)



粗製磷
(鑛山採掘量)



銀 貯
 含有金
 含有銀



929
150

製本控

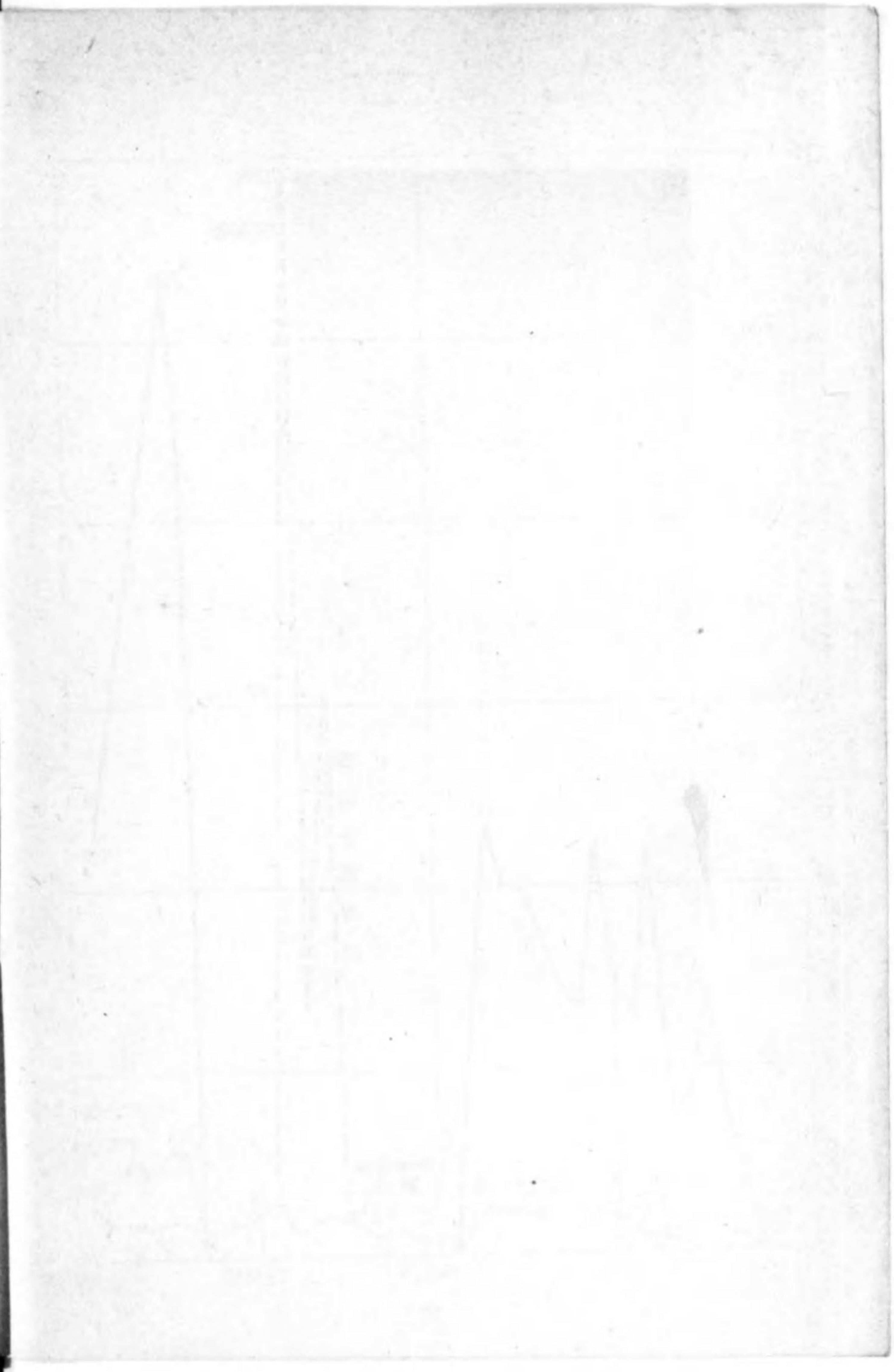
929	函	150	號	年	月	日
一九三九年夏 印刷店 及化学工業						
						冊

備考

書 刊 十 五 日

昭和十七年七月十五日 印刷
昭和十七年七月二十日 發行

(非賣品)



929
150

日本出版文化協會

昭和十七年七月十五日印刷
昭和十七年七月二十日發行

(非賣品)

出文協承認
了150186號

不許
複製

編輯
社團
法人
海外鑛業協會
代表者 井上 隆四郎

印刷人
東京市神田區錦町三丁目十六番地
山岡 文平

印刷所
東京市神田區神保町一丁目五十九番地
神田印刷所

東京市豊町區有樂町一ノ五(日本工業館)

社團
法人
海外鑛業協會

日本出版文化協會員番號三六〇七番

發行所

929

150

終

22
4